

# 博 多 170

— 博多遺跡群 第 203 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1405 集  
〈第 4 分冊〉

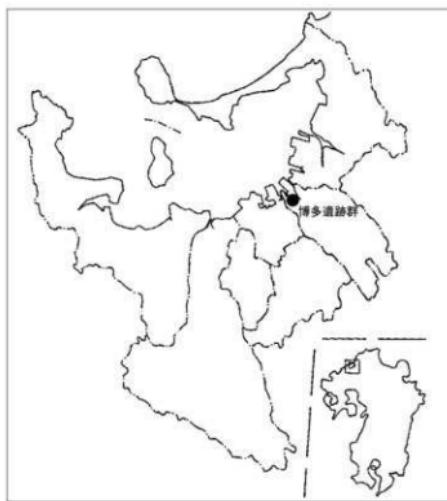
2021

福岡市教育委員会

# 博 多 170

—博多遺跡群 第 203 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集  
〈第 4 分冊〉



調査番号 1427  
遺跡略号 HKT-203

2021

福岡市教育委員会



## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに .....	第1分冊・1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境 .....	4
第Ⅲ章 調査の記録 .....	9
1. 調査の概要 .....	9
2. 1区の調査 .....	11
3. 2区の調査 .....	13
4. 3区の調査 .....	35
5. 4区の調査 .....	197
6. 5区の調査 .....	227
7. 6区の調査 .....	249
8. 7区の調査 .....	295
9. 8区の調査 .....	第2分冊・1
10. 9区の調査 .....	121
11. 10区の調査 .....	第3分冊・1
12. 11区の調査 .....	39
13. 12区の調査 .....	51
14. 13区の調査 .....	131
15. 14区の調査 .....	141
16. 15区の調査 .....	169
17. 16区の調査 .....	209
18. 17区の調査 .....	229
19. 18区の調査 .....	235
20. 19区の調査 .....	271
21. 20区の調査 .....	275
22. 21区の調査 .....	287
23. 22区の調査 .....	301
24. 23区の調査 .....	311
25. 24区の調査 .....	第4分冊・1
26. 25区の調査 .....	44
27. 26区の調査 .....	57
28. 27区の調査 .....	65
29. 28区の調査 .....	88
30. 29区の調査 .....	96
31. 30区の調査 .....	117
32. 31区の調査 .....	120

33. その他の調査	124
34. 金属製品・生産関連資料等について	128
35. 動物遺存体について	243
第IV章 まとめ	253
1. 弥生時代中期	253
2. 弥生時代後期～古墳時代	254
3. 古代	257
4. 中世	258
5. 近世	260

〈付 編〉

1. 博多遺跡群第203次調査出土資料の鉛同位体比分析について (国立歴史民俗博物館 斎藤 努)	263
2. 博多遺跡群第203次調査出土遺物の金属学的調査について (大澤 正己・パリノ・サーケイ株式会社)	266
3. 博多遺跡群第203次調査出土の炭化種実について (佐々木 由香・バンダリスダルシャン(パレオ・ラボ))	292
4. 博多遺跡群第203次調査出土試料の年代測定について (山形大学高感度加速器質量分析センター)	297
5. 博多遺跡群第203次調査出土の人骨について (九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター)	301
6. 博多遺跡群第203次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査について (国立歴史民俗博物館 藤尾 慎一郎)	316
7. 博多遺跡群第203次調査出土弥生中期人骨のDNA分析について (国立科学博物館 篠田 謙一)	323

## 25. 24 区の調査

### 1) 概要 (Fig.4 (23 区) Ph.1)

24 区は、西工区にガイドウォール (SMW) を設置するための立会調査である。工事箇所は北側が延長 45.0m、幅 2.0m、南側は延長 66.0m、幅 1.2m である。即日中に埋め戻さなければならない場所であったため、当日中に覆工板設置が終了する長さを調査対象とし、発掘調査は工事の工程に合わせて行った。そのため、1 区間の長さはまちまちであり、連続して調査をすることはできなかった。調査順にその区間を①～⑩と付け、遺構の位置等を示す (24.23 区の調査 Fig4 参照)。調査は南側の①～⑩を 2015 年 11 月 26 日から 2016 年 1 月 9 日まで、北側の⑪～⑬を 2016 年 5 月 25 日から 7 月 21 日まで行った。また、南側の⑤～⑨は現道路面から GL180cm まで調査可能であったため、第 4 面まで調査できたが、それ以外は、土砂崩落の危険があるため、GL150cm までしか掘削できなかつた。そのため、3 面もしくは 2 面までの調査しかできていない。なお、⑥については、表柏を確認したため、その箇所のみ、急速、仮設の土留め矢板を設置してもらい、調査が可能となった。調査区は東西方向に多くの埋設管が存在するため、遺構は削平を受けていると考えていたが、北側は想定以上に遺存状況は良好であった。②⑩の南側に電力管 (Ph.25)、⑯⑰に水道管が布設される。南側のガイドウォールの北側と南側は電力管が平行で埋設され、大きく削平を受ける (Ph.2-11)。なお、⑧⑨は煉瓦やコンクリートの基礎に搅乱される (Ph.12)。

立会調査は、第 1 面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、下面の調査を繰り返した。遺構面は発掘調査を行った他の調査区を参考に設定した。

検出した主な遺構は弥生時代中期前葉の表柏墓 1 基、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡 3 軒、土坑 7 基、古代の土坑 6 基、古代末から中世の溝 1 条、土坑 16 基、他にピットである。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、滑石製品等がコンテナケース 14 箱分出土する。



Ph.1 調査区遠景

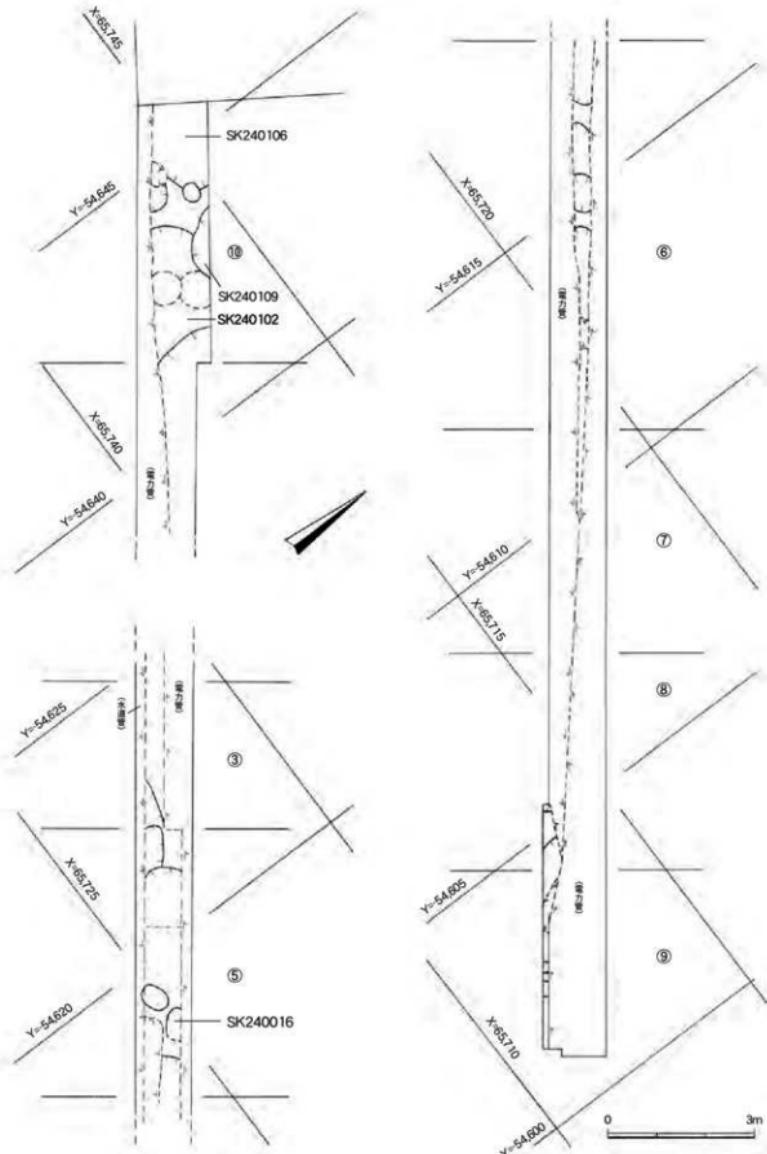


Fig.1 第1面全体図① (1/100)

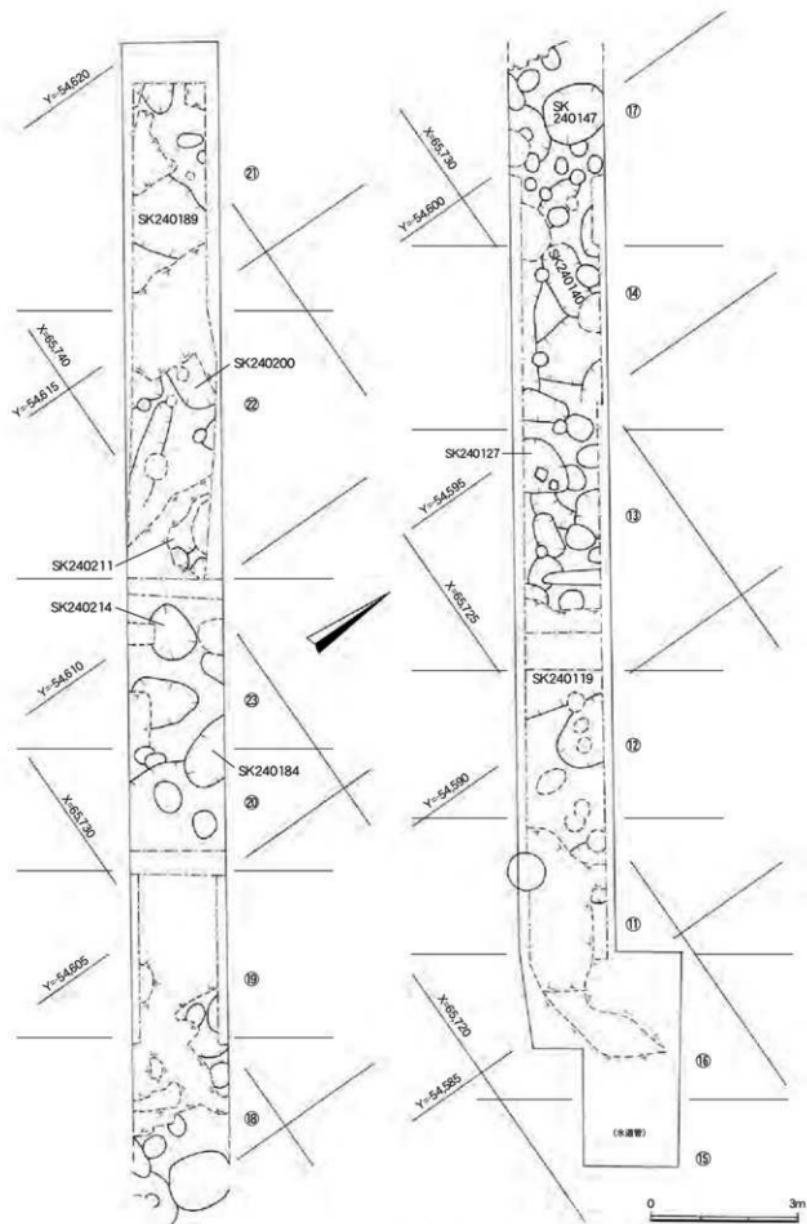
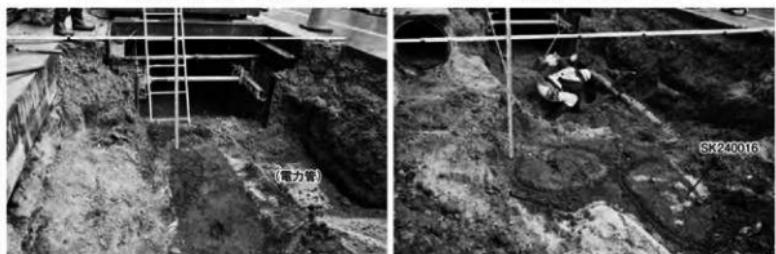


Fig.2 第1面全体図② (1/100)



Ph.2 ④攪乱(電力管)(東から)

(電力管)

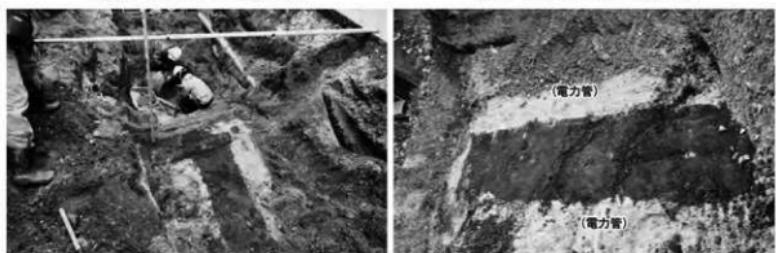


Ph.4 ⑤西-1面(東から)

Ph.5 ⑤中央-1面(東から)

(電力管)

SK240016

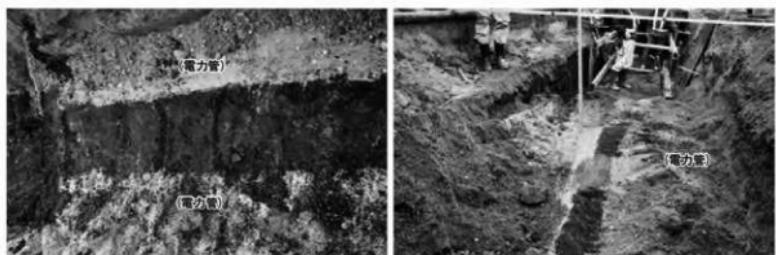


Ph.6 ⑤東-1面(東から)

Ph.7 ⑥西-1面(東から)

(電力管)

(電力管)



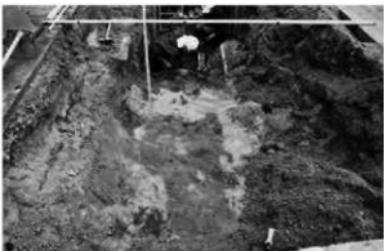
Ph.8 ⑥中央-1面(東から)

Ph.9 ⑥東-1面(東から)

(電力管)



Ph.10 ⑦西-1面（東から）



Ph.11 ⑦東-1面（東から）



Ph.12 ⑧西（搅乱）煉瓦建物（東から）



Ph.13 ⑧東-1面（西から）



Ph.14 ⑨-1面（東から）



Ph.15 ⑩西-1面（南から）



Ph.16 ⑪東-1面（南から）



Ph.17 ⑫-1面（北西から）



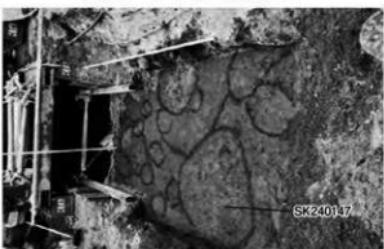
Ph.18 ⑫ -1面（北西から）



Ph.19 ⑬ -1面（北西から）



Ph.20 ⑭ -1面（北西から）



Ph.21 ⑮ -1面（北西から）



Ph.22 ⑯ -1面（北西から）



Ph.23 ⑰ -1面（北西から）



Ph.24 ⑱ -1面（南東から）



Ph.25 ⑲ -1面（南東から）



Ph.26 ㉙ -1面（南東から）



Ph.27 ㉙東部-1面（北から）



Ph.28 ㉙ -1面（南東から）

## 2) 第1面の調査 (Fig.1・2 Ph.2-28)

第1面は暗黄褐色土、灰褐色土の上面で検出した。西側が道路面から1.2m下で、標高は4.0m、中央部が約0.9m下で、標高は4.7m、東側が約1.0m下で標高4.3mである。埋設管が多く、①～⑩の北側と南側、⑪～㉙の南側は電力管が平行に敷設され (Ph.2-10・25)、㉙南側は通信管 (Ph.12・14)、㉑㉒㉓は水道管 (Ph.17) が設置され、㉔～㉙は後世の擾乱 (Ph.23・24) で削平される。検出した主な遺構は古代の土坑2基、11世紀後半から12世紀前半の土坑4基、12世紀中頃から後半の土坑2基、13世紀前半の土坑2基、近世の土坑、ピットである。

### (1) 土坑 (SK)

**SK240016** (Fig.1 Ph.5) 南側⑤に位置し、東側は検出できなかった。平面プランは直径0.6m以上の円形を呈すると考えられる。深さは25cmで、覆土は茶褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 1は須恵器の甕である。外面は縄目叩き、内面は當て具痕の痕跡がかすかに残るが、ナデ消される。土坑の時期は古代である。

**SK240102** (Fig.1 Ph.16・42・43) 南側㉙に位置し、北側と東側は削平される。平面プランは0.75m以上の円形を呈する。深さは30cmで、覆土は暗茶褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 2は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径は9.2cm、器高1.0cmである。3は東播系須恵器の鉢の口縁部片である。4は白磁碗IV類の高台を使用した瓦玉である。縁辺を丁寧に打ち欠き、円盤状とする。重さは117.04gを量る。5は広東系の白磁の碗で、細く高い高台を付し、内面見込みには段を有する。白橙色及び灰色の精良な胎土に、化粧土を施し、灰白色の釉が体部下半までかかる。他に龍泉窯系青磁碗II-b類、施釉陶器の盤、壺片

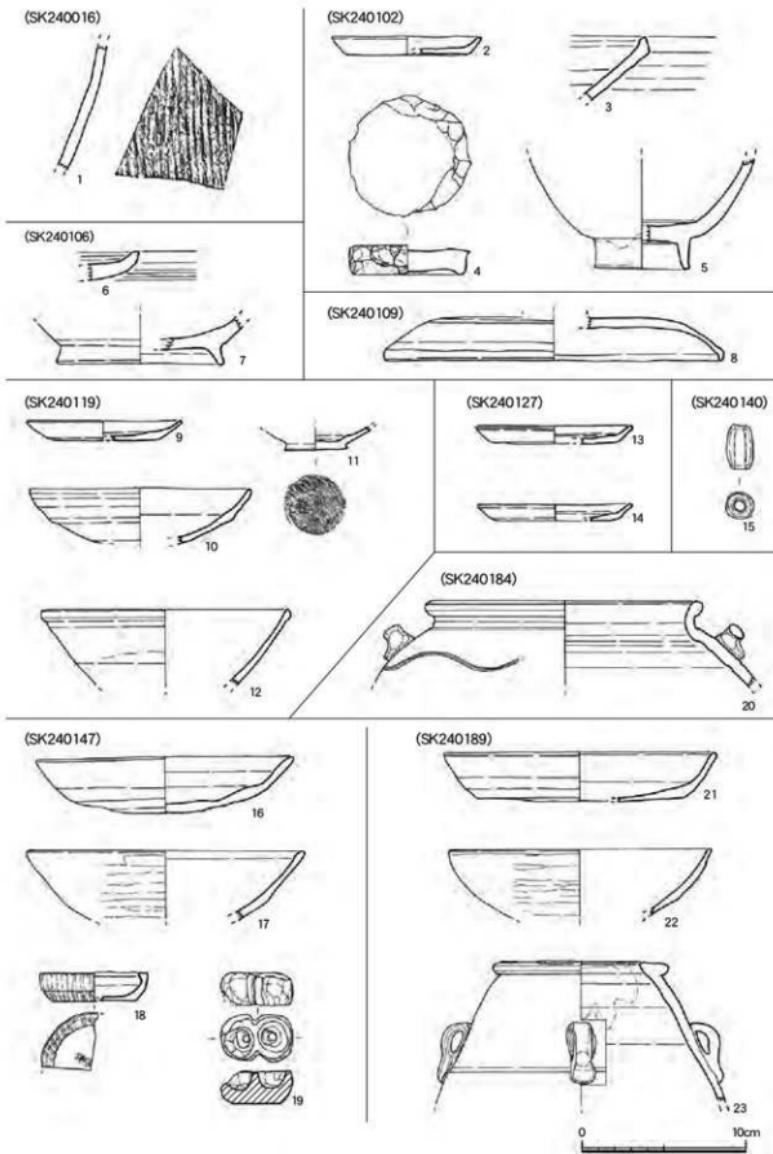


Fig.3 第1面遺構出土遺物実測図① (1/3)

が出土し、土坑の時期は13世紀前半頃と考えられる。

**SK240106 (Fig.1 Ph.15)** 南側㊂に位置し、東側の平面ラインのみ検出した。他は削平される。平面プランは円形を呈し、直径1.8m以上、深さ20cmを測る。覆土は暗茶褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3)** 6は土師器の皿で、内外面ともに研磨調整を行う。7は土師器の椀で、底部と体部の境に高台が付く。土坑の時期は古代と考えられる。

**SK240109 (Fig.1 Ph.15)** 南側㊂に位置し、北側は削平される。平面プランは円形を呈すると思われ、深さ25cmを測る。覆土は茶褐色土と黒色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3)** 8は須恵器の壺蓋で、口縁端部を下方へ折り曲げる。復元口径20.8cm、器高2.2cmを測る。天井部はヘラ削りで調整する。他に内面に青海波の当て具痕を残す須恵器の大甕の小片が出土し、土坑の時期は8世紀前半から中頃と考えられる。

**SK240119 (Fig.2 Ph.18)** 北側㊂に位置し、北側は削平される。東辺のみ検出し、長さ1.0m以上、幅1.0m、深さ15cmを測る。覆土は明茶褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3)** 9は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径9.4cm、器高1.2cmを測る。10は土師器の丸底坏で、復元口径13.6cmを測る。胎土に赤褐色粒を多く含み、色調は橙色を呈する。11は東播系須恵器の椀の底部片で、外底部には糸切りが残る。胎土は黒色粒を多く含む。12は白磁碗IV類の口縁部片である。他に中国の施釉陶器の壺が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK240127 (Fig.2 Ph.19)** 北側㊂に位置し、南側は削平される。平面プランは略円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土は灰褐色土を主体とし、扁平な花崗岩が2石廻棄される。

**出土遺物 (Fig.3)** 13・14は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径は9.6cm、9.4cm、器高1.1cm、1.0cmを測る。他にガラス坩堝、粘土塊、砥石が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK240140 (Fig.2 Ph.20)** 北側㊂に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.7m、短径0.8mを測る。深さは25cmで、覆土は灰褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3)** 15は管状土錘の完形品である。長さ2.8cm、幅1.6cm、孔径0.6cm、重さは8.1gを量る。表面は磨滅し、胎土に含まれる砂粒が露出する。他に白磁碗IV、V類、施釉陶器、東播系須恵器の捏鉢、滑石製石鍋、ガラス坩堝が出土し、土坑の時期は11世紀後半から12世紀初頭と考えられる。

**SK240147 (Fig.2 Ph.21)** 北側㊂に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.1mを測る。深さは35cmで、覆土は灰褐色土を主体とし、炭化物を多量に含む。

**出土遺物 (Fig.3 Ph.29)** 16は土師器の丸底坏で、出土時は破損していたが、復元すると、完形となり、口径15.6cm、器高3.4cmを測る。17は瓦器椀で、外面は粗い横方向の磨き、内面は工具によるナデを施す。18は青白磁の合子の身である。型作りで、菊花状とする。外底部には陽刻のスタンプを有する。18は滑石製の双容器である。長さ4.3cm、幅2.9cm、高さ2.0cmを測る。直径約1.8cm、深さ1.0cmの2つの溝を有する。欠損が見られるが、破面は研磨されており、補修を行いながら、使用した痕跡が窺える。重さは39.3gである。他に回転糸切り底の土師器、白磁碗II・IV類、施釉陶器の捏鉢、ガラス坩堝(III-34 Fig.25-563)、鉄器、焼土塊が出土する。これらの出土遺物より土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

**SK240184 (Fig.2 Ph.24)** 北側㊂に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.1m以上、短径1.0m、深さ40cmを測る。覆土は灰褐色土に暗茶褐色土が斑状に混入し、炭化物が多く含まれる。

**出土遺物 (Fig.3)** 20は施釉陶器の四耳壺で、肩部に波状文を巡らす。黒色粒を含む暗褐色の

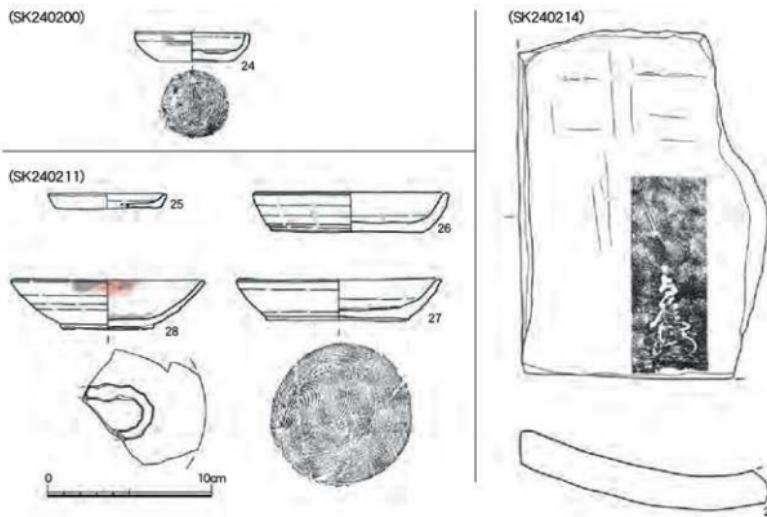


Fig.4 第1面遺構出土遺物実測図② (1/3)



Ph.29 SK240147・240200・240211 出土遺物

胎土に灰緑色の釉がかかる。他に回転糸切り底の土師器、白磁小片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類が出土し、土坑の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

**SK240189** (Fig.2 Ph.25・54) 北側②に位置し、北側と南側は削平される。長さ1.0m以上、幅1.0mを測り、深さは40cm以上である。覆土は黒色土に茶褐色土が混ざる。

出土遺物 (Fig.3) 21は回転ヘラ切り底の土師器の环で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径16.6cm、器高3.3cmを測る。22は瓦器椀で、外面に横方向の疎な研磨を施す。23は施釉陶器の四耳壺で、縦位の耳を付し、段を巡らす。胎土は精良で灰色から暗褐色を呈し、濃オリーブ色の釉がかかる。口縁上面に胎土目が残る。他に白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、鉄釘が出土する。土坑の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

**SK240200** (Fig.2 Ph.26) 北側②に位置し、北側、西側は削平される。平面プランは隅丸方形を呈すると思われ、一辺1.1m以上測る。深さは15cmで、茶褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.4 Ph.29) 24は完形の瓦質の燈明皿で、外面に煤が付着する。回転糸切り底で、内底部も回転ナデを施す。口径7.0cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測る。他に肥前陶磁器、瓦質の火鉢、土師質の焰烙が出土し、土坑の時期は近世である。

**SK240211** (Fig.2 Ph.27) 北側②に位置し、遺構の大半を削平される。深さは15cmで、黒色土を主体とし、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.4 Ph.29) 25-27は回転糸切り底の土師器である。25は小皿で復元口径7.2cm、器高0.9cmを測る。26・27は坏で、26は外底部に板状圧痕を有する。28は吉備系の土師器の高台付坏である。復元口径11.8cm、器高3.0cmを測る。器壁は薄く、ナデで調整する。粘土紐を雜に貼り付けた低い高台が付く。灯明皿として使用し、口縁部内外面と体部内面下半には煤の付着が見られ、赤変する箇所もある。他に白磁Ⅲ類、鉄滓、瑪瑙片が出土し、土坑の時期は12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

**SK240214** (Fig.2 Ph.28) 北側②に位置する。平面プランは略円形を呈し、1.2mを測る。深さは50cm以上で、覆土は茶褐色土に黒色土が混入する。

出土遺物 (Fig.4) 29は近世の平瓦で、一部、焼しがかかり、銀化する。工具によるナデで調整され、凹面には「与左衛門」のスタンプを有する。土坑からは平瓦、丸瓦が多く出土する。他に青磁の壺、白磁小片、珪石が出土し、土坑の時期は近世である。

### 3) 第2面の調査 (Fig.5・6 Ph.30-57)

第2面は暗褐色土の上面で検出した。遺構面の高さは、西側で、現道路面から約1.3m下の標高約3.9m、中央部が約1.2m下で、標高は4.4m、東側が約1.2m下で、標高4.1mである。第1面の埋設管は第2面にも達しており、削平状況も同様である。南側は削平、搅乱が著しいが、北側の遺構の遺存状況は良好である。

検出した主な遺構は中世の溝1条、8世紀中頃から9世紀の土坑2基、11世紀後半から12世紀後半の土坑5基、近世の土坑、ピットである。

#### (1) 土坑 (SK)

**SK240017** (Fig.5 Ph.31) 南側⑤に位置する。平面プランは梢円形を呈し、長径1.0m、短径0.7mを測る。深さ15cmで、覆土は黒褐色土を主体とし、多量の炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.7) 30は土師器の丸底坏で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径15.6cm、器

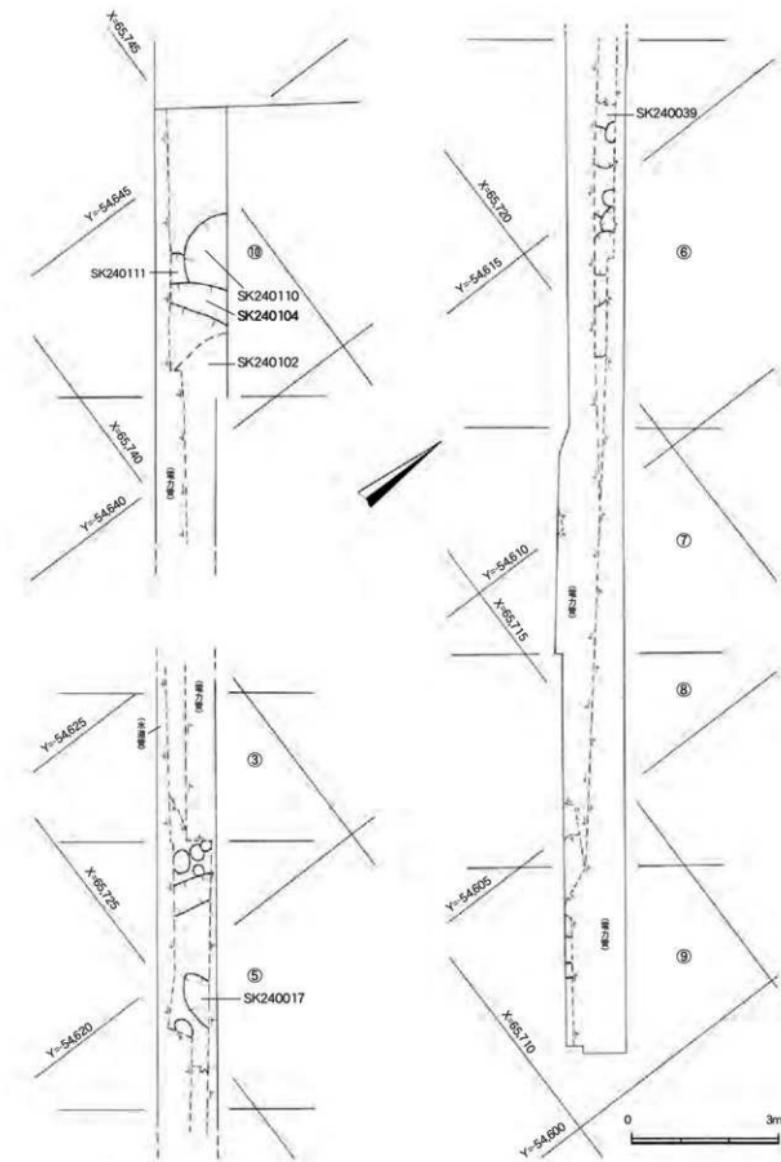


Fig.5 第2面全体図① (1/100)

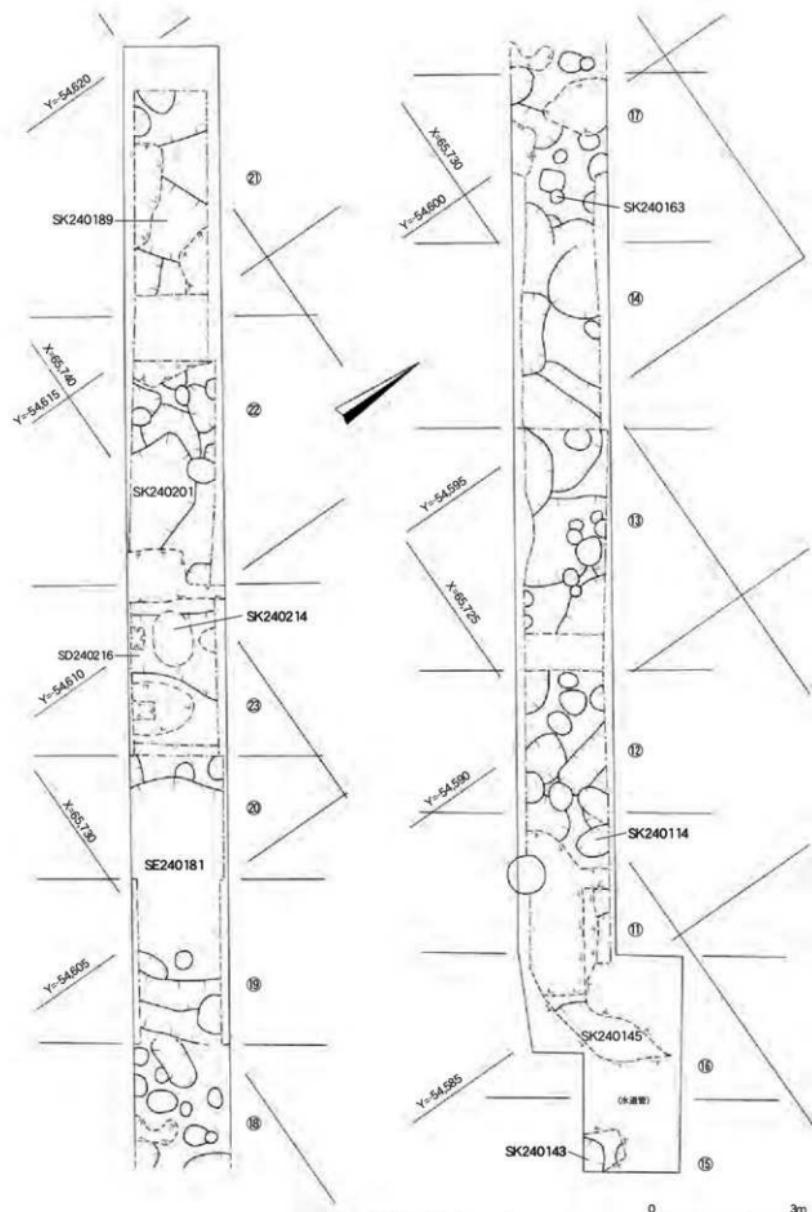
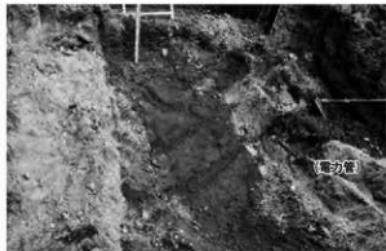


Fig.6 第2面全体図② (1/100)



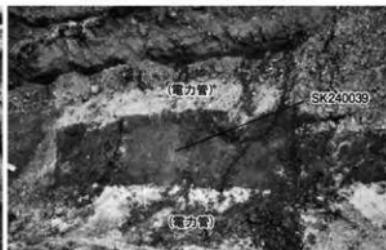
Ph.30 ⑤西-2面(東から)



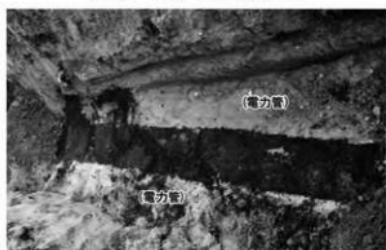
Ph.31 ⑤中央-2面(東から)



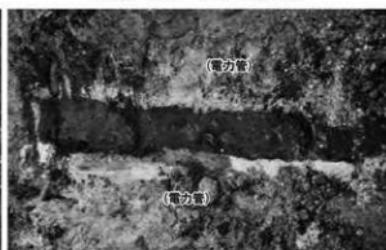
Ph.32 ⑦東-2面(東から)



Ph.33 ⑥西-2面(南から)



Ph.34 ⑥中央-2面(東から)



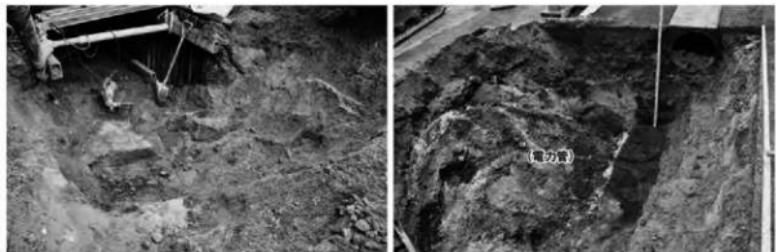
Ph.35 ⑥東-2面(東から)



Ph.36 ⑦西-2面(東から)



Ph.37 ⑤東-2面(東から)



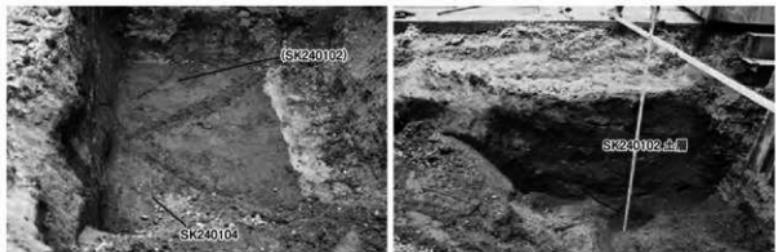
Ph.38 ⑧西-2面下擾乱（東から）

Ph.39 ⑧東-2面（西から）



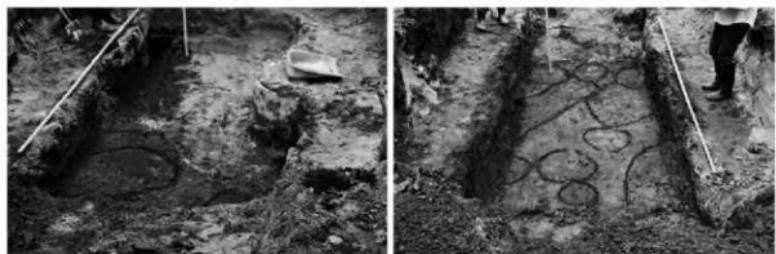
Ph.40 ⑨-2面（東から）

Ph.41 ⑩西-2面（東から）



Ph.42 ⑪東-2面（西から）

Ph.43 ⑫東-2面（南から）



Ph.44 ⑬-2面（北西から）

Ph.45 ⑭-2面（北西から）



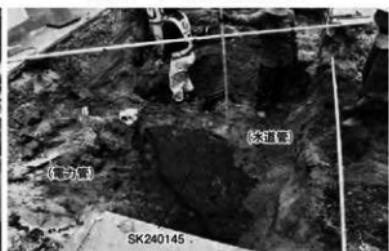
Ph.46 ⑬-2面（北西から）



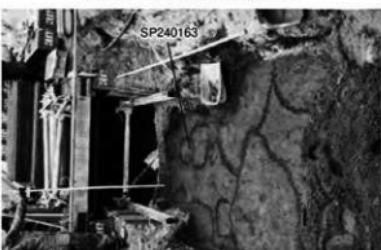
Ph.47 ⑭-2面（北西から）



Ph.48 ⑮-2面（北西から）



Ph.49 ⑯-2面（北西から）



Ph.50 ⑰-2面（北西から）



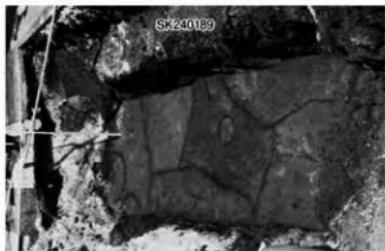
Ph.51 ⑱-2面（北西から）



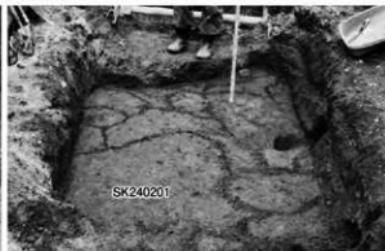
Ph.52 ⑲-2面（北西から）



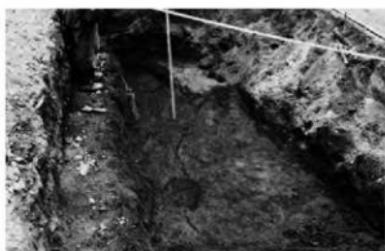
Ph.53 ⑳-2面（南東から）



Ph.54 ②-2面（南東から）



Ph.55 ②-2面（南東から）



Ph.56 ②東部-2面（北から）



Ph.57 ②-2面（南東から）

高3.2cmを測る。外底部には指オサエ、内面には工具痕が残る。31は楠葉型瓦器椀の口縁部片である。内面口縁下に1条の沈線が巡り、内外面とともに横方向の細い磨きが施される。32は白磁皿V-2a類で、口縁部は横に屈折する。33は無釉陶器の程鉢で、内に2条の突起を有する。他に回転ヘラ切り底の土師器、白磁碗IV・XII-1b類が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK240039 (Fig.5 Ph.33)** 南側⑥に位置し、平面プランは確認できていない。深さは20cmを測り、覆土は明茶褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.7) 34・35は近世の煙された丸瓦で、凸面に34は「花菱文」、35は「長左衛門」の刻印をもつ。34の凹面は布目が残り、他はナデで調整する。35の凹面は布目を工具でナデ消す。他に肥前陶磁器、回転糸切り底の土師器が出土する。

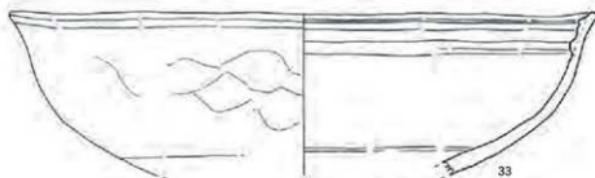
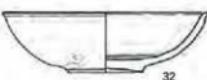
**SK240104 (Fig.5 Ph.42)** 南側⑩に位置し、西側の平面プランは検出できたが、他は削平される。深さは20cm以上を測り、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.7) 36-38は白磁の小碗である。36は外面に縦窓花弁文を施す。37は輪花を有する。38の体部は丸みをもって立ち上がり、口縁は外側に大きく屈曲する。外面に疎な縦窓花弁文を施す。良質な白灰色の胎土に化粧土を施し、光沢のある灰色釉がかかる。細かい貫入が入る。39は施釉陶器の小口瓶で、肩部に胎土目が付く。黒色粒を多く含む灰色の胎土に暗緑色の釉がかかる。土坑の時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

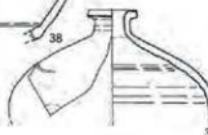
**SK240110 (Fig.5 Ph.41)** 南側⑩に位置し、北側は削平される。平面プランは直径約2.0mの円形を呈すると考えられる。深さは10cm、覆土は黒色土と茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.7) 40・41は須恵器である。40は壺蓋で、天井部はヘラ削りを行う。内面には鏝記号が残る。41は高台付环で、体部と底部の境に方形の高台が付く。底部はヘラ切りで調整する。土坑の時期は8世紀中頃から後半と考えられる。

(SK240017)



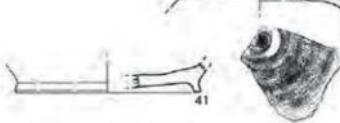
(SK240104)



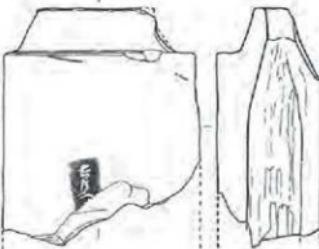
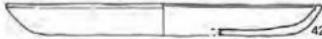
(SK240039)



(SK240110)



(SK240111)



0

10cm

43

0

5cm

Fig.7 第2面遺構出土遺物実測図① (1/3・1/2)

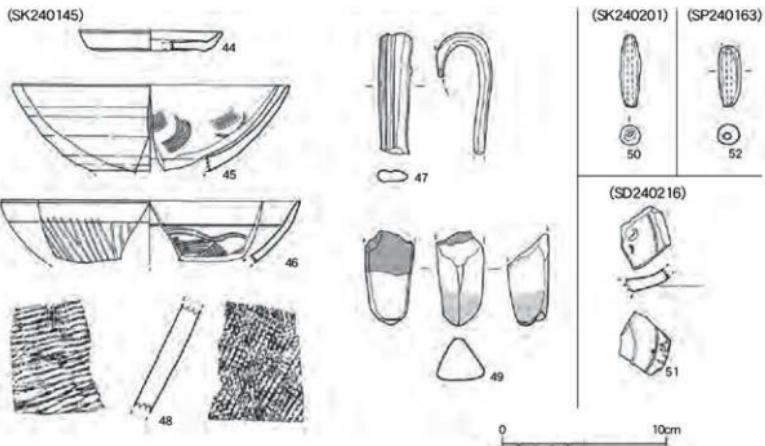


Fig.8 第2面遺構出土遺物実測図② (1/3)

**SK240111 (Fig.5 Ph.41)** 南側㉙に位置し、深さ20mの西側の壁のみ検出した。覆土は黒色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.7)** 42は土師器の皿で、復元口径は19.4cm、器高2.0cmを測る。内面は回転ナデで調整し、外側は削り風の強いナデを平行に行う。43は移動式窓の基部である。土坑の時期は9世紀頃と考えられる。

**SK240145 (Fig.6 Ph.49)** 北側㉚に位置し、水道管に遺構の大半を削平される。深さは20cm以上を測り、西側の平面プランのみ検出した。覆土は灰褐色土である。

**出土遺物 (Fig.8 Ph.58)** 44は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径8.8cm、器高1.2cmを測る。胎土に赤褐色粒を多く含み、色調は明橙色である。45は白磁碗V-1c類で、内面に短い櫛目文を有する。46は初期龍泉窯系青磁碗で、外側に片彫風の櫛刀で縦線を施す。内面は片彫花文と櫛目文を描く。47は無釉陶器の水注の把手である。48は中世須恵器の十瓶窯の甕である。外側は格子目叩き、内面は平行の当て具痕を残す。49は断面三角形を呈する焼台と考えられ、熱を受け、黒変、赤変する。他に中国陶器の盤、甕、瓶、滑石製石鍋、ガラス坩堝(III-34 Fig.25-553)、ガラス滓が出土する。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

**SK240201 (Fig.6 Ph.55)** 北側㉚に位置し、南側は削平される。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺1.5m以上、短辺1.8mを測る。深さは20cm以上で、暗褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.8)** 50は管状土錘の完形品で、組ずれの痕跡が残る。重さは5.3gを量る。土坑からは瓦質土器の捏鉢、回転糸切り底の土師器、土師質土器の鍋、白磁碗Ⅲ・Ⅳ類、施釉陶器の瓶が出土する。土坑の時期は12世紀後半と考えられる。



Ph.58 SK240145・SD240216 出土遺物

## (2) 溝 (SD)

**SD240216 (Fig.6 Ph.57)** 北側②に位置する。溝は南北方向に走り、幅は北側が 1.8m、南側は 1.2m を測る。深さは 10cm 以上である。覆土は黒色土で、炭化物、焼土を多量に含む。

**出土遺物 (Fig.8 Ph.58)** 51 は朝鮮半島の象嵌青磁の底部片で、馬上壺である。内外面に白と黒の象嵌で、沈線と文様を描く。他に土師器、瓦器椀、青磁、白磁が出土し、土坑の時期は中世と考えられる。

## (3) ピット (SP)

**SP240163 (Fig.6 Ph.50)** 北側⑦に位置する。直径 30cm の円形プランを呈し、深さは 10cm 以上で、覆土は褐色土である。

**出土遺物 (Fig.8)** 52 は管状土錘で、上端を欠損する。現状で重さは 5.6g である。他に土師器の壺、甕が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

## 4) 第 3 面の調査 (Fig.9 Ph.59~70)

第 3 面は北側と南側の③より東側の遺構面は現道路面から 1.5m 以上となるため、安全の確保が難しく、掘削することができなかった。調査を行ったのは、南側の東側部分である。遺構面は暗茶褐色土の上面で検出した。遺構面は、中央部の⑤付近が約 1.4m 下で、標高は 4.2m、東側が約 1.4m 下で、標高 3.9m である。北側と南側は電力管、通信管が敷設され、削平される。遺構の遺存状況は悪い。検出した主な遺構は古墳時代前期、7 世紀から 8 世紀、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑、ピットである。

### (1) 土坑 (SK)

**SK240021 (Fig.9 Ph.62)** 北側⑤に位置し、南側は削平され、西側は確認できなかった。平面プランは円形を呈すると思われ、深さは 20cm、覆土は暗茶褐色土である。

**出土遺物 (Fig.10)** 53・54 は布留系甕で、54 の内面は削りで調整する。53 の口縁部内外面には煤の付着がある。55 は土師器の直口壺で、外表面はナデ、内面は横方向の磨きの後、縦方向の暗文を施す。胎土は精良で、微細な雲母を多量に含み、色調は暗黄褐色を呈する。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK240022 (Fig.9 Ph.62)** 北側⑤に位置し、南側は電力管に削平される。深さは 25cm、覆土は暗茶褐色シルトである。

**出土遺物 (Fig.10)** 56 は土師器の直口壺の口縁部片である。内面は内黒とし、横方向の研磨で調整する。外表面は縦方向の刷毛目の後、横方向のナデを施す。胎土に角閃石、雲母、白色砂粒を多量に含む。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK240048 (Fig.9 Ph.65)** 北側⑥に位置し、北側と南側は電力管、西側は他の遺構に削平される。深さは 20cm 以上で、覆土は明茶褐色シルトを主体とし、炭化物を含む。

**出土遺物 (Fig.10)** 57 は須恵器の壺の体部片で、胎土は精良で、暗褐色を呈する。外表面の色調は灰黒色である。内外面ともに回転ナデで調整する。58 は土師器の壺の把手である。扁平な形状を呈し、体部内面は削りを施す。他に外面格子目叩きの須恵器の甕が出土する。土坑の時期は 7 世紀から 8 世紀と考えられる。

**SK240058 (Fig.9 Ph.66)** 北側⑥に位置し、南側は削平され、東側は検出することができかった。覆土は茶褐色砂質土に黒色土が混入する。深さは 20cm 以上である。

**出土遺物 (Fig.10)** 59 は黒色土器 A 類の椀で、内面は幅広の疎な研磨を施す。外面上半は雜なナデで調整する。他に回転ヘラ切り底の土師器、白磁碗IV類、施釉陶器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

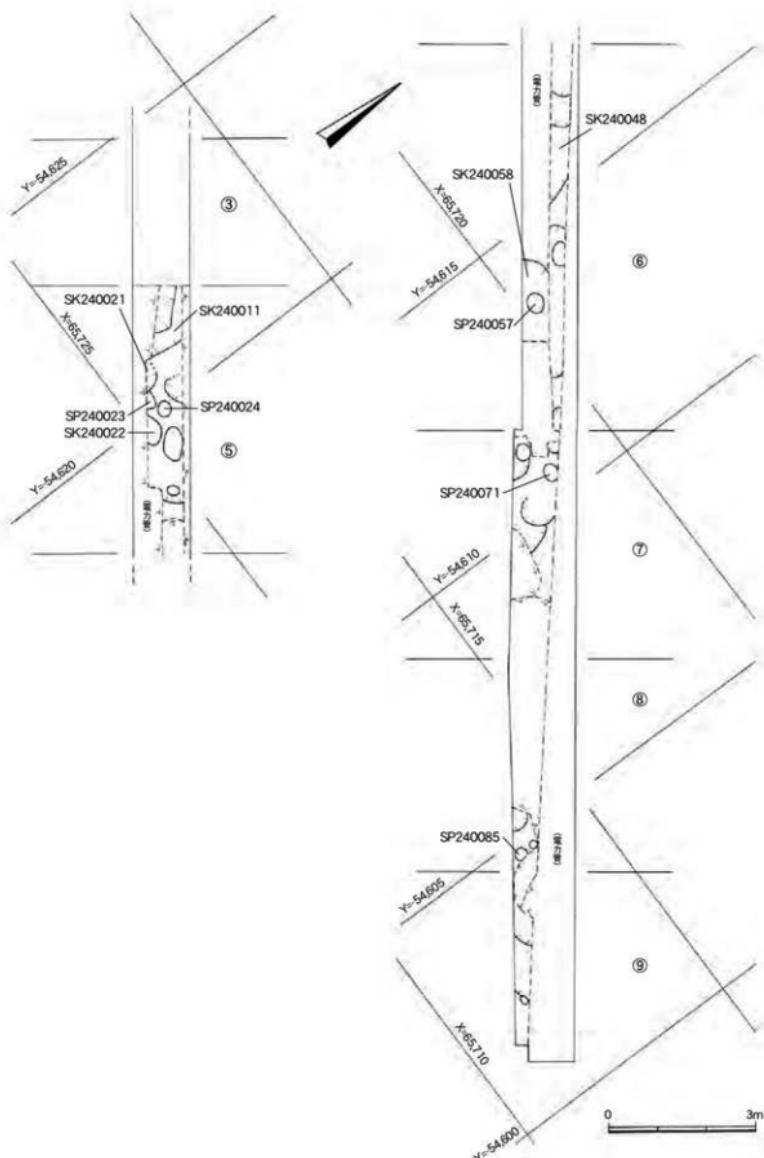


Fig.9 第3面全体図 (1/100)



Ph.59 ①-3面搅乱（電力管）(西から)



Ph.60 ②-3面搅乱（電力管）(西から)



Ph.61 ⑤西-3面（北から）



Ph.62 ⑤中央-3面（東から）



Ph.63 ⑤東-3面（東から）



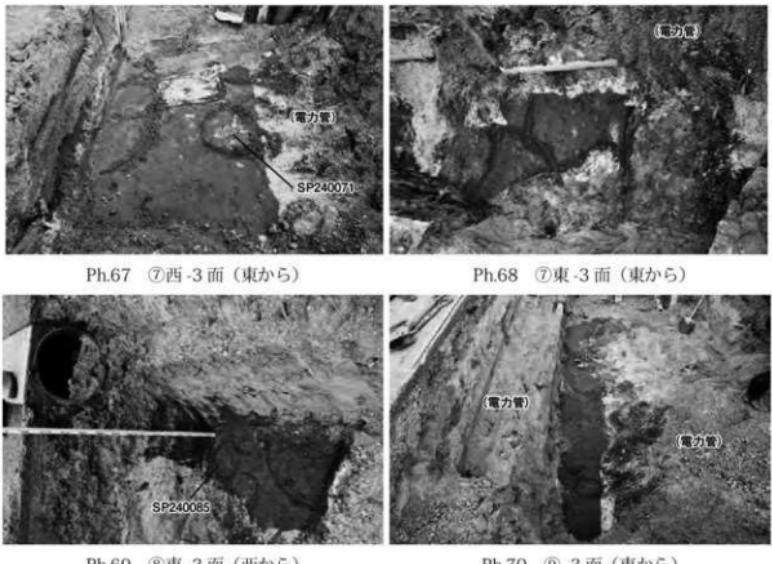
Ph.64 ⑥西-3面（南から）



Ph.65 ⑥中央-3面（東から）



Ph.66 ⑥東-3面（東から）



## (2) ピット (SP)

**SP240023 (Fig.9 Ph.62)** 北側⑤に位置し、南側は削平される。平面プランは円形を呈し、直径約30cmを測る。深さは20cmで、覆土は暗茶褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.10)** 60は布留系の高環で、器面は磨滅しており、わずかに内外面に研磨調整が残る。61は布留系の直口壺の口縁で、刷毛目で調整した後、ナデを施す。62は弥生土器の壺の頸部片で、頸部下に三角突帯を巡らす。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SP240024 (Fig.9 Ph.62)** 北側⑤に位置する。平面プランは梢円形を呈し、直径25~35cmを測る。深さ25cmで、覆土は茶褐色砂質土である。

**出土遺物 (Fig.10)** 63・64は布留系の土師器で、63は甕である。64は小型器台で、内面はナデ、外側は横方向の研磨を施す。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SP240057 (Fig.9 Ph.66)** 北側⑥に位置する。平面プランは円形で、直径35~40cm、深さ20cmを測る。覆土は黄茶褐色砂質土で、炭化物を含む。

**出土遺物 (Fig.10)** 65は下層の遺物の混入で、弥生土器の高環の脚部片である。胎土に0.6mmの赤褐色砂粒、13mmの閃緑岩を含む。土坑からは土師小片、白磁片が出土するため、時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

**SP240071 (Fig.9 Ph.67)** 北側⑦に位置する。平面プランは円形を呈し、直径35cmを測る。深さ20cmで、覆土は暗茶褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.10)** 67・68は白磁碗Ⅱ類の口縁部片である。69は下層の遺物の混入で、弥生土器の壺の体部片である。頸部下に1条の三角突帯を巡らす。土坑の時期は11世紀後半から12世

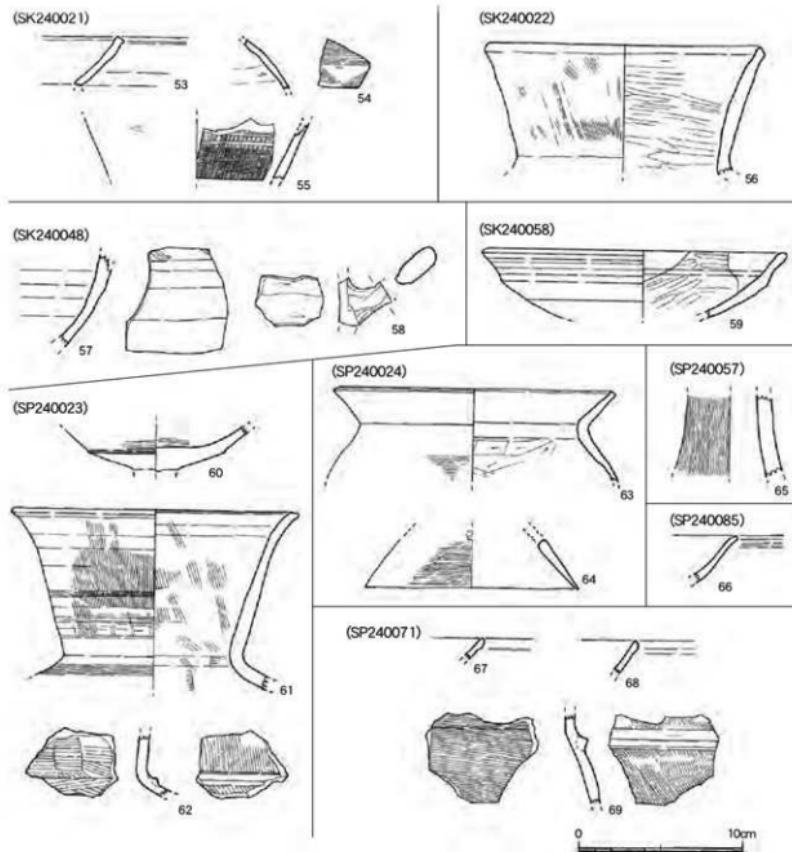


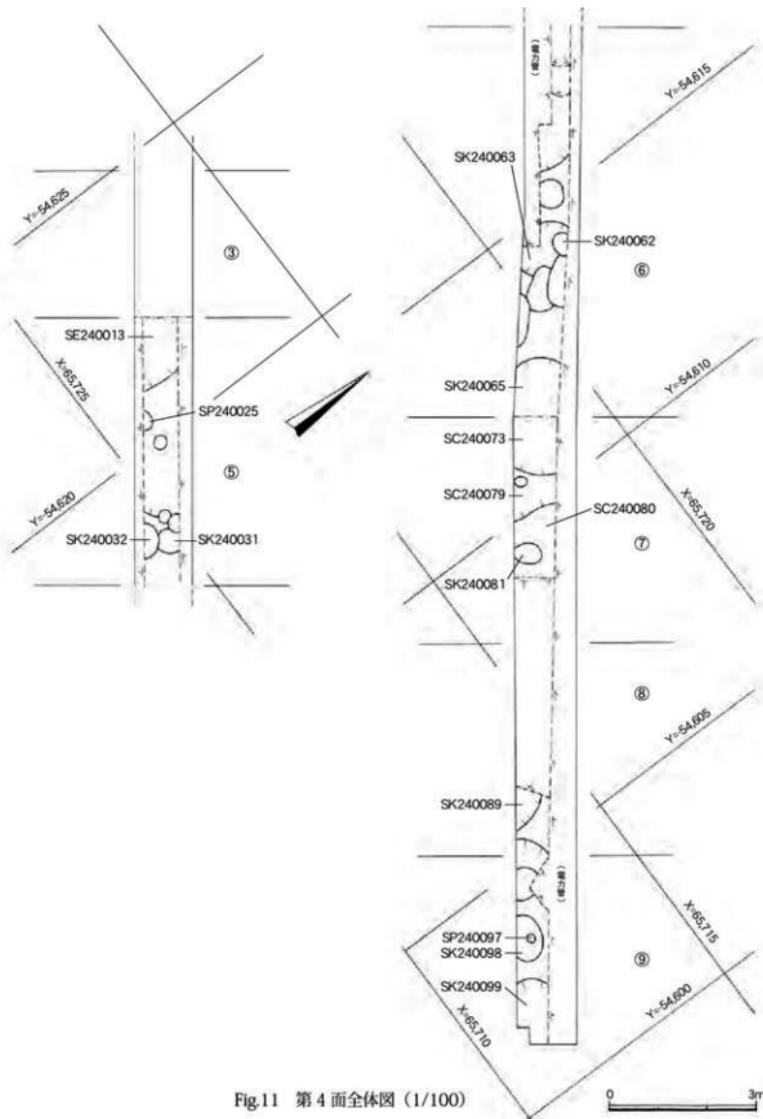
Fig.10 第3面遺構出土遺物実測図 (1/3)

紀前半と考えられる。

**SP240085 (Fig.9 Ph.69)** 北側⑧に位置する。平面プランは直径25cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.10)** 66は灰釉陶器の口縁部片である。灰橙色の胎土に灰白色の釉がかかり、口縁部は光沢をもつ。土坑の時期は古代と考えられる。

5) 第4面の調査 (Fig.11 Ph.71~81)





Ph.71 ③-4面（南東から）



Ph.72 ⑤西-4面（北から）



Ph.73 ⑤中央-4面（東から）



Ph.74 ⑤東-4面（東から）



Ph.75 ⑥西-4面（東から）



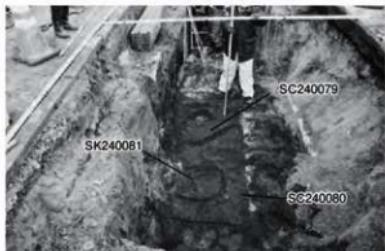
Ph.76 ⑥中央-4面（東から）



Ph.77 ⑥東-4面（東から）



Ph.78 ⑦西-4面（東から）



Ph.79 ⑦東-4面（東から）



Ph.80 ⑧東-4面（西から）



Ph.81 ⑨-4面（南から）

第4面の調査は第3面に引き続き、ガイドウォール南側の東側部分のみである。遺構面は黄褐色砂質土の上面で検出した。遺構面の高さは、現道路面から約1.5m下で、標高は4.0mである。調査区北側と南側は電力管、通信管で削平され、⑧はコンクリートブロックで搅乱を受ける。遺構の遺存状況は悪い。

検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡3軒、古墳時代初頭から前期の土坑6基、11世紀後半から12世紀前半の土坑4基、ピットである。近世の井戸SE240013については、この面でプランを明確に確認したので、4面で掲載する。

#### (1) 竪穴住居跡 (SC)

**SC240073 (Fig.11 Ph.78)** 南側⑦に位置し、北側、南側は電力管により削平される。西側は別日の掘削となってしまったため、遺構プランを検出することができなかった。東側のプランはやや弧を描き、一辺1.8m以上を測る。深さは20cm、覆土は茶褐色シルトで、炭化物を含む。大量の土器が出土し、他の住居跡と覆土等も類似することから竪穴住居とした。

**出土遺物 (Fig.12・13)** 70・71は庄内系の甕で、外面には細かい叩きが残り、体部内面は削りで調整する。70の口縁部外面には多量の煤が付着する。72は布留系の甕で、口縁端部は強いナデにより凹状に窪む。73は近畿V様式系の甕の体部で、外面は叩きの後、部分的に刷毛目、内面は刷毛目で調整する。74-79は弥生土器の甕で、74・75の外面は多量の煤が付着する。76・77は凸レンズ状の底部を有する。78は口縁が内傾する小型の甕で、内外面ともに刷毛目で調整する。胎土に赤褐色粒を含む。79は大型の甕で、口縁は「く」の字状を呈し、頸部に突帯を巡らせ、刻目を施す。80は複合口縁甕で、刻目を施す。胎土は雲母、白色砂粒を多く含む。81-84は山陰系の二重口縁甕で、口縁下端の棱は明瞭である。81の内面は削りが施され、外面には多量の煤が付着する。84の内面は

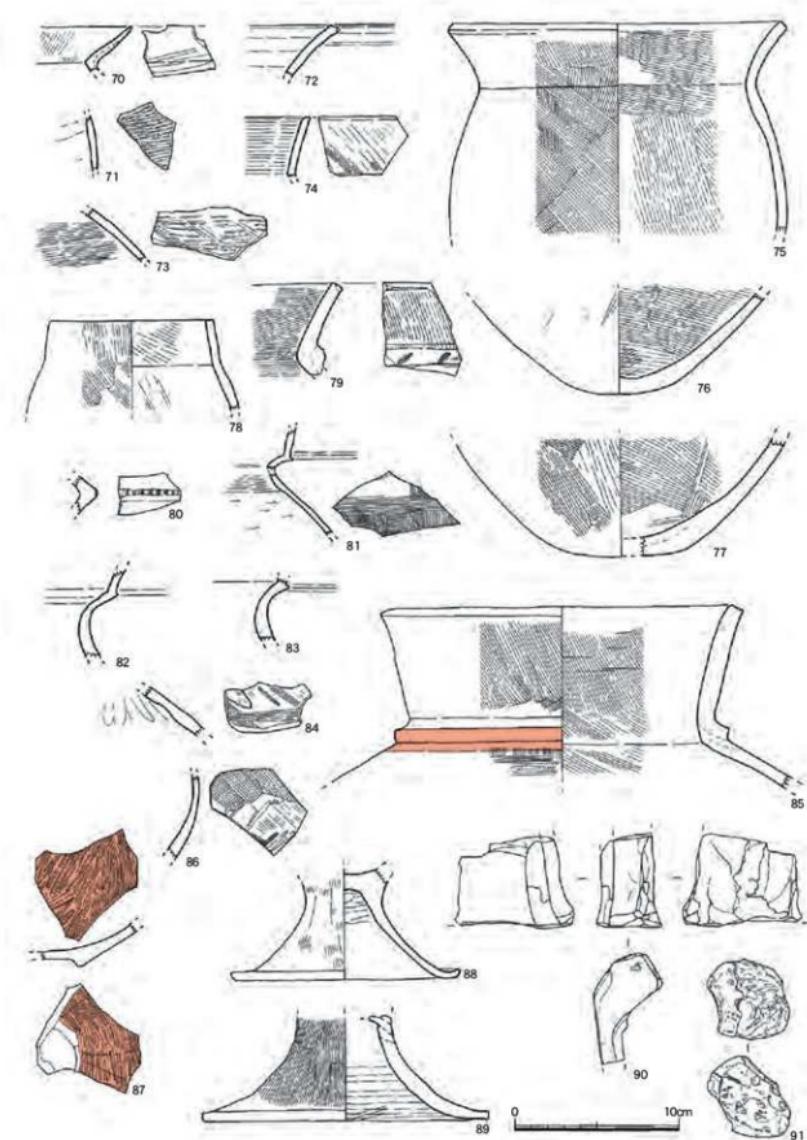


Fig.12 SC240073①出土遺物実測図 (1/3)

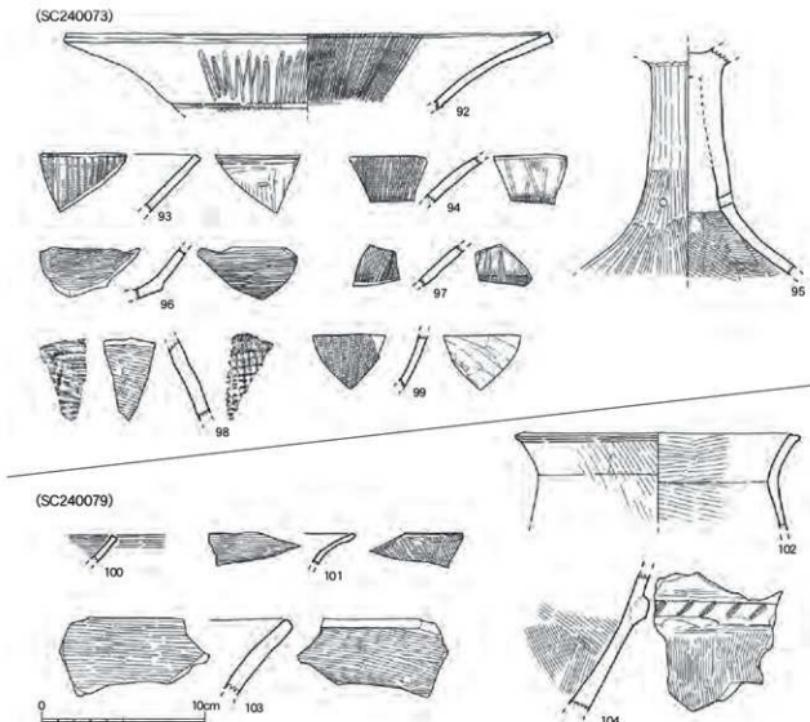


Fig.13 SC240073 ②・240079 出土遺物実測図 (1/3)

指ナデ、外面下半は刷毛目、上半は刷毛で文様を施す。85は大型の直口壺で、頸部には三角突帯を巡らせ、赤色顔料を塗布する。86は土師器の精製の鉢で、内外面ともに細かい刷毛目で調整した後、外面は粗い文様風の磨き、内面はナデで調整する。外面は多量の炭化物が吸着する。87は脚付鉢もしくは高杯の杯部で、赤色顔料が塗布される。内外面ともに細い沈線状の磨きが施される。88・89は弥生土器の脚付鉢の脚部である。90は移動式竈の基部で工具によるナデと削りで調整される。91は軽石の原石である。砥石用に持ち込んだものか。重さは 15.18g を量る。92-95は弥生土器の高杯である。杯部は内外面ともに刷毛目で調整した後、暗文を加える。95は脚部片で、不規則な穿孔を 3箇所有する。96・97は庄内系の高杯の杯部片で密な刷毛目調整の後、細い磨きを施し、98は内外面ともに横方向、97の内面は縦方向、外面は文様風に描く。99は土師質の甕の体部片で、外面は格子目叩き、内面は刷毛目が残る。99は上層遺物の混入で、土師器の杯である。内面は丁寧なナデの後、暗文風の磨きを施す。外面は削りで調整する。土坑の時期は出土遺物より弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

**SC240079 (Fig.11 Ph.79)** 南側⑦に位置する。北側、南側は削平され、西側はSC240073に切られる。覆土は茶褐色シルトで、少量の炭化物を含む。深さは 30cm を測り、下層 15cm の間に

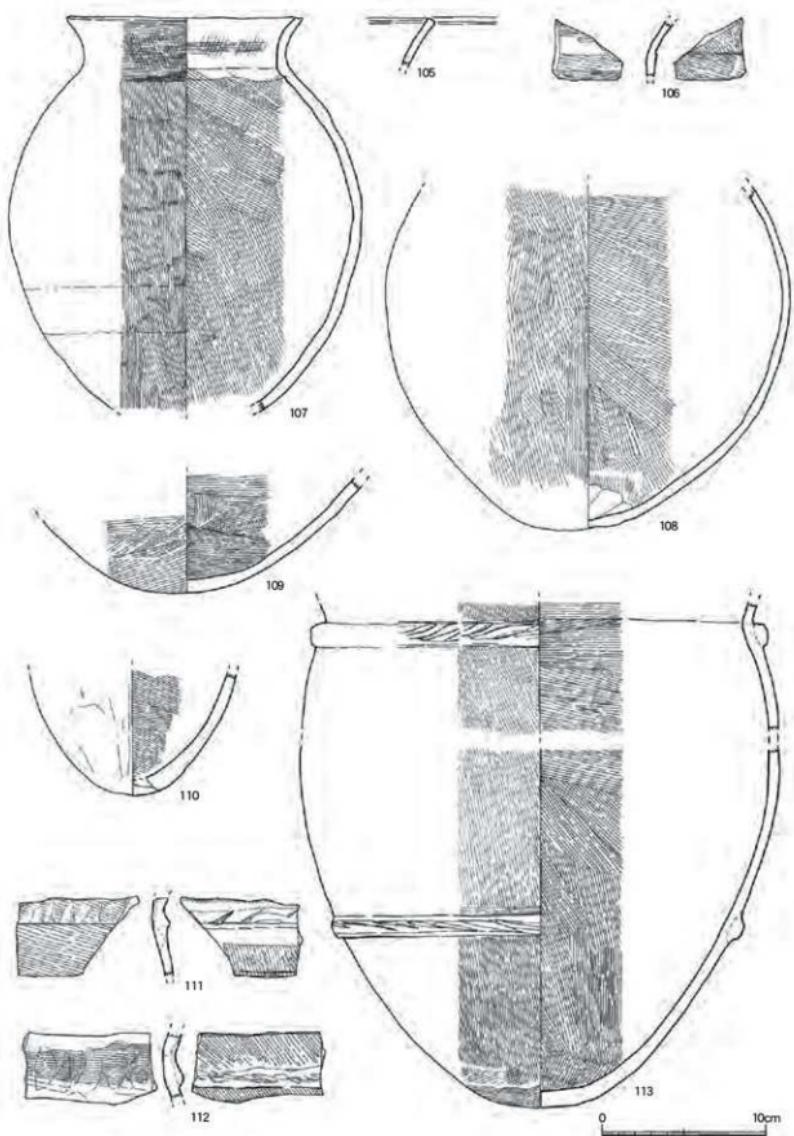


Fig.14 SC240080 出土遺物実測図① (1/3)

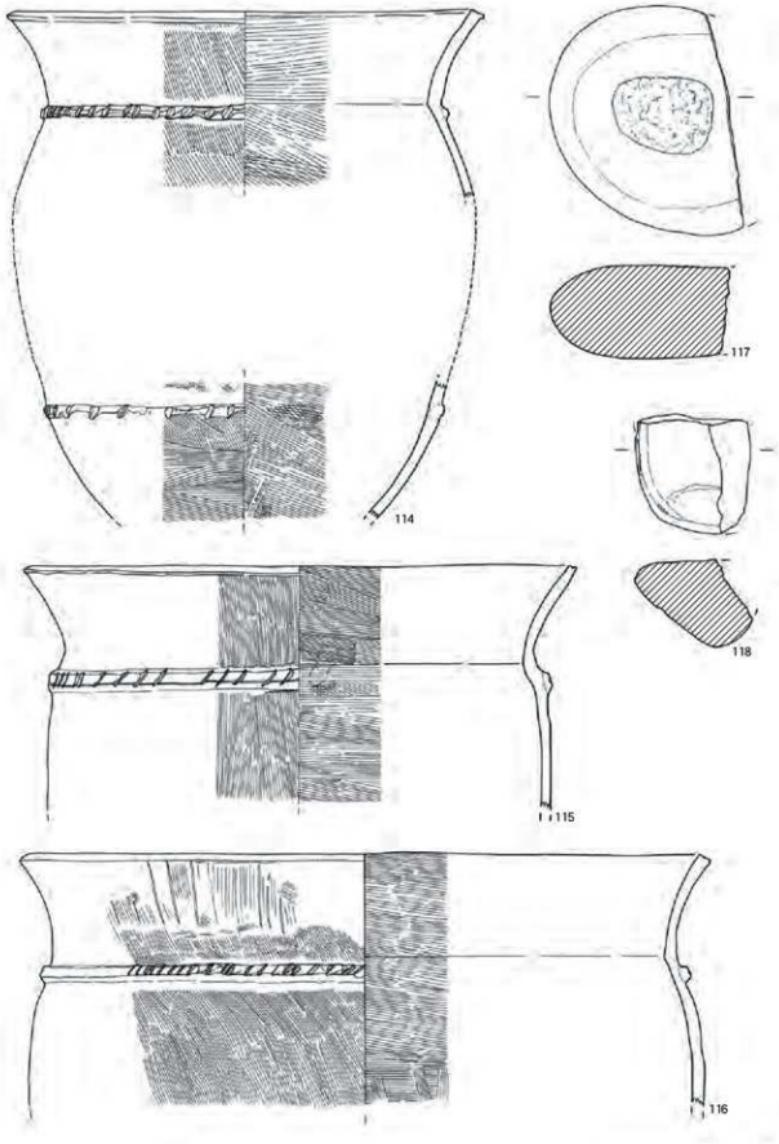


Fig.15 SC240080 出土遺物実測図② (1/3)

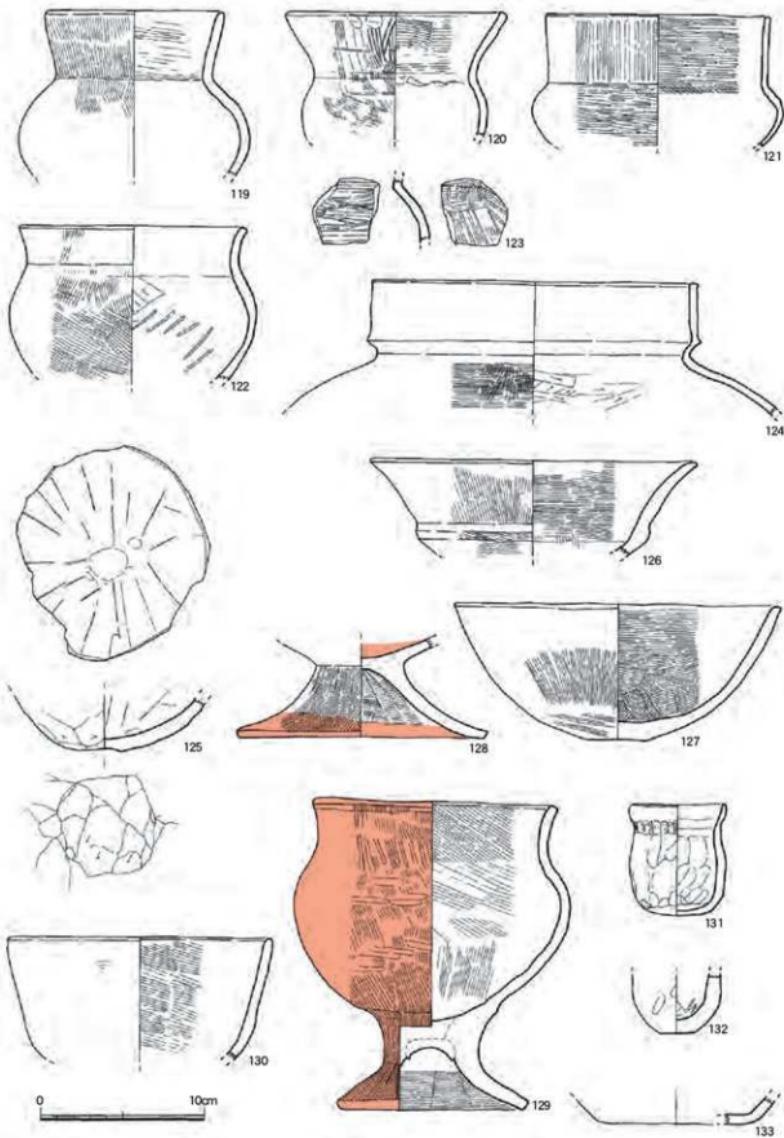


Fig.16 SC240080 出土遺物実測図③ (1/3)

土器が廃棄されていた。

出土遺物 (Fig.13) 100は布留系の甕、101は近畿V様式系の甕の口縁部片である。102は弥生土器の甕の口縁部で、粗い刷毛目で調整する。103は大型の甕で、口縁端部は方形に仕上げる。104は大型の壺の体部片で、偏平な突帯に刻目を施す。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SC240080 (Fig.11 Ph.80) 南側⑦に位置し、西側はSC240079に切られ、北側、南側、東側は削平される。平面プランは確認できなかったが、深さは30cmを測る。明茶褐色砂質土の覆土からは多量の土器が出土する。在地系の土器だけではなく、搬入と考えられるものも多数見られ、器種も多様である。

出土遺物 (Fig.14~16 Ph.82) 105は畿内V様式系の甕で、口縁は外反する。106は甕の頸部片で、頸部と口縁部の境に段を有する。外面を不規則な刷毛目で調整する。107~116は在地系の甕である。107・108は最大胴部径を中位にもち、頸部は細く、そこから口縁は大きく外反する。底部はすべて丸底である。110は小型の甕で、内面は刷毛目、外面は工具による縦方向の強いナデで調整する。111・112は大型の甕の体部片で幅広の空帯を巡らす。113~116は最大胴部径を上位にもち、頸部はわずかにすぼまる程度で、長い口縁部が大きく外反する。頸部と中位下に2条、断面台形の突帯を巡らせ、刻みを施す。116は口縁外面に縦方向の沈線を入れ、文様とする。117は花崗岩製の台石で、1/2を欠損する。梢円形を呈し、幅14.0cm、厚さ5.8cmを測る。中央に敲打の痕跡が残る。重さは現存で、1615.18gを量る。118は玄武岩の原石を砥石として使用する。119~121は土師器の長頸壺で、口縁部内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目、体部内面は工具によるナデで調整する。122は畿内V様式系の壺で、体部内面は削りである。123は庄内系の小型壺の体部片で、刷毛目で調整した後、磨きを行う。124は山陰系の二重口縁壺で、口縁下端の稜は明瞭である。体部外面は細かい刷毛目、内面は横方向の削りが残る。125は畿内V様式系の壺の底部片で、体部外面は削りの後、ナデを行うが、底部には粗い削りが残る。内面は工具による簾状のナデを行う。126は高环の坏部で、刷毛目で調整する。127は畿内V様式系の鉢で、突出する丸底である。内面上半は横方向の刷毛目、底部付近は簾状となる。外面上半は横方向のナデ、下半から底部にかけては縦方向の工具による粗いナデを施す。128・129は弥生土器の脚付鉢で、内外面に赤色顔料が付着する。129は1/3を欠損するが、ほぼ全容が窺える。内外面ともに刷毛目で調整し、部分的にナデを施す。赤色顔料がほんのわずかに残り、全面に塗布されていたと考えられる。130は体部が直立気味に立ち上がる鉢である。131は手捏ね土器の鉢で、1/2を欠損する。底部は平底で、体部は直立し、口縁は内湾気味に立ち上がる。指オサエの痕跡が多く残る。132は蛸壺の底部片である。133は瓦質の土器で、平底を呈する。胎土に暗褐色粒を含み、色調は灰色から灰橙色を呈する。器面は磨滅し、調整は不明である。他に焼けて赤色に変色した砂岩の18.0cm四方で、厚さ14.0cmを測る原石が出土する。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。



Ph.82 SC240080 出土遺物

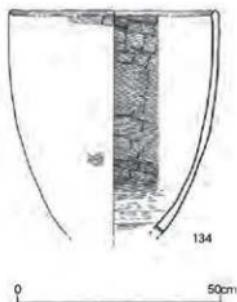


Fig.17 SE240013 出土遺物実測図 (1/12)



Ph.83 SE240013 出土遺物

## (2) 井戸 (SE)

**SE240013 (Fig.11 Ph.72)** 南側⑤に位置する。平面プランは円形を呈すると思われ、直径 1.5m 以上を測る。深さは 60cm 以上で、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土で、多量の炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.17 Ph.83) 134 は土師質の甕である。砲弾状の体部に口縁はやや内湾気味に肥厚する。内外面ともに刷毛目で調整するが、外面は摩滅が著しい。他に肥前陶磁器、棧瓦、白磁、土師器が出土し、井戸の時期は近世である。

## (3) 土坑 (SK)

**SK240031 (Fig.11 Ph.74)** 南側⑤に位置し、北側は削平される。直径 50cm の円形を呈し、深さは 15cm、覆土は茶褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.18) 135 は近畿V様式系の甕の底部片で、粗い縦方向の削りで調整し、底部は突出する。内面は工具による簾状のナデを施す。他に布留系甕が出土し、土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK240032 (Fig.11 Ph.74)** 南側⑤に位置し、南側は電力管に削平される。平面プランは円形を呈し、直径 70cm を測る。深さは 20cm で、覆土は暗茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 136・137 は庄内系の壺で、136 は細い研磨調整を施す。137 は肩部片で、外面の刷毛目はナデ消される。土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

**SK240062 (Fig.11 Ph.77)** 南側⑥に位置し、北側は電力管に削平される。平面プランは円形を呈し、直径 45cm を測る。深さは 20cm で、覆土は黒褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 138 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口縁を欠くが、ほぼ完形である。口径 9.2cm、器高 1.8cm を測る。胎土に微細な赤褐色粒、金雲母を含み、色調は橙色を呈する。139 は白磁碗IV類の口縁部片である。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

**SK240063 (Fig.11 Ph.77)** 南側⑥に位置し、北側、南側は電力管に削平される。平面プランは円形を呈し、直径 1.3m を測る。深さは 30cm 以上で、覆土は暗茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 140 は黒色土器A類の椀で、内面は太く粗い磨きを施す。体部外面下半は磨滅する。141 は白磁碗II-1類である。142 は下層の遺物の混入で、土師器の直口壺の口縁部片である。土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

**SK240065 (Fig.11 Ph.77)** 南側⑥に位置し、北側、南側は電力管に削平される。東側は⑦と

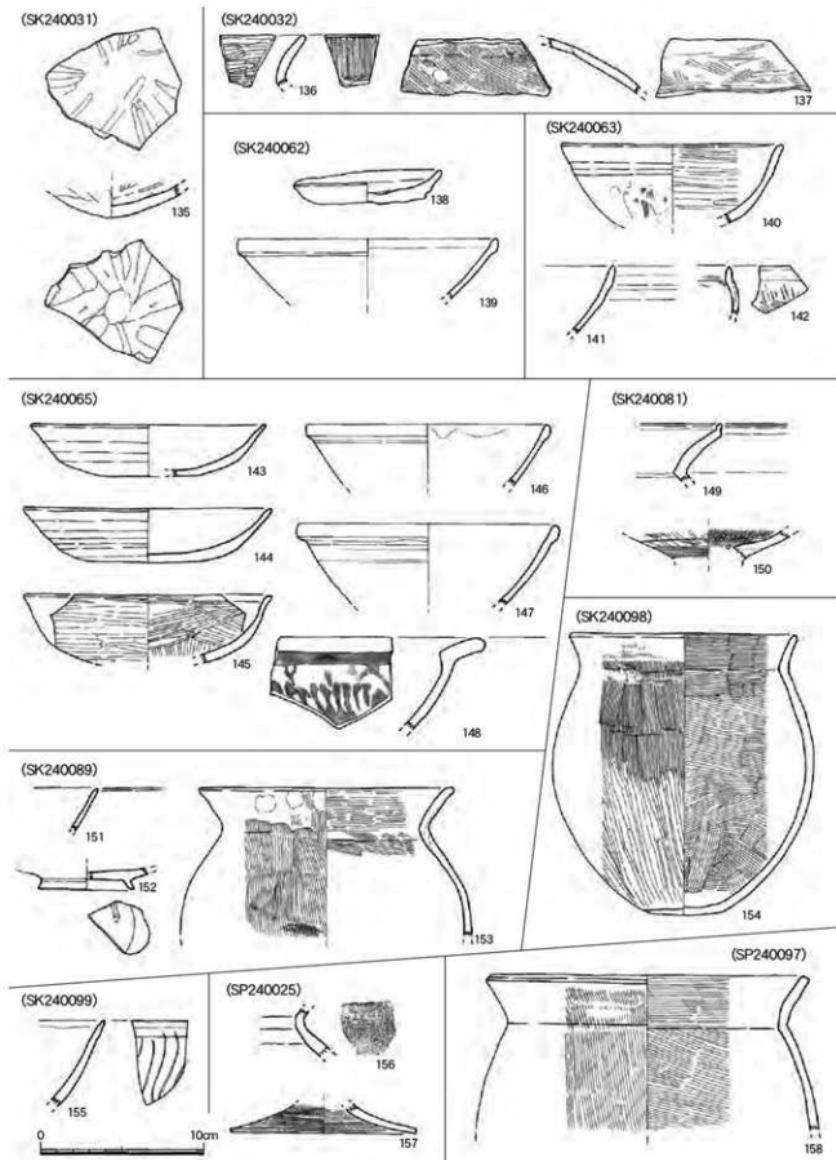


Fig.18 第4面 SK・SP出土遺物実測図 (1/3)

の境にあたり、遺構プランを確認することができなかった。深さは 30cm 以上を測り、覆土は砂質を帯びた黒色土を主体とし、炭化物、焼土を含む。

出土遺物 (Fig.18) 143・144 は土師器の丸底坏で、口径 14.4cm、15.2cm、器高 3.1cm、3.3cm を測る。ともに胎土に赤褐色粒を含み、色調は橙色である。145 は土師器の浅い椀で、口縁は緩やかに外反する。内外面ともに丁寧な磨きを施す。146・147 は白磁碗IV類、148 は施釉陶器の盤で、内面に鉄絵を描く。粗い灰色の胎土に、黄緑色の釉がかかり、体部外面下半は露胎である。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

**SK240081 (Fig.11 Ph.79)** 南側⑦に位置し、南側は削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.45m 以上、短径 0.4m を測る。深さは 25cm で、断面 U 字形を呈する。覆土は暗茶褐色シルトを主体とし、炭化物を少量含む。

出土遺物 (Fig.18) 149 は庄内系の甕で、口縁は上方へ摘み上げる。器壁は厚く、胎土に白色砂粒を多く含み、色調は白橙色を呈する。150 は庄内系の高坏の坏部片で、刷毛目で調整した後、細く密な研磨を施す。胎土に雲母、黒色、褐色粒を含み、色調は褐色を呈する。他に土師器の甕が出土し、これらの遺物から土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

**SK240089 (Fig.11 Ph.80)** 南側⑧に位置し、南側は電力管、西側はコンクリートブロックに削平される。深さは 40cm を測り、覆土は暗茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 151 は土師器の椀の口縁部、内外面ともに回転ナデで調整する。152 は越州窯系青磁碗の底部片で、高台内に目跡が残る。153 は土師器の甕で、体部内面はナデで調整する。古墳時代前期と古代の遺物が混入しており、土坑の時期は不明である。

**SK240098 (Fig.11 Ph.81)** 南側⑨に位置し、南側は電力管に削平される。長径 0.95m、短径 0.45m の楕円形を呈し、深さは 30cm 以上を測る。覆土は明茶褐色シルトを主体とし、少量の炭化物、焼土を含む。

出土遺物 (Fig.18) 154 は畿内V様式系の甕で、底部は平底気味である。内外面ともに細かい刷毛目で調整し、底部内面は簾状となる。体部外面下半は縦方向の工具による強いナデを施す。土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

**SK240099 (Fig.11 Ph.81)** 南側⑨に位置し、北側、東側、南側は電力管に削平される。西側の壁面のみ検出し、平面プランは円形を呈すると考えられる。深さは 30cm 以上を測り、覆土は黒褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 155 は白磁碗V-2b類で、外面に縦竪文を描く。他にヘラ切り底の土師器、瓦器、無釉陶器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

#### (4) ピット (SP)

**SP240025 (Fig.11 Ph.73)** 南側⑤に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 40cm を測る。深さは 10cm で、覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 156 は山陰系甕の肩部片で、櫛目による波状文を巡らす。157 は庄内系の小型の高坏の裾部で、外面は細かい刷毛目調整の後、横方向の研磨を施す。ピットの時期は古墳時代初頭と考えられる。

**SP240097 (Fig.11 Ph.81)** 南側⑨に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 20cm を測る。深さは 15cm で、覆土は暗茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.18) 158 は弥生土器の甕で、口縁は外反し、端部は方形に仕上げる。内外面刷毛目調整である。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

## 6) 第5面の調査 (Fig.19 Ph.84-96)

第5面は道路面から下へ 1.5m 以上となり、安全が確保できないため、調査を行うことができなかった。ただし南側⑤で、甕棺を確認したため、その箇所のみ、急遽、仮設の土留め矢板を設置してもらい、調査を行った。遺構面は現道路面から約 2.0m 下で、標高は 3.6m である。

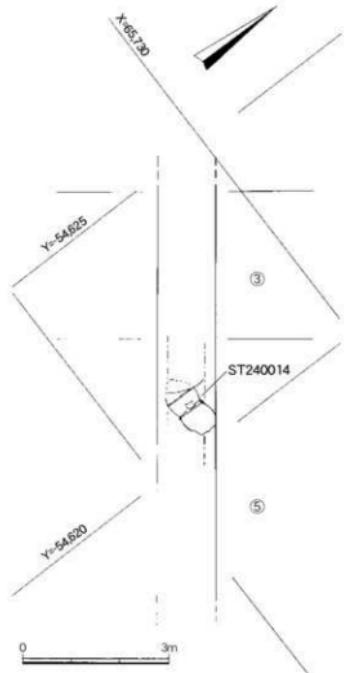


Fig.19 第5面全体図 (1/100)

### (1) 甕棺 (ST)

**ST240014** (Fig.19 Ph.84-96) 南側⑤に位置し、北側は 3 区の矢板設置により搅乱を受け、南西側は SE240013 に、南側は電力管に削平される。接口式の成人用甕棺墓で、上甕、下甕ともに甕を用いる。墓壙は時間的制約もあり、確認することができなかった。甕棺はほぼ水平に据えられ、主軸方位は N-92°-W である。上甕の底部を欠損するが、比較的良好な遺存状況であった。内部からは人骨も出土しており、下甕に足を挿入し、ひざを折り、北側に倒して、埋葬されていた。上甕からは、頭蓋骨、上腕骨も出土するが、頭蓋骨は正位置を保っていない。形質的特徴から性別は女性、年齢は成年と推定される（付編 5 参照）。甕棺は弥生時代中期前葉に位置付けられる。

**出土遺物 (Fig.20 Ph.90)** 159 は上甕に用いられた甕で、底部を欠損する。口径 58.5cm、復元器高 72.5cm を測り、口縁部は逆「L」字状を呈するが、内面にも鈍い面をもって張り出す。口縁部から胴部かけて丸味をもち、胴部最大径からやや下がった位置に断面三角形の低い突帯を貼付する。器面の大半をナデ調整し、色調は橙褐色を呈する。胴部下半に黒斑が認められる。160 は下甕に使われた甕で、上甕と類似した口縁部形態や胴部形態をなし、同様の位置に三角突帯を巡らせる。口径 60.2cm、器高 71.9cm で、口縁部や突帯付近をヨコナデする他は、ナデを施す。色調も上甕に類似し、胴部下半に黒斑が認められる。



Ph.84 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（西から）



Ph.85 ⑤西-5面（東から）



Ph.86 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（北から）



Ph.87 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（南から）



Ph.88 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（西から） Ph.89 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（南東から）



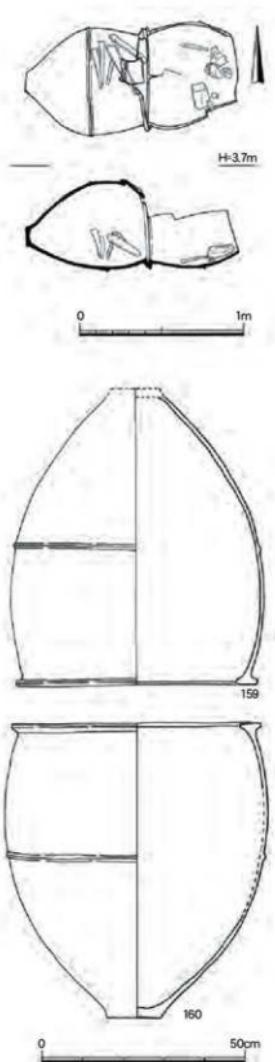


Fig.20 ST240014 実測図(1/30)  
および出土遺物実測図(1/12)



Ph.90 ST240014 出土遺物



Ph.91 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（西から）



Ph.92 ⑤西-5面 ST240014 検出状況（東から）



Ph.93 ⑤西-5面 ST240014 人骨出土状況(西から)



Ph.94 ⑤西-5面 ST240014 人骨出土状況(南東から)



Ph.95 ⑤西-5面 ST240014 人骨出土状況(南から)

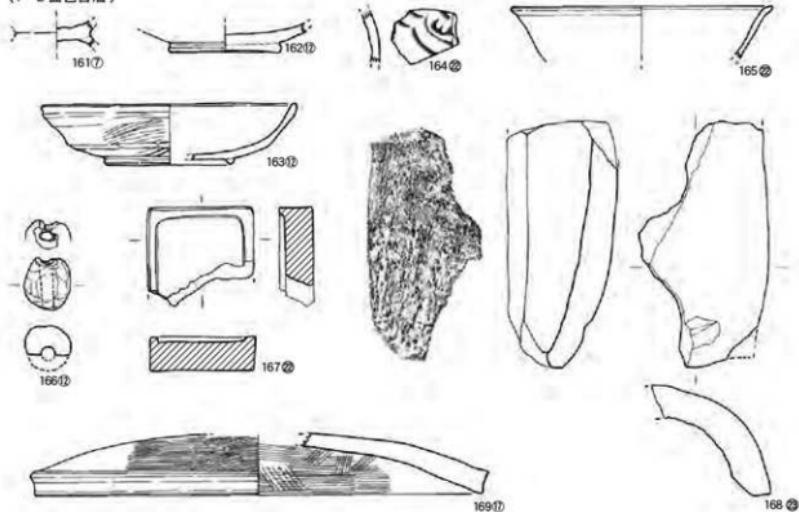


Ph.96 ⑤西-5面 ST240014 人骨出土状況(西から)

#### 7) その他の出土遺物 (Fig.21-23 Ph.83)

161-169は1-2面の包含層出土遺物である。161は東海系S字状口縁の台付き甕の底部片である。162は畿内産の縁軸陶器で、円盤状高台を有し、外底部に糸切りが残る。胎土は灰色で、濃緑色の釉がかかること。163は浅い瓦器椀で、外面に粗い磨きを施す。164は越州窯系青磁の壺の肩部片で、片彫りの文様を施す。165は白磁碗IX類である。166は管状土錘で、1/2を欠損する。長さ3.2cm、幅2.8cm、現状の重さ20.0gである。167は天草石の方形の硯で、2/3を欠損する。陸部は滑らかで、墨が付着する。168は土師質の行基瓦で、内面は布目が残る。169は土師質土器の焙烙の蓋で、内外面に煤が付着する。170-175は2-3面の包含層出土遺物である。170は須恵器の皿で、底部はへラ切りで調整する。171は土師器の把手付甕である。172は山陰系の二重口縁壺で、外面に多量の

(1~2面包含層)



(2~3面包含層)

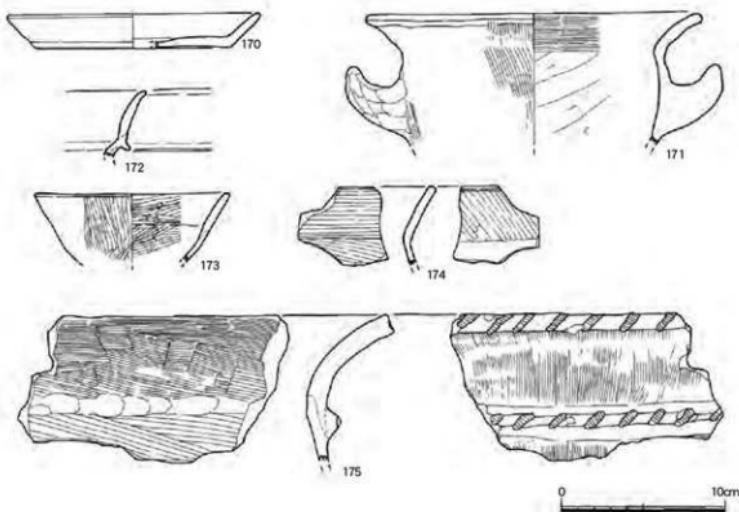
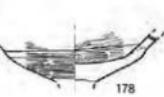
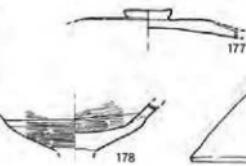
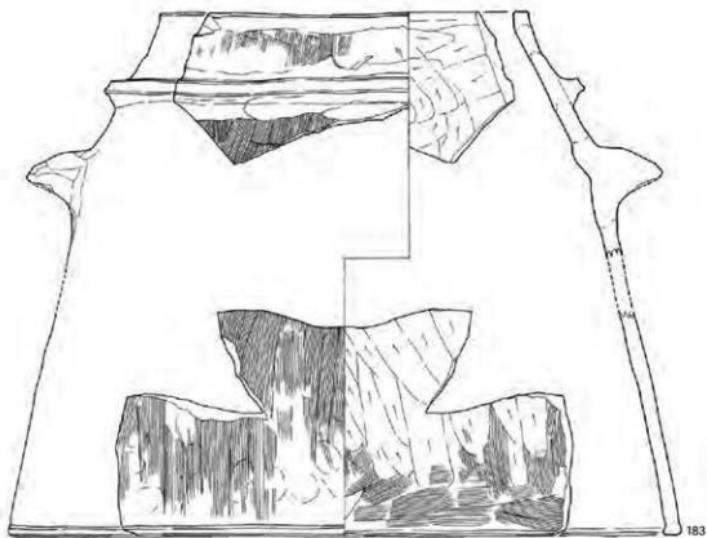
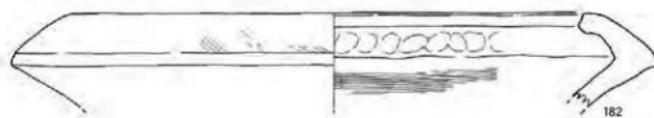


Fig.21 包含層出土遺物実測図① (1/3)

(3~4面包含層)



(4~5面包含層)



0 10cm

Fig.22 包含層出土遺物実測図② (1/3)

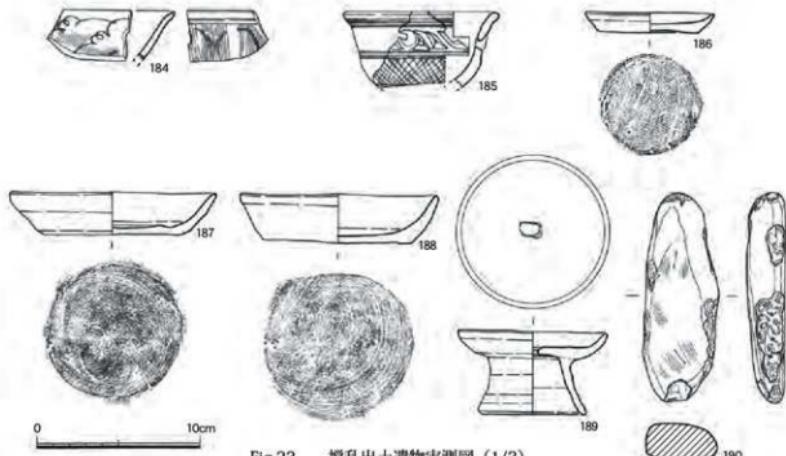


Fig.23 摂乱出土遺物実測図 (1/3)

煤が付着する。173・174は畿内V様式系で、173は鉢、174は外面に多量の煤が付着する甕である。175は弥生土器の大型の甕で、頸部の突帯と口縁端部に刻目を施す。176-179は3-4面の包含層出土遺物である。176は和泉型瓦器椀で、内面は細い研磨が施される。微細な白色砂粒と赤褐色粒を含む橙色の胎土で、外面の色調は灰橙色である。177は須恵器の环蓋で、天井部は削りで調整する。178は庄内系の高環で、内外面ともに細い研磨を施す。胎土に多量の白色砂粒、雲母を含み、色調は暗褐色を呈する。179は畿内V様式系の精製小型器台である。180-183は4-5面の包含層出土遺物である。180は高麗陶器の甕の体部片で、外面は叩きが残り、内面は當て具痕をナデ消す。181は弥生土器の高環で、内外面に暗文を施す。182は大型の袋状口縁甕である。183は移動式竈で、内面に煤が付着する。184-190は摂乱の出土遺物である。184は初期龍泉窯系青磁碗、185は白磁の香炉で、中位に透かし文様が彫られる。186-188は回転糸切り底の土師器の小皿と坏で、完形品である。189は土師器の脚付皿で、中央に穿孔を有する。190は花岡岩製の敲石で、敲打痕が側面に残る。重さは199.8gを量る。

## 8) 小結

24区は203次調査において、古砂丘の頂部と緩斜面に立地する。古砂丘上では弥生時代中期前葉の甕棺墓を検出しておらず、他の調査区と列埋葬の様相を呈する。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、竪穴住居跡を3軒確認し(SC240073・SC240079・SC240080)、住居跡からは庄内系、布留系、近畿V様式系、山陰系と他地域の土器がみられ、特にSC240080からは、南九州系の可能性がある長型甕(121)と鉢(130)が出土する。また、包含層からは東海系のS字状口縁台付き甕が出土するなど、博多湾沿岸の活発な交流を示す。引き続き、古代においても、SP240085から灰釉陶器、中世においてもSK240211から灯明皿として使用された吉備系の土師器の高台付坏が出土している。



Ph.97 包含層・摂乱出土遺物

## 26. 25 区の調査

### 1) 概要 (Fig.4 (23 区) Ph.1・2)

25 区は、西工区の北側中間杭の南側に並行して埋設される合流管を設置するための立会調査である (23 区 -Fig.4)。大部分は 8 区と 9 区の調査区に含まれていたが、8 区と 9 区の間の長さ 14.6m が未調査であった。幅 1.1m を測り、調査面積は 16.06m<sup>2</sup> である。この地点は生活道路確保のため、発掘調査ができなかった箇所で、日中の調査は可能となつたが、当日中に復旧することを求められたため、長さ 14.6m を 2 日に分け、第 1 面から第 5 面までの調査を行つた。便宜的に調査区間を調査日の①②で分け、遺構の位置等を示す (Fig1 参照)。調査は他の立会調査と同様、第 1 面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行つた。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、地山面である第 5 面までの調査を行つた。ただし、現道路面から 1.5m 下まで、概ね第 3 面までは重機による掘削も行つたが、1.5m 下からは、安全対策の一環で、仮設の H 鋼を設置したため、重機の使用ができず、包含層は人力で掘削した。調査は、2015 年 9 月 17 日と 18 日に行つた。

遺構面は発掘調査を行つた他の調査区を参考に設定した。第 1 面は東側が標高 4.8m、西側で 4.5m、地山の砂丘面である第 5 面も東側が標高 3.9m、西側が 3.5m で、東から西へと徐々に傾斜する。

検出した遺構は近世の石積遺構 1 基、13 世紀の土坑 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 17 基、ピット 4 基、古代のピット 1 基、弥生時代終末から古墳時代前期の土坑 13 基、ピット 5 基、弥生時代中期の土坑 1 基である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、滑石製品、鉄製品等がコンテナケース 5 箱分出土する。



Ph.1 ①東-5 面調査風景（西から）



Ph.2 ①西-4 面調査風景（北から）

## 2) 第1面の調査 (Fig.1 Ph.3-8)

第1面は灰褐色土、粘質土の上面で検出し、東側は現道路面から約0.9m下で、標高4.8m、西側は約1.1m下で、標高4.5mを測る。遺構の遺存状況は良好である。排土処理の関係で、①②の境付近は遺構確認ができなかった。検出した遺構は近世の石積遺構1基、11世紀後半から12世紀前半の土坑7基である。



### (1) 土坑 (SK)

**SK250025** (Fig.1 Ph.5・8) ②に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは0.9m以上の方形を呈し、礫岩、砂岩、花崗岩で構築する石積み遺構である。検出した石材は全て自然石を用いる。1段確認し、高さは約20cmを測る。掘方のプラン等は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.2) 1は回転糸切り底の土器器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径9.0cm、器高1.1cmを測る。胎土は精良で、明褐色を呈する。2は瓦質土器の鉢の口縁部片である。他に土器器の模や須恵質の平瓦が出土するが、遺構の時期は近世と考えられる。

**SK250037** (Fig.1 Ph.6) ②に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.3m以上、短径1.1mを測る。深さは35cmで、覆土は灰褐色土を主体とし、炭化物、焼土が多く混入する。

出土遺物 (Fig.2) 3は土師質の平瓦を使用した瓦玉である。厚さ1.0cmで、凸面はナデ、凹面は布目が残る。一部、破損するが、直径2.2cmの円形に整形する。側面は丁寧に研磨調整を施す。重さは4.83gを量る。他に回転糸切り底の土器器、白磁小片が出土し、土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

## 3) 第2面の調査 (Fig.3 Ph.9-11)

第2面は暗褐色土の上面で検出した。遺構面の高さは、東側が現道路面から約1.2m下の標高約4.5m、西側は約1.5m下の標高約4.1mである。遺構の遺存状況は良好であったが、排土の関係で、①②の境を確認できなかった。検出した遺構は11世紀後半から12世紀の土坑4基とピット3基である。

Fig.1 第1面全体図 (1/100)



Ph.3 ①東-1面(北から)



Ph.4 ①西-1面(西から)



SK250025

Ph.5 ②東-1面(西から)



Ph.6 ②西-1面(北から)



Ph.7 ①東-1面土坑(北から)



Ph.8 ②東-1面 SK250025(北から)

(SK250025)



(SK250037)



3

0 10cm

Fig.2 第1面遺構出土遺物実測図(1/3)

### (1) 土坑 (SK)

**SK250040 (Fig.3 Ph.11)** 調査区②に位置し、南側は調査区外へ延び、東側は他の遺構に削平される。平面プランは円形を呈すると思われ、直径 0.8m 以上を測る。深さは 50cm で、覆土は黒褐色粘質土に茶褐色土が斑状に混入し、炭化物、焼土を含む。下層 10cm は炭化物層が堆積する。

出土遺物 (Fig.4) 4 は下層の遺物の混入で須恵器の返りを有する壺蓋である。5 は土師器の椀で、内面は丁寧な研磨調整を施す。6 は白磁碗 V-3b 類で、外面に縦櫛花卉文を有する。7 は瓦賀土器の盤と思われ、SK250041 の 11 と類似する。文様構成は 11 と同じであるが、体部内面の研磨の幅が広く、底面の文様が体部の研磨に及んでいる点など相違点もある。色調は灰黒色を呈する。他に回転糸切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

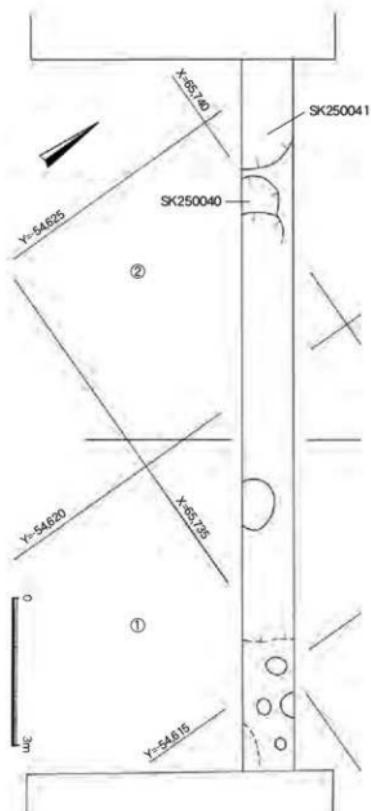


Fig.3 第2面全体図 (1/100)

**SK250041 (Fig.3 Ph.11・16・20)** 調査区②に位置し、東側のラインは検出したが、それ以外は調査区外へ延び、確認できなかった。直径 1.0m 以上を測る円形を呈し、深さは 1.5m 以上である。覆土は灰黒色土に茶褐色シルトが斑状に混入し、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.4) 8・9 は白磁で、8 は碗Ⅱ類、9 は碗V 類の口縁部片である。10 は龍泉窯系青磁碗 I-3a 類で、内面に片彫文と櫛目を施す。11 は瓦賀土器の盤か。復元底径 24.0cm を測る。内底面は暗文で文様を描き、体部内面も丁寧な横方向の磨きを行う。上部は欠損するが、欠損部附近に底面同様、暗文が施される。体部外面下半はヘラ削りが残る。色調は灰色を呈する。12-14 は下層の遺物の混入で、12 は布留系の土師器の甕、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の削りで調整される。13 は庄内系の土師器の甕で、外面は叩きの後、部分的に刷毛目、内面は削りを施す。14 は弥生土器の甕の底部片である。他に回転糸切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

### 4) 第3面の調査 (Fig.5 Ph.13-16)

第3面は暗茶褐色土の上面で検出した。遺構面の高さは、東側が現道路面から約 1.4m 下の標高約 4.3m、西側は約 1.7m 下の標高約 3.9m である。検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭のピット 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 4 基、ピット 1 基、13 世紀前半の土坑 1 基である。

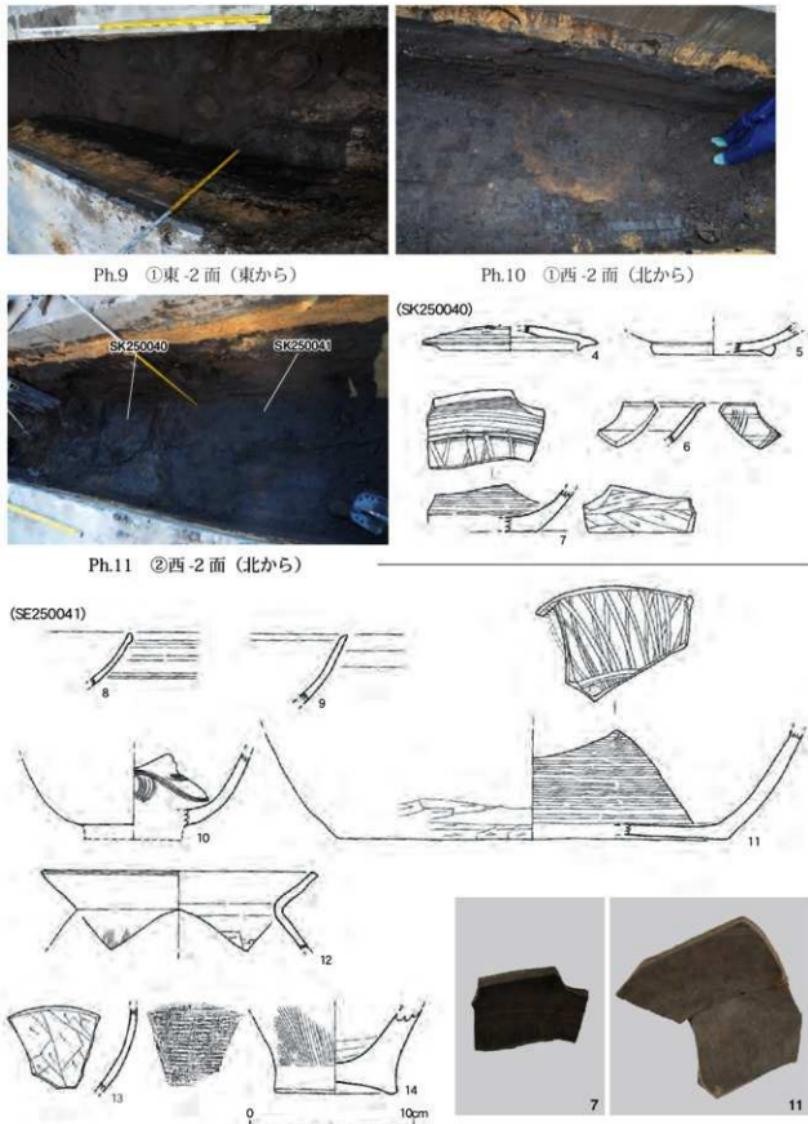


Fig.4 第2面遺構出土遺物実測図 (1/3)

Ph.12 SK250040・250041 出土遺物

(1) 土坑 (SK)

SK250007 (Fig.5 Ph.13) ①に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径約0.7mを測り、深さは25cmである。覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.6) 15は下層の遺物の混入である。円筒埴輪の小片で、内外面に赤色顔料の付着がある。土坑の時期は中国の施釉陶器が出土することから中世前期と考えられる。

Ph.13 ①東-3面（西から）

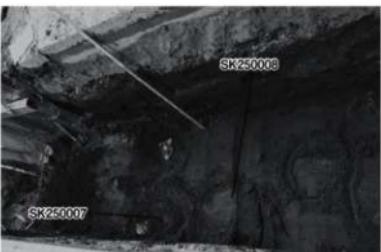


Fig.5 第3面全体図 (1/100)



Ph.14 ①西-3面（東から）



Ph.15 ②東-3面（北から）



Ph.16 ②西-3面（北から）

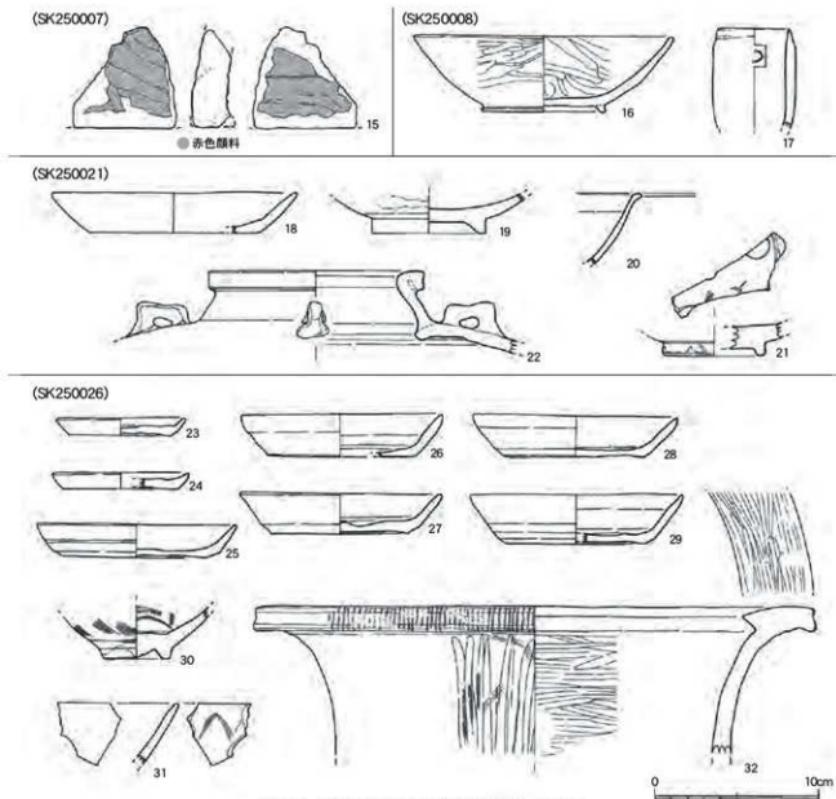


Fig.6 第3面遺構出土遺物実測図（1/3）

**SK250008 (Fig.5 Ph.13)** ①に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径約0.6mを測る。深さは20cmで、覆土は灰黒色土を主体とし、淡橙色土、焼土が混入する。

**出土遺物 (Fig.6)** 16は瓦器楕で、内外面ともに幅広の磨きを行い、指オサエの痕跡が残る。17は蛸壺の小片で、上部に穿孔を有する。他に回転糸切り底の土師器、泥岩の砥石等が出土し、土坑の時期は12世紀前半頃と考えられる。

**SK250021 (Fig.5 Ph.14・18・19・21)** ①②に位置し、北側、南側ともに調査区外へ延びる。平面プランは梢円形を呈し、長径3.5m、短径1.1m以上を測る。覆土は灰褐色土を呈し、炭化物、焼土が混入する。深さは約60cmである。

**出土遺物 (Fig.6)** 18は回転ヘラ切り底の土師器の环で、外底部に板状压痕を有する。19・20は白磁で、19は碗II類の底部片で、褐色粒を含んだ淡橙色の胎土に化粧土を施し、光沢のある白色釉をかける。前面に細かい貫入が入る。碗V-3a類で、口縁部は外反する。21は龍泉窯系青磁碗I類の底部片である。22は施釉陶器の四耳壺で、縦位の耳を付ける。砂粒を多く含む灰橙色の胎土にぶい黒褐色の釉がかかる。土坑の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

**SK250026 (Fig.5 Ph.15・19・22)** ②に位置し、北側、南側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径約2.5mを測り、深さは1.5m以上である。覆土は灰褐色土に大量の炭化物、焼土を含む。上層で多量の土師器が出土し、土器溜りがあったと考えられる。

**出土遺物 (Fig.6 Ph.76)** 23-29は回転糸切り底の土師器である。27以外は、胎土に赤褐色土を多く含み、色調は明橙色を呈する。23・24は小皿で、口径8.0cm、8.4cm、器高1.1cm、1.0cmを測る。25-29は壺で、口径12.2-13.0cm、器高2.0-3.0cmである。30は同安窯系青磁碗I-b類で、体部外面に細かい縦方向の櫛目文を有する。31は龍泉窯系青磁碗II-b類で、外面に鎧蓮弁をもつ。32は下層の遺物の混入で、弥生土器の大型の広口壺である。鋤先状の口縁を有し、口唇部に工具による刻目、頸部外面には暗文を施す。出土遺物から土坑の時期は13世紀前半と考えられる。



Fig.7 第4面全体図 (1/100)

### 5) 第4面の調査 (Fig.7)

第4面は暗黄褐色シルトの上面で検出した。遺構面の高さは、東側が現道路面から約1.7m下の標高約4.0m、西側は約1.9m下の標高約3.7mである。遺構の遺存状況は良好である。検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑6基、ピット2基である。

### 6) 第5面の調査 (Fig.8 Ph.23-27)

第5面は明黄褐色砂の砂丘面で検出した。遺構面の高さは、東側が現道路面から約2.1m下の標高約3.6m、西側は約2.1m下の標高約3.5mである。西から東へ向かって徐々に傾斜する。遺存状況は良好で、検出した遺構は弥生時代中期の土坑1基、弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑7基、ピット2基、11世紀後半から12世紀前半の土坑2基である。

#### (1) 土坑 (SK)

**SK250017 (Fig.8 Ph.23)** ①北側は他の遺構に切られる。平面プランは円形を呈し、0.45mを測る。深さは50cmで、覆土は茶褐色シルトである。

**出土遺物 (Fig.9)** 33は弥生土器の大型の広口壺である。鋤先状の口縁を有し、口唇部には1条の沈線を巡らす。体部外面はナデ、内面は横方向の研磨を施す。外面は黒色顔料が塗布される。他に弥生土器の甕の小片が出土する。出土遺物から土坑の時期は弥生時代中期と考えられる。



Ph.17 ①東-4面(北から)



Ph.18 ①西-4面(東から)



Ph.19 ②東-4面(東から)



Ph.20 ②西-4面(北から)



Ph.21 ②東-4面SK250021(北から)



Ph.22 ②東-4面SK250026(北から)

#### 7) その他の出土遺物 (Fig.20~22 Ph.83)

34は1-2面の包含層出土遺物で、窯道具のトチンである。底面は円形を呈し、底径17.0cmを測る。現存の最大厚2.0cmである。体部の断面は多角形を呈し、縦方向に稜線をもつ。胎土には1.0cm大の石英を含め、多量の砂粒を含み、橙色を呈する。外面は灰を被り、色調は茶褐色である。

35・36は2-3面の包含層出土遺物である。35は白磁碗II-1類で、白灰色の胎土に化粧土を施し、灰白色の釉がかかる。部分的に黄灰色を呈し、内外面に焼き膨れがみられる。36は龍泉窯系青磁碗

II-c類で、外面に鎧蓮弁、内面見込みに印刻を有する。

37は3-4面の包含層出土遺物で、白磁の碗である。高台は外底部内面をわずかに削り出し、底部は厚い。内面見込みには段を有する。胎土は精良で、色調は灰白色、釉はやや青味を帯びた白色釉が厚くかかる。

38-53は4-5面の包含層出土遺物である。38は施釉陶器の壺の底部片で、灰色の胎土に緑灰色の釉がかかる。外底部には胎土目が残る。39は山陰系の二重口縁壺で、頸部から口縁への折り返し部は突出し、口縁外面には擬凹線が巡る。体部内面は削りで調整される。口縁部外面に一部煤の付着がみられる。40・41は布留系の甕で、40の口縁端部は内に摘み上げ、上端は凹状に窪む。体部外面

は縱方向の刷毛目、内面は削りで調整する。41は丸底の底部片で、器壁は薄く、内面は縱方向の削りを施す。外面には煤の付着がある。42は弥生土器の甕の口縁部片で、内外面ともに刷毛目で調整し、口縁端部は方形に仕上げる。外面は多量の煤が付着する。43は畿内V様式系の甕の底部片で、突出する丸底を呈する。内面の刷毛目が簾状を呈する。44-46は弥生土器の甕の底部片である。44の外面はタタキ、内面は工具によるナデで調整する。45・46は凸レンズ状の底部で、45は外底面にも刷毛目が残る。47は弥生土器の高环の环部片で、内外面ともに暗文を施す。48・49は大型の弥生土器の甕の口縁で、甕梢の可能性もある。48の口縁は長大で、大きく外反する。内外面ともに粗い刷毛目で調整される。49の口縁は内にわずかに傾斜し、逆L字状を呈する。50は甕の口縁部片で、逆L字状を呈し、口縁下に三角突帯を巡らす。51は大型の広口壺である。鋤先状の口縁を有し、口唇部には1条の沈線を巡らす。52は壺の底部片で、内面は器面の磨滅が著しく、一部、剥落する。53は鉄製の鉢で、基部を欠損する。刃部の先端は三角状を呈し、上方に反る。現存長9.6cm、幅1.0cm、厚さ0.1cmを測る。

54・55は2区との境の擾乱から出土した弥生土器である。54は逆L字状の口縁をもつ甕で、復元口径30.0cm、高さ約21.0cmを測る。内面は指ナデ、オサエで調整し、外面は下半が縱方向、上半は横方向の研磨を施す。外面には黒色顔料が付着する。55は素口縁の広口壺である。内面には細かい横方向の研磨、外面はナデで調整した後、疎な縱方向の暗文を施す。

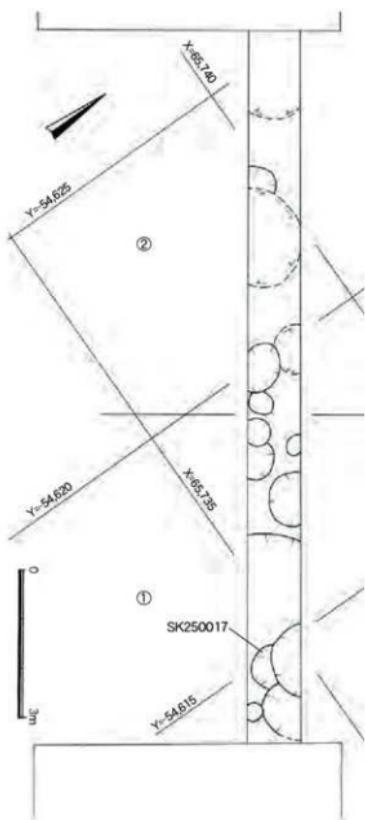


Fig.8 第5面全体図 (1/100)



Ph.23 ①東-5面(西から)



Ph.24 ①西-5面(北から)



Ph.25 ②東-5面(西から)



Ph.26 ②西-5面(北から)



Ph.27 ②西-5面(北から)



Ph.28 SK250017 出土遺物

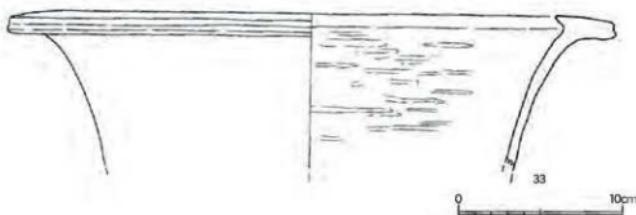


Fig.9 第5面遺構出土遺物実測図 (1/3)

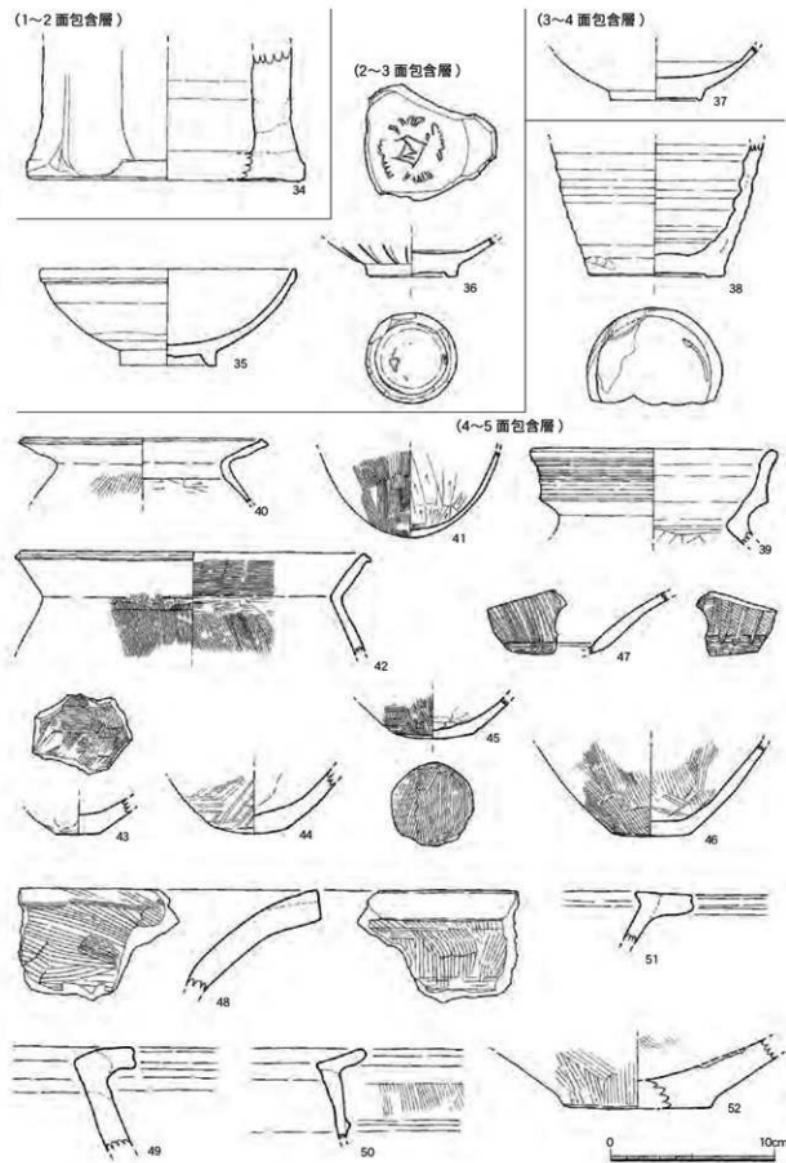


Fig.10 その他の出土遺物実測図① (1/3)

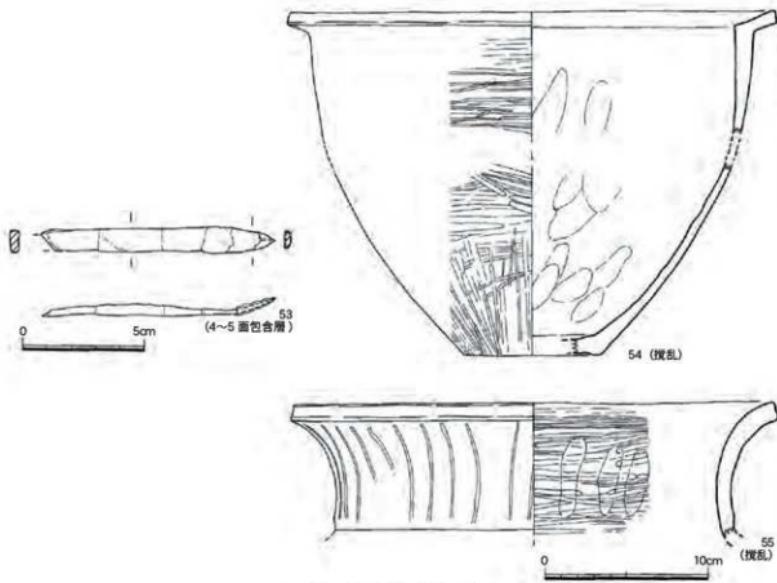


Fig.11 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)



Ph.29 その他の出土遺物

### 8) 小結

25 区は古砂丘の頂部と西側緩斜面に位置する。狹小な調査区であったが、検出した遺構、遺物は周辺の調査成果と同様である。弥生時代中期の土坑（SK250017）が最も古く、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて、集落が営まれ、古代まで細々と続く。11世紀後半から12世紀にかけて遺構数が増え、活発な活動がなされていたことを示す。出土遺物では、弥生時代中期の土坑（SK250017）出土の広口壺（33）と概乱出土の広口壺はともに外面に黒色顔料が塗布されており、喪棺等に使用された可能性も考えられる。また、1点であるが、円筒埴輪が中世の土坑に混入して、出土している。

## 27. 26 区の調査

### 1) 立会の概要

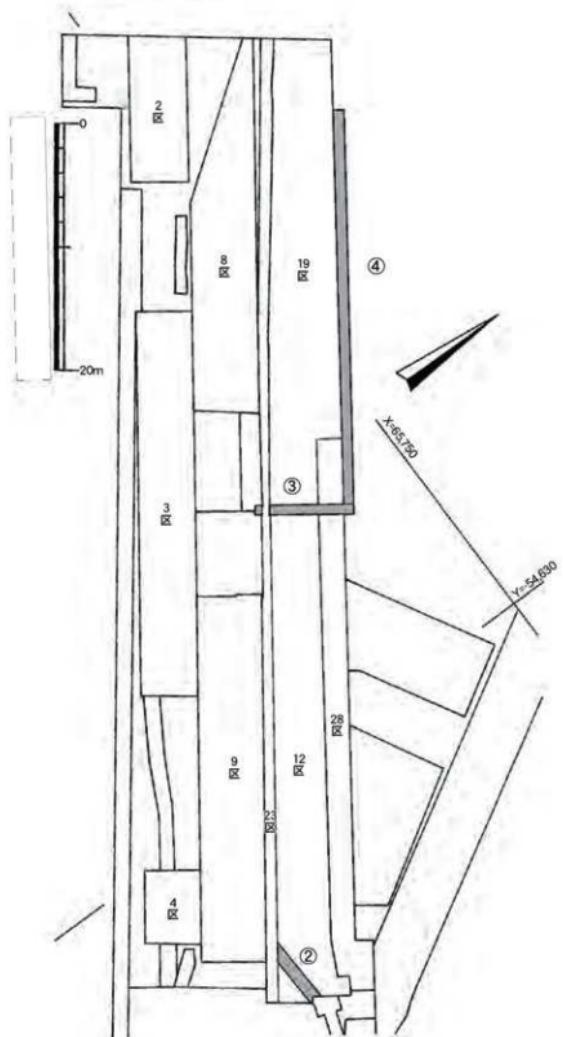


Fig.1 26 区調査区位置図 (1/400)

対象地は、西工区の北半部、第12・19区に隣接した区域で、雨水排水合流管移設工事に先立つ埋設管調査の掘削に立ち会った。幅・長さ・深さはそれぞれ異なるが、GL1.4～1.7mまでの施工底を1～4面に渡って実施している。前年度実施分を①区として、東端部を②区、中央部を③区、西部北端部を④区とし、2016年5月18日～8月29日の延べ10日間に渡って実施した(Fig.1)。面積は63.1m<sup>2</sup>である。

### 2) 各小区の報告

#### ②区の立会 (Fig.2 Ph.1～3)

西工区東端部で長さ8.5m幅1mで実施した。表土下-1.0mを第1面、-1.2mを第2面、-1.4mを第3面として遺構確認を行っている。

第1面は大部分を搅乱されており、西侧幅80cm程の範囲で11世紀後半の土坑SK06と柱穴2基を検出した。ヘラ切りの土師器環皿・黒色土器等が出土した。

第2面も同様に大部分を搅乱されており、第1面と同位置で11世紀後半の柱穴2基を検出した。ヘラ切りの土師器環・黒色土器・瓦等が出土している。

第3面も大部分を搅乱されており、第2面同位置と東端部で12世紀後半の土坑SK01、古墳時代初頭の土坑SK10と柱穴1基を検出した。土師器環皿・台石・古式土師器甕・高环等が出土している。

出土遺物 (Fig.5) 1はSK01出土の台石。厚3.6cm残存で13.8cmを測る。表裏両面と側面に敲打痕と擦痕が残る。砂岩製で灰色を呈する。2は包含層2層出土の石杵片。厚5.7cmの楕円形柱状の形態で、側面は丁寧な研磨、底面は敲打痕と鏡面研磨痕が残る。頸岩製か、暗青灰色を呈する。3は包含層3層出土の弥生土器の逆「く」字二重口縁壺の口縁片。内外面ヨコナデ後、外面に櫛描波状文を施す。胎土は白色粒を多く含み、内外面は橙色を呈する。



Ph.1 合流管 2 1面 (GL100 東から)

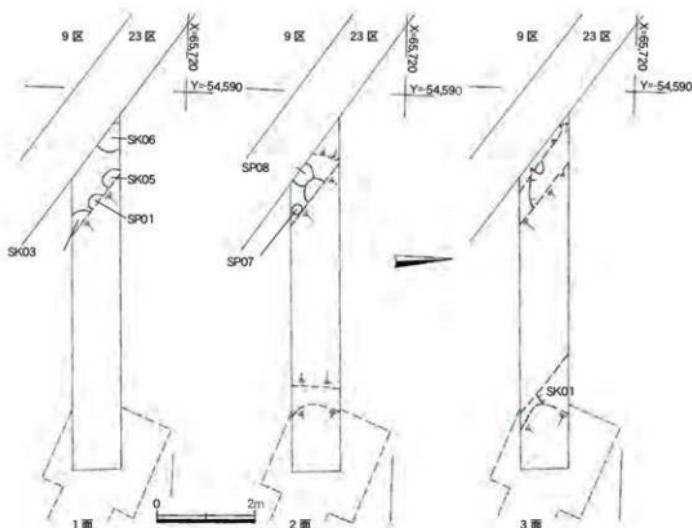


Fig.2 合流管 2 全体図 (1/100)



Ph.2 合流管2 2面 (GL120 東から)



Ph.3 合流管2 3面 (GL140 東から)



Ph.4 合流管3 1面 (GL100 東から)

### ③区の立会 (Fig.3 Ph.4 ~ 7)

西工区中央部で長さ 8.7m 幅 1m で実施した。表土下 -1.0m を第1面、 -1.3m を第2面、 -1.5m を第3面、 -1.7m を第4面として遺構確認を行った。

第1面は全て搅乱内で、遺構は検出されなかった。

第2面も大部分を搅乱されており、南部の1m程の範囲で12世紀後半の土坑 SK01・02 の2基を検出した。白磁・青磁、糸切りの土師器壺皿、石鍋等が出土した。

第3面も大部分を搅乱されており、第2面と同位置で12世紀後半の土坑 SK03・04 の2基を検出した。白磁・ガラス坩堝、糸切りの土師器壺皿等が出土した。

第4面では土坑 SK03・04 の残存分を確認したのみである。

出土遺物 (Fig.5) 5・6は包含層3層出土の土師器。5は壺で口径 12.0 器高 2.7cm を測る。底部が小さめで口縁が強く開く。内外面に回転ナデ後糸切りの外底に板压痕が残り、内底は不整方向にナデる。胎土は精良で、内外面は鈍い橙色を呈する。6は皿で口径 7.8 器高 0.9cm を測る。口縁が強く開き、内外面に回転ナデ後外底に糸切り離しを施す。胎土は精良で、内外面は橙色を呈する。

### ④区の立会 (Fig.4 Ph.8 ~ 15)

西工区西部北端部で長さ 34m 幅 1m で実施した。このうち東 6m あまりは搅乱のみで遺構は確認されなかった。全体的に搅乱が深く、最下の -1.7m の面のみで遺構検出を実施

している。長大なため 7 つの小区に区分し、延べ 7 日間にわたった。

遺構は古代を中心に、12 世紀後半の柱穴 1 基、12 世紀初頭の土坑 SK06 を 1 基、古代で 8 ~ 9 世紀初の土坑 SK09・11・13・14・15・16・17・19・20 の 9 基・溝 SD05・10 の 2 条と柱穴 3 基を、古墳時代後期の土坑 SK04 と柱穴 2 基を、古墳時代前期の土坑 SK03 の 1 基と柱穴 2 基を検出し、遺構の密集度は高い。中世では白磁碗・中国陶器・瓦器塊・土師器杯皿等、古代では須恵器・土師器・

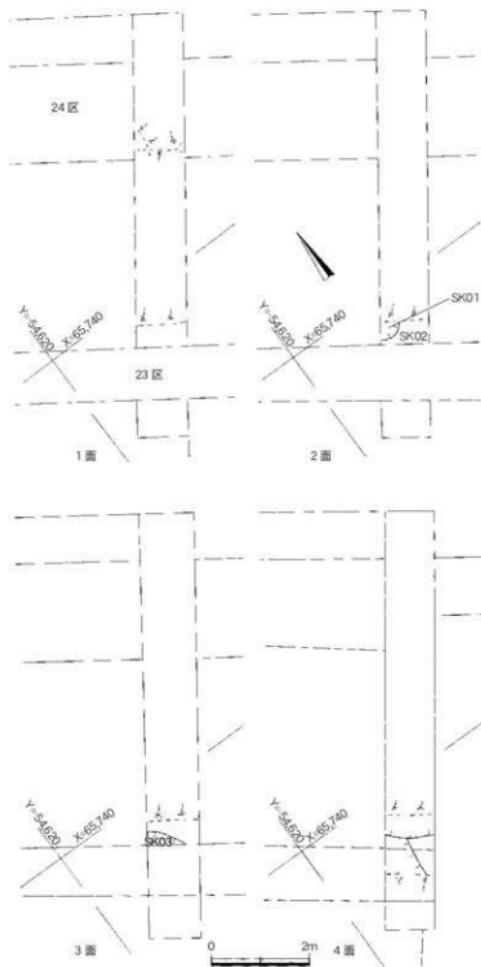


Fig.3 合流管 3 全体図 (1/100)

都城系土師器・新羅焼・製塙土器・鉄器など、古墳時代後期では須恵器・土師器を、古墳時代前期では土師器表の小片を出土している。

出土遺物 (Fig.5) 6はSK013出土の円錐形の製塙土器口縁部。粗雑な作りで外面にケズリ後粗いナデで粘土接合痕が残る。内面は雑なヨコハケを施す。胎土は白色粒を含み、二次被熱で硬く焼締まる。内外面は赤褐色を呈する。7は4ブロック検出面出土の須恵器高環部。口径 10.3cmを測る。口縁下半に削り出しの低い突帯 2条。体部下半にカキメを施す。内外面にペンガラを塗布し還元焼成で黒褐色となる。胎土は精良で紫灰色を呈する。陶質土器の可能性もある。8は6ブロック検出面出土の新羅焼

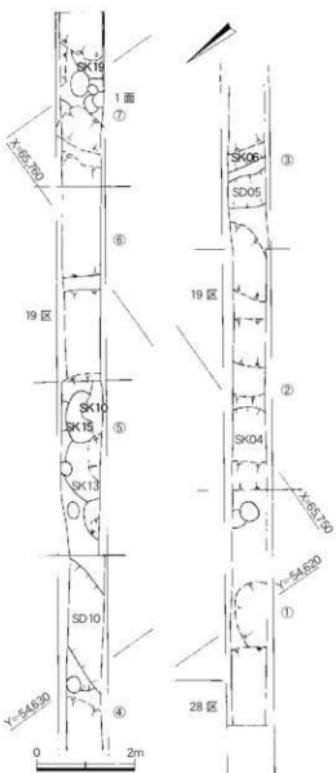


Fig.4 合流管 4 全体図 (1/100)



Ph.5 合流管 3 2面 (GL130 南から)



Ph.6 合流管 3 3面 (GL160 南から)



Ph.7 合流管 3 4面 (GL180 南から)



Ph.8 合流管4①区(GL180 東から)



Ph.9 合流管4②区(GL170 東から)



Ph.10 合流管4③区作業風景

壺口縁部小片で、外面口唇部と口縁下に櫛描波状文を施す。黒色粒子を多く含み外面に暗灰オリーブ色の釉を掛ける。9～15は検出土出士の近世資料である。当該地は江戸時代は瓦町に属しており、瓦以外に陶器・火鉢等の瓦質土器・人形を焼成している可能性がある。9は土師質のスタンプで、「水」の逆字を陽刻している。両端部を欠ぐが、 $4.0 \times 3.9 \times 2.1\text{cm}$ を測る。胎土は精良で雲母を多く含み、淡橙色を呈する。10は楔状の土師質トチンで $2.6 \times 1.9 \times 1.8\text{cm}$ を測る。全面を丁寧にナデ、鈍い橙色を呈する。11・12は土師質の環状のトチン。11は径 $8.2\text{cm}$ 厚 $1.0\text{cm}$ を測る。全面ナデで調整し下面に溝が巡る。胎土は精良で、内外面は浅黄色を呈する。12は径 $9.8\text{cm}$ 厚 $0.9\text{cm}$ を測る。全面指頭ナデで調整し上下面に溝が巡る。胎土は精良で、内外面は灰色を呈する。13はサヤと思われ、厚 $2.2\text{cm}$ を測る。被熱で陶質に変化し、胎土は白色粒を多く含み外面は自然釉で褐色を呈し内面底には白色砂が熔着する。14もサヤと思われ、隅丸方形を呈し、上位に径 $3\text{cm}$ 程の円孔が開く。厚 $2\sim 3\text{cm}$ を測る。外面は粗いタテハケ内面にヨコハケとイタナデを施す。被熱で陶質に変化し、胎土は $3\text{mm}$ 以下の白色粒を多く含み、外面は自然釉で褐色を、内面は鈍い黄色を呈する。15は女性と思われる座像人形下半部で、現存で $7.7 \times 6.5 \times 4.2\text{cm}$ を測る。表裏2面の型成形の人形で側面に接合痕が残り、底面に破裂防止の小孔を開ける。胎土は精良で淡橙色を呈し、素焼きの上に彩色を施し、一部に白色の胡粉と赤色顔料が残る。

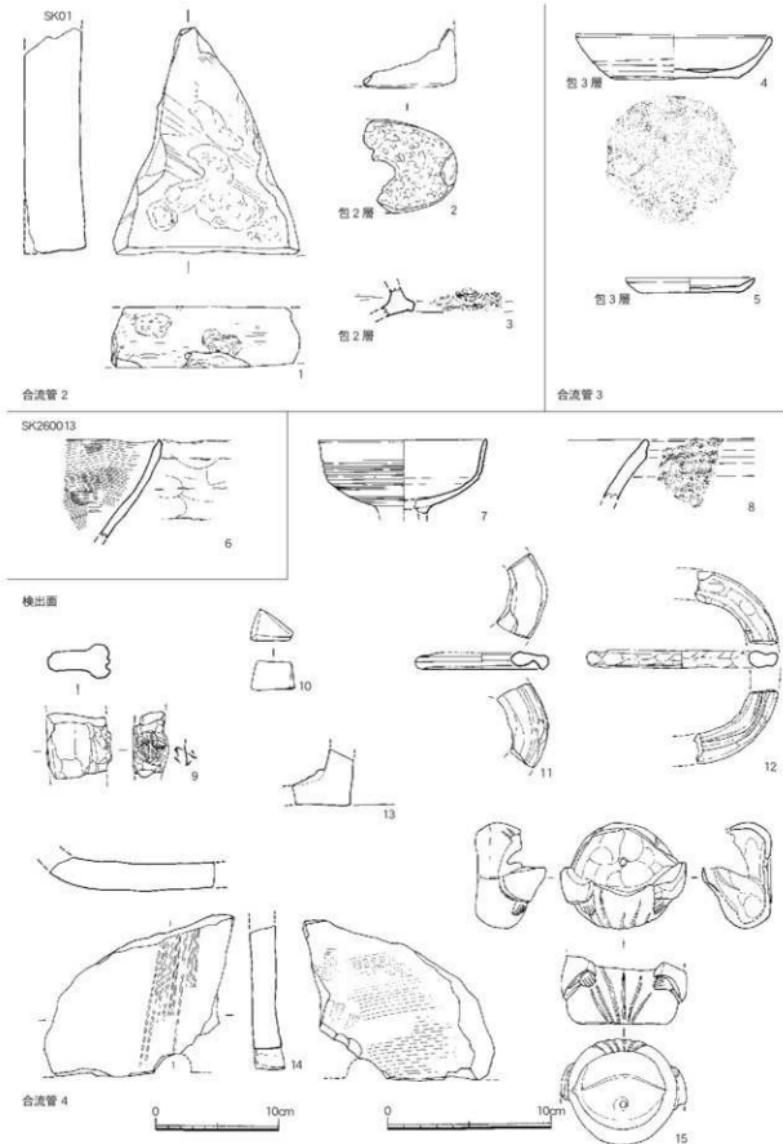


Fig.5 26区出土遺物実測図 (1/3 • 1/4)

### 3) 小結

今回の調査では、②区で12世紀後半の土坑SK01の1基、11世紀後半の土坑SK06の1基と柱穴2基、古代の柱穴1基、古墳時代初頭の土坑SK10の1基と柱穴1を、③区で12世紀後半の土坑SK01・02・03・04の4基、④区で12世紀後半の柱穴1基、12世紀初頭の土坑SK06を1基、古代で土坑SK09・11・13・14・15・16・17・19・20の9基・溝SD05・10の2条と柱穴3基を、



Ph.11 合流管4③区(GL170 東から)

古墳時代後期の土坑SK04と柱穴2基を、古墳時代前期の土坑SK031基と柱穴2基を検出した。④区での8～9世紀初の遺構の集中が目立つ

遺物としては、石杵7と新羅焼8、近世の窯関係遺物が注目される。



Ph.12 合流管4④区(GL170 東から)



Ph.13 合流管4⑤区(GL170 東から)



Ph.14 合流管4⑥区(GL170 東から)



Ph.15 合流管4⑦区(GL170 東から)

## 28. 27 区の調査

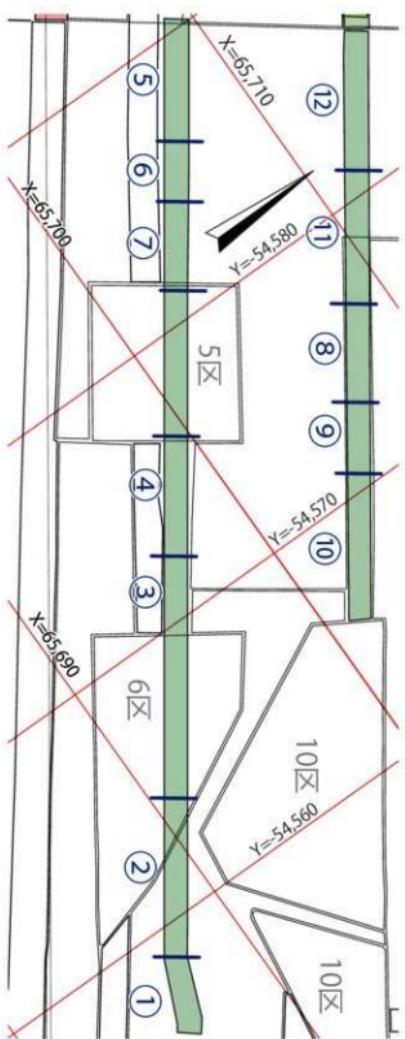


Fig.1 27 区調査地点位置図 (1/200)

### 1) 概要 (Ph.1~12)

27 区は、東工区の南側に位置し、中間杭を設置するための立会調査である。中間杭は、東西方向に 2 列配置され、1.0m 四方に組んだ H 鋼を 2.0m 置きに設置する。調査は中間杭が並ぶ範囲を溝状に行った。幅 1.0m、長さ延長で約 42.5m を測る。ほぼ直線であるが、西側でやや北側に振れる。発掘調査を行った 5 区と 6 区に分断され、大きく 3 つに分かれる。調査は基本的に西側から、長さ約 3.0m スパンで 1 面から 3 面までを行い、次に移った。便宜的にその区間に①～⑫と付け、遺構の位置等を示す (Fig1 参照)。調査後は、埋め戻し、現道に復さなければならず、時間的制約も大きく受けたので、他の立会調査と同様、第 1 面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、第 2 面、第 3 面の調査を繰り返した。調査は、2016 年 1 月 6 日から 2016 年 1 月 9 日に行なった。



Ph.1 ①表土剥ぎ (東から)

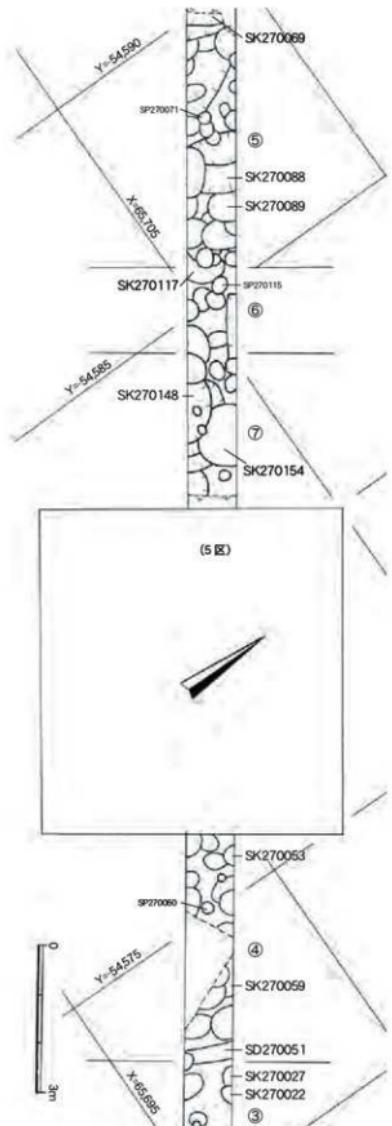


Fig.2 第1面全体図 (1/100)

遺構面は発掘調査を行った他の調査区を参考に設定した。第1面は西側が標高4.0m、東側が3.5m、第2面は西側が標高3.8m、東側が3.3m、第3面の砂丘面は西側が標高3.4m、東側が3.0mと西側から東側にかけて、約50cmと徐々に傾斜する。東側の①②区は埋設管で搅乱されていたが、他は比較的良好な遺存状況であった。

検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑7基、古代の溝1条と土坑15基、11世紀後半~12世紀の土坑13基、各時代のピットである。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、滑石製品、土製品等がコンテナケース9箱分出土する。

## 2) 第1面の調査 (Fig.2 Ph.3-18)

第1面は暗褐色土の上面で検出し、現道路面から約1.0m下で、標高は西側が4.0m、東側が3.5mを測る。遺構は西側、中央の③から⑦区までは良好な状況で遺存する。しかし、東側の①②区は水道管、下水道管、後世の削平(Ph.3)で全く残っていなかった。検出した主な遺構は古代の溝1条、土坑2基、ピット、11世紀後半から12世紀前半の土坑5基、ピット1基である。



Ph.2 ⑤搅乱掘削状況 (西から)



Ph.3 ① -1面（西から）



Ph.4 ③ -1面（東から）



Ph.5 ③ -1面（東から）



Ph.6 ③ -1面（東から）



Ph.7 ④ -1面（西から）



Ph.8 ④ -1面中央攪乱（南から）



Ph.9 ④西 -1面（東から）



Ph.10 ④東 -1面（西から）



Ph.11 ⑤-1面（東から）



Ph.12 ⑤-1面（東から）



Ph.13 ⑤東-1面（南から）



Ph.14 ⑤西-1面（北から）



Ph.15 ⑥-1面（西から）



Ph.16 ⑥-1面（西から）



Ph.17 ⑦西-1面（南から）



Ph.18 ⑦-1面（東から）

### (1) 土坑（SK）

**SK270022 (Fig.2 Ph.4・5)** 調査区中央③に位置する。平面プランは直径 0.4m の円形を呈する。深さは 25cm で、覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 1 は高麗陶器の体部片である。外面は叩き、内面はナデで仕上げるが、当て具痕がかすかに残る。暗褐色の胎土で、色調は灰黒色を呈する。他に須恵器、土師器の小片が出土する。土坑の時期は 9 世紀後半頃と考えられる。

**SK270027 (Fig.2 Ph.4・5)** 調査区中央③に位置し、平面プランは円形で、直径 0.5m を測る。深さは 20cm で、覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物が多く混入する。

出土遺物 (Fig.3) 3 は土師器の环蓋の口縁部片で、端部をわずかに下方へ引き出す。他に土師器小片が出土し、土坑の時期は古代と考えられる。

**SK270053 (Fig.2 Ph.7)** 調査区中央④に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.45m、深さ 35cm を測る。覆土は暗褐色シルトを主体とし、多量の焼土、粘土塊が混入する。

出土遺物 (Fig.3) 5 は須恵質の平瓦で、凸面は大きな格子叩きが残る。6 は土師器の椀で、細く高い高台を付し、内底部には指オサエの痕跡がある。また、その周辺は煤が付着する。他に土師器小片が出土し、土坑の時期は 11 世紀頃と考えられる。

**SK270059 (Fig.2 Ph.10)** 調査区中央④に位置する。平面プランは円形を呈すると考えられるが、大部分を他の遺構に切られる。深さ 40cm を測る。覆土は灰黒色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 4 は管状土錘か。形状は類似するが、下端 0.7~1.2cm ほどは表面が剥離しており、何らかの容器等に付く注口とも考えられる。長さは 6.0cm、幅は 1.45cm である。調整は縱方向の削りを行っており、通常の管状土錘の調整とは異なる。重さは 11.6g を量る。他に遺物はなく、土坑の時期は不明である。

**SK270069 (Fig.2 Ph.14)** 調査区西側⑤に位置する。西側、北側を削平され、南側では検出できていない。深さ 20cm を測り、覆土は黒色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 2 は青白磁の壺の口縁部片で、肩には沈線が巡る。黒色の微砂粒を含む白色の精良な胎土に青緑色を帯びた釉がかかる。高台端部の釉は搔き取る。他に白磁小碗、土師器が出土しており、土坑は 11 世紀後半から 12 世紀前半の時期と考えられる。

**SK270088 (Fig.3 Ph.11-13)** 調査区西側⑤に位置する。平面プランは楕円形を呈すると考えられるが、西側、南側は削平され、北側は車道確保のため確認できなかった。深さ 30cm を測る。覆土は黒色シルトが混入する暗褐色土である。

出土遺物 (Fig.3) 7 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、復元口径 8.6cm、器高 1.1cm を測る。内外面に煤が付着し、灯明皿として使用する。8 は回転糸切り底の土師器の环で、復元口径 13.6cm、器高 3.2cm である。外底部に板状圧痕を有する。9 は白磁碗IV類で、外面にはピンホールがみられる。これらの出土遺物から土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

**SK270089 (Fig.2 Ph.11-13)** 調査区中央⑤に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.6m 以上、短径約 0.7m、深さ 0.4m を測る。覆土は灰黒色シルトが混入する褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.3) 10 は土師器の丸底环で、復元口径 16.0cm、器高 3.5cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。灯明皿として使用され、内外面に煤が付着する。11 は瓦器椀で、内外面横方向の磨きを丁寧に行う。12-14 は白磁である。12 は皿VI-1a 類、13 は皿VII-2a 類、14 は碗II 類である。これらの出土遺物から土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

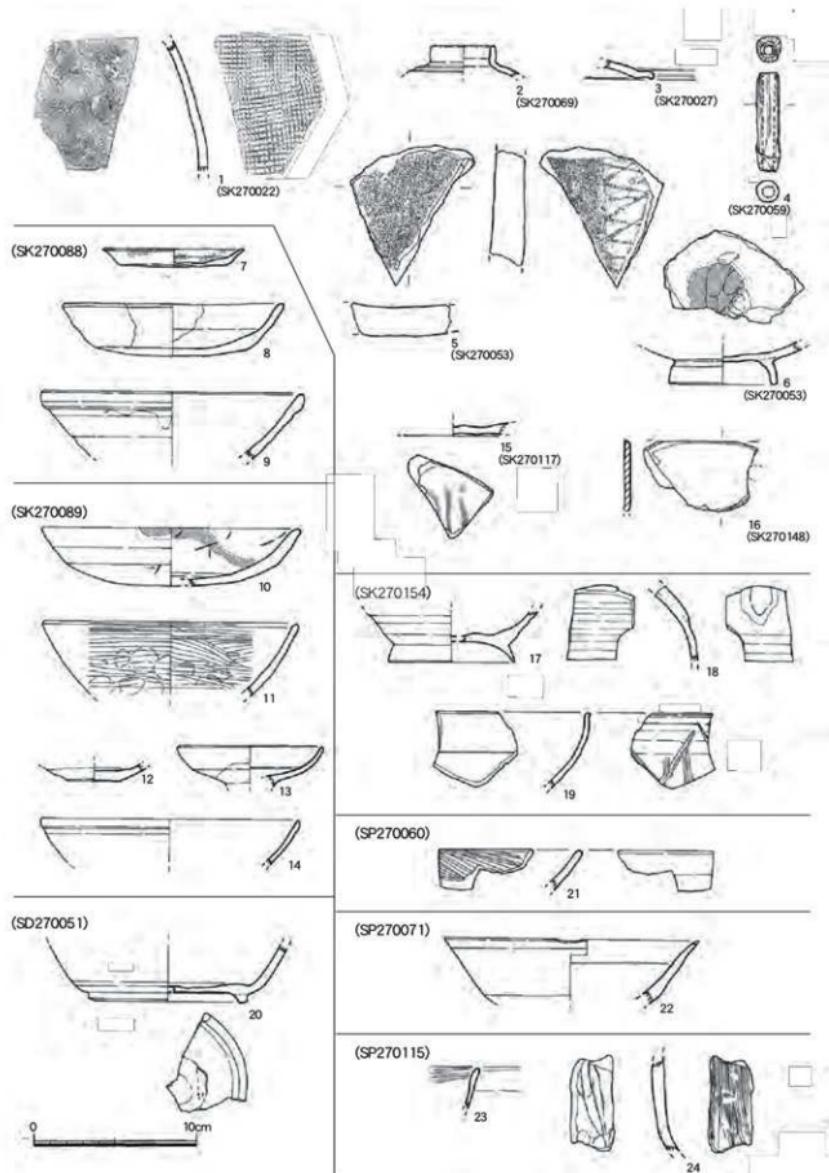


Fig.3 第1面遺構出土遺物実測図 (1/3)

**SK270117 (Fig.2 Ph.15・16)** 調査区西側⑤⑥に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径約0.8m、短径約0.6m、深さ25cmを測る。覆土は暗褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3 Ph.19)** 15は土師器の楕の底部片である。高台が付く可能性もあるが、不明である。底部外面に墨書が残る。他に遺物は確認できず、土坑の時期は古代から中世初頭と考えられる。

**SK270148 (Fig.2 Ph.17・18)** 調査区西側⑦に位置する。平面プランは円形を呈すると考えられる。直径1.7m以上、深さは25cmを測る。覆土は灰褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.3)** 16は頁岩で、石庖丁に形状が類似する。石庖丁であれば、刃部と残り2/3は欠損する。なお、裏面も剥離し、破面のため詳細は不明だが、紐を通すための穿孔の痕跡も窺える。他に高麗陶器、土師器が出土する。

**SK270154(Fig.2 Ph.17・18)** 調査区西側⑦に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径0.8m以上、短径1.3m、深さ35cmを測る。覆土は暗褐色土で、炭化物、焼土が多量に混入する。

**出土遺物 (Fig.3)** 17は土師器の楕で、底部と体部の境に細く高い高台が付く。18は越州窯系青磁の壺の体部片で、把手が付く。19は広東系の白磁碗で、口縁は内湾気味に立ち上がり、端部で外反する。体部外面に蓮弁と櫛目を描き、内面中位に沈線が巡る。白色の胎土に化粧土が施され、黄味を帯びた白色釉がかかる。他に土師器、黒色土器A・B類が出土する。土坑の時期は11世紀後半頃と考えられる。

## (2) 溝 (SD)

**SD270051 (Fig.2 Ph.10)** 調査区中央④に位置する。南北方向に走り、幅0.3m、深さ0.2mを測る。断面は「U」字状を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。他の調査区では確認できなかった。

**出土遺物 (Fig.3)** 20は須恵器の高台付坏で、調整はナデで行う。外底部にかすかに墨痕が残る。他に須恵器、土師器の細片が出土する。溝の時期は8世紀中頃から後半と考えられる。

## (3) ピット (SP)

**SP 出土遺物 (Fig.3)** 21はSP270060(④)出土の黒色土器A類の楕で、内面は斜方向の研磨で調整する。22はSP270071(⑤)出土の白磁小碗で、口縁には輪花を有し、内面中位に沈線を1条巡らす。23・24はSP270115(⑥)出土である。23は土師器の坏の口縁部片で、口縁部内面は磨き、他はナデで調整する。24は土師器の高坏で、外面は縦方向の粗い刷毛目の後、研磨、内面はしぶり痕が残る。

## 3) 第2面の調査 (Fig.4 Ph.20-33)

第2面は砂質を帯びた暗茶褐色砂質土の上面で検出した。遺構面の高さは、西側で、現道路面から約1.2m下の標高約3.4m、東側は現道路面から約1.2m下の標高約3.8mである。遺構の遺存状況は良好で、東側の搅乱も②の水道管、下水道管の削平に留まる(Ph.21)。検出した主な遺構は古墳時代初頭の土坑1基、ピット、古代の土坑8基、ピット、11世紀後半から12世紀前半の土坑5基、ピットである。



15

Ph.19 SK270117 出土遺物

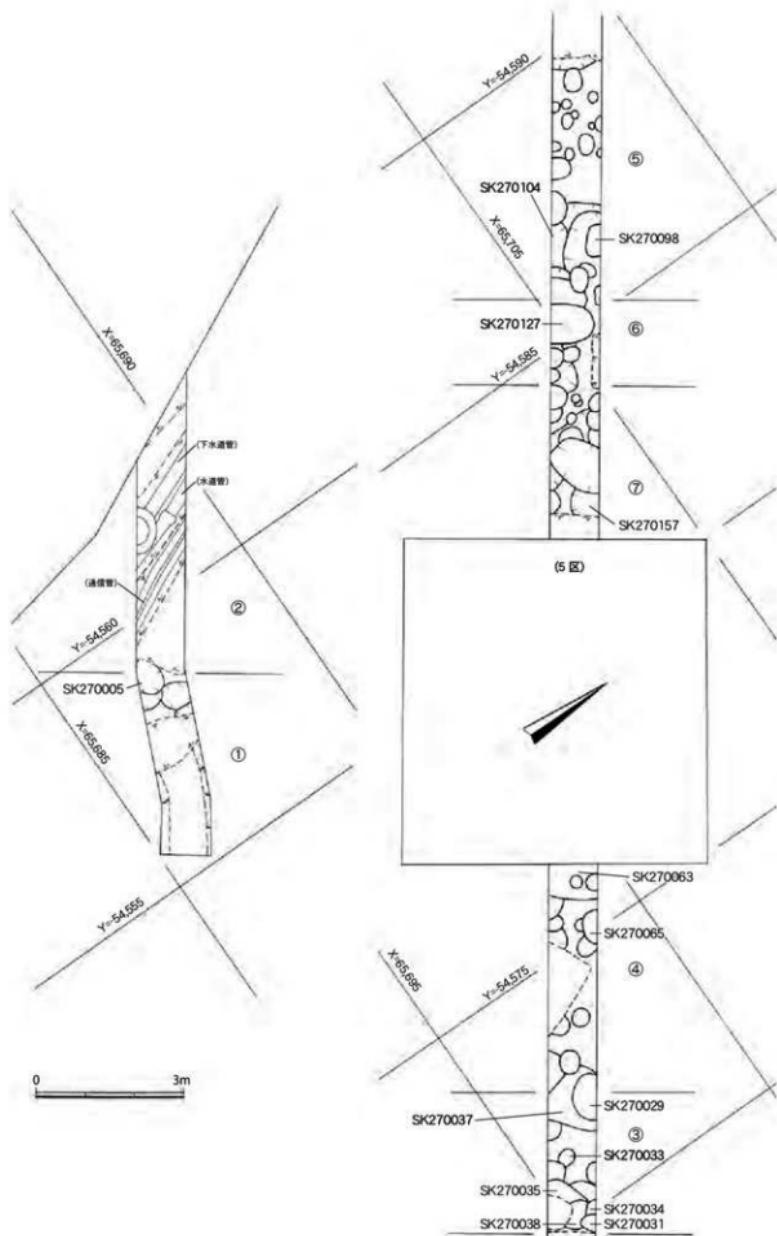


Fig.4 第2面全体図 (1/100)



Ph.20 ①-2面（西から）



Ph.21 ②東-2面（東から）



Ph.22 ②西-2面（南から）



Ph.23 ③-2面（東から）



Ph.24 ③-2面（西から）



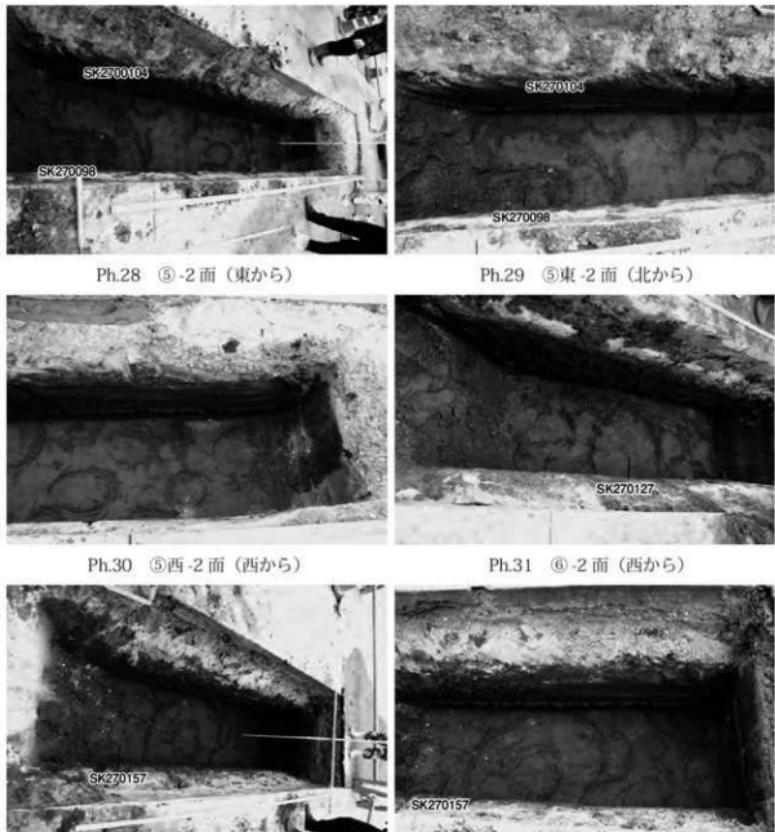
Ph.25 ④-2面（東から）



Ph.26 ④西-2面（南から）



Ph.27 ④東-2面（東から）



#### (1) 土坑 (SK)

**SK270005 (Fig.4 Ph.20)** 調査区東側①②に位置し、南側は水道管で削平される。平面プランは梢円形を呈し、長径 0.7m 以上、短径 0.5m 以上、深さ 10m を測る。覆土は黒褐色土を主体とし、多量の炭化物を含む。

出土遺物(Fig.5) 25は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口縁をわずかに欠損する。口径 9.4cm、器高 1.5cm を測る。外底部周辺はナデを行うが、中央部のやや窪んだ部分にはかすかに布目が残る。3.0mm の白色砂粒を含み、色調は白橙色を呈する。26は白磁碗IV-1a類である。他に回転糸切り底の土師器も出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

**SK270029 (Fig.4 Ph.24・27)** 調査区中央③④に位置し、北側は調査区外へ延び、確認でき

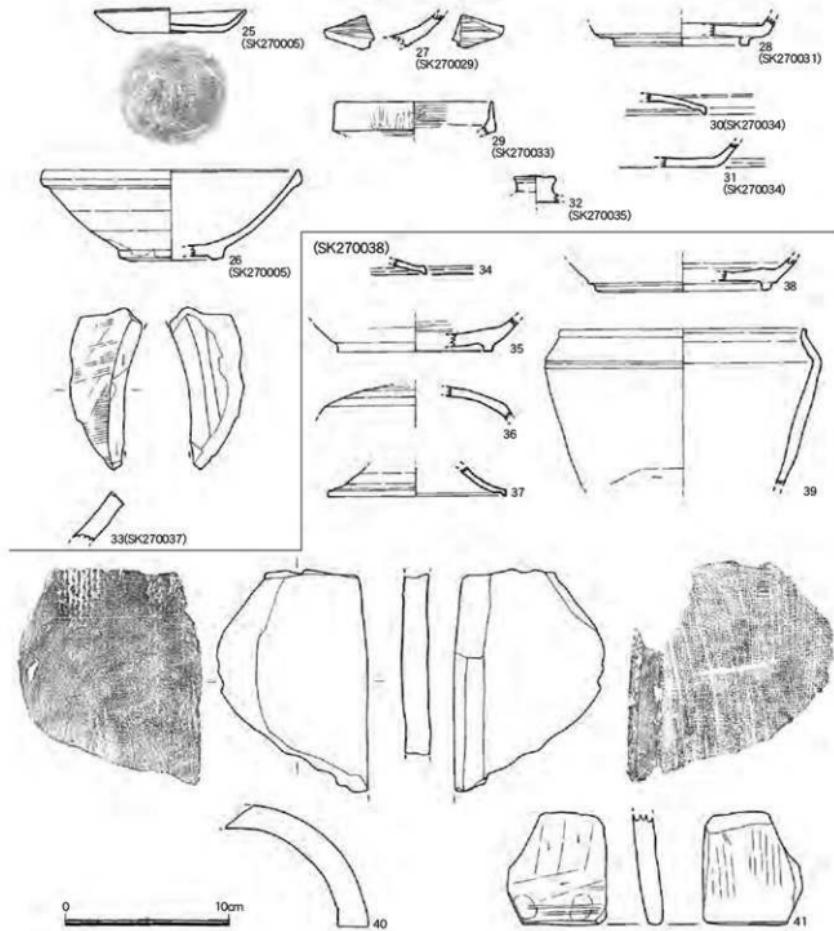


Fig.5 第2面遺構出土遺物実測図① (1/3)

なかった。平面プランは直径約1.0mの円形をし、深さは15cmである。覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 27は都城系の土師器の杯の体部片で、内外面ともに丁寧なナデで調整した後、横方向の暗文を施す。外面下半は笠削りで調整する。他に須恵器片が出土するが、土坑の時期は8世紀後半頃と考えられる。

**SK270031 (Fig.4 Ph.24)** 調査区中央③に位置し、北側は確認できなかった。平面プランは梢円形を呈し、長径25cm以上、短径38cmを測る。深さは10cm、覆土は暗褐色である。

出土遺物 (Fig.5) 28は須恵器の高台付環で、外底部はナデで仕上げる。他に土師器が少量出土し、土坑の時期は8世紀後半から9世紀前半と考えられる。

**SK270033 (Fig.4 Ph.24)** 調査区中央③に位置し、平面プランは楕円形である。長径 48cm、短径 30cm、深さは 15cm を測り、覆土は褐色土を呈する。

出土遺物 (Fig.5) 29 は下層の遺物の混入である。弥生土器の小形の複合口縁壺で、口縁は直立し、外面には縱方向の暗文を施す。内面は横方向の研磨で調整する。胎土に微細な石英、金雲母を含み、色調は暗橙色を呈する。土坑の時期は須恵器、土師器小片が出土することから古代と考えられる。

**SK270034 (Fig.4 Ph.24)** 調査区中央③に位置し、北側は調査区外へ、西側は他の遺構に切られる。深さは 20cm を測り、覆土は褐色土である。

出土遺物 (Fig.5) 30 は土師器の壺蓋で、口縁端部を下方へ折り曲げる。外面は笠削りの後、研磨を施す。廃棄後、火を受けたのか、破面も含め、黒色化する。31 は土師器の壺の底部片で、底部はヘラ削りが残る。胎土は精良で、色調は明橙色を呈する。時期は 8 世紀後半と考えられる。

**SK270035 (Fig.4 Ph.24)** 調査区中央③に位置し、南側、西側は削平される。深さは約 10cm を測る。覆土は褐色土を主体とし、灰褐色土が斑状に混入し、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.5) 32 は土師器の壺蓋のつまみである。上面は研磨を施す。胎土に赤褐色粒、石英を含むが、胎土は精良で、色調は明橙色を呈する。他に精製の土師器が出土することから、土坑の時期は 8 世紀後半と考えられる。

**SK270037 (Fig.4 Ph.24・27)** 調査区中央③④に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺 1.1m 以上、短辺 1.2m を測る。深さは 20cm で、褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 33 は移動式竈の受部の小片である。外面は刷毛目、内面は工具によるナデを施す。他に須恵器、土師器の小片が出土し、土坑の時期は 8 世紀後半頃と考えられる。

**SK270038 (Fig.4 Ph.24)** ③に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 65cm、短径 40cm、深さは 20cm を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、灰色土が混入する。

出土遺物 (Fig.5) 34・35 は土師器である。34 は壺蓋の口縁部片、35 は椀の底部片で、体部下半はヘラ削りが残る。とともに胎土は精良で、明橙色を呈する。36-39 は須恵器である。36 は壺蓋で、天井部はヘラ切りで調整する。37 は高杯の脚部片で、外面は灰を被る。38 は高台付の壺で、底部は回転ナデで整形する。39 は壺で、体部上半で、内傾し、口縁は外反する。屈曲部下は強いナデにより沈線状に窪む。体部下半は笠削りが残る。40 は厚さ 1.8cm を測る土師質の丸瓦で、凸面は繩目叩きを行った後、大半がナデ消される。凹面は布目と紐、側面には切り離した痕跡が残る。41 は移動式竈の基部片で、外面は磨滅され、調整等不明である。土坑の時期は 8 世紀後半と考えられる。

**SK270063 (Fig.4 Ph.26)** 調査区中央④に位置し、東側のラインのみ確認できた。深さは 30cm で、覆土は褐色土を主体とする。底面は、平坦である。

出土遺物 (Fig.6) 42 は土師器の小型の壺で、口縁は体部から直立気味に立ち上がる。外面は縱方向の刷毛目、内面は工具によるナデを行っているが、部分的に磨き状となる。他に庄内式土器の甕、二重口縁壺が出土し、土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

**SK270065 (Fig.4 Ph.26)** 調査区中央④に位置し、北側は確認できなかった。平面プランは円形を呈し、直径約 70cm、深さは 30cm を測る。覆土は黒色土に黄色土、灰色土が混入する。

出土遺物 (Fig.6) 43 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。体部は強いナデにより凸凹状を呈する。44 は白磁碗 II 類である。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

**SK270098 (Fig.4 Ph.28・29)** 調査区西側⑤に位置し、北側は確認できなかった。平面プランは方形を呈し、長径 70cm、短径 30cm 以上、深さ 90cm を測る。覆土は黒色土を主体とし、炭化物を多量に含む。

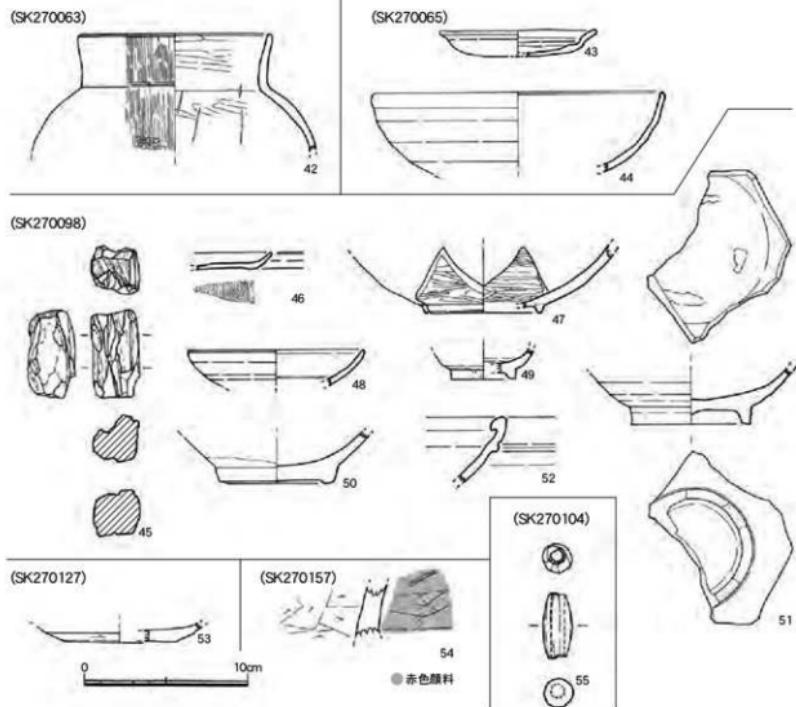


Fig.6 第2面遺構出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物 (Fig.6) 45は滑石製の石錘で、断面が「H」形をなすものである。抉りは上下端が深く、中央部は浅い。欠損箇所が多いが、現状で 67.28g である。46は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。47は和泉型瓦器椀か。断面三角形の低い高台を付し、体部外面は指オサエ、内面はナデで調整する。その後、内外面に疎な暗文を施す。48~50は白磁である。48は皿VI-1b類、49は小碗の底部片、50は碗IV類である。51は越州窯系青磁碗I-2aア類で、内面見込みの目跡は細く、環状に並ぶ。高台にも目跡が残る。52は無釉陶器の鉢の口縁部片で、黒色粒を含む灰色の胎土で、色調は褐色を呈する。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

**SK270104 (Fig.4 Ph.28・29)** 調査区西側⑤に位置する。深さは 20cm を測り、覆土は炭化物、焼土を含む褐色土である。

出土遺物 (Fig.6) 55は管状土錘で、9.67gを量る。須恵器の甕等が出土し、土坑の時期は古代と考えられる。

**SK270127 (Fig.4 Ph.31)** 調査区西側⑥に位置し、南側は確認できなかった。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.9m、短径 0.8m、深さは 35cm 測る。覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.6) 53は底部ヘラ削りの須恵器の坏身である。土坑の時期は中世前期である。

**SK270157 (Fig.4 Ph.32・33)** 調査区西側⑦に位置する。平面プランは楕円形を呈し、深さは 20cm を測る。覆土は褐色土を主体とする。

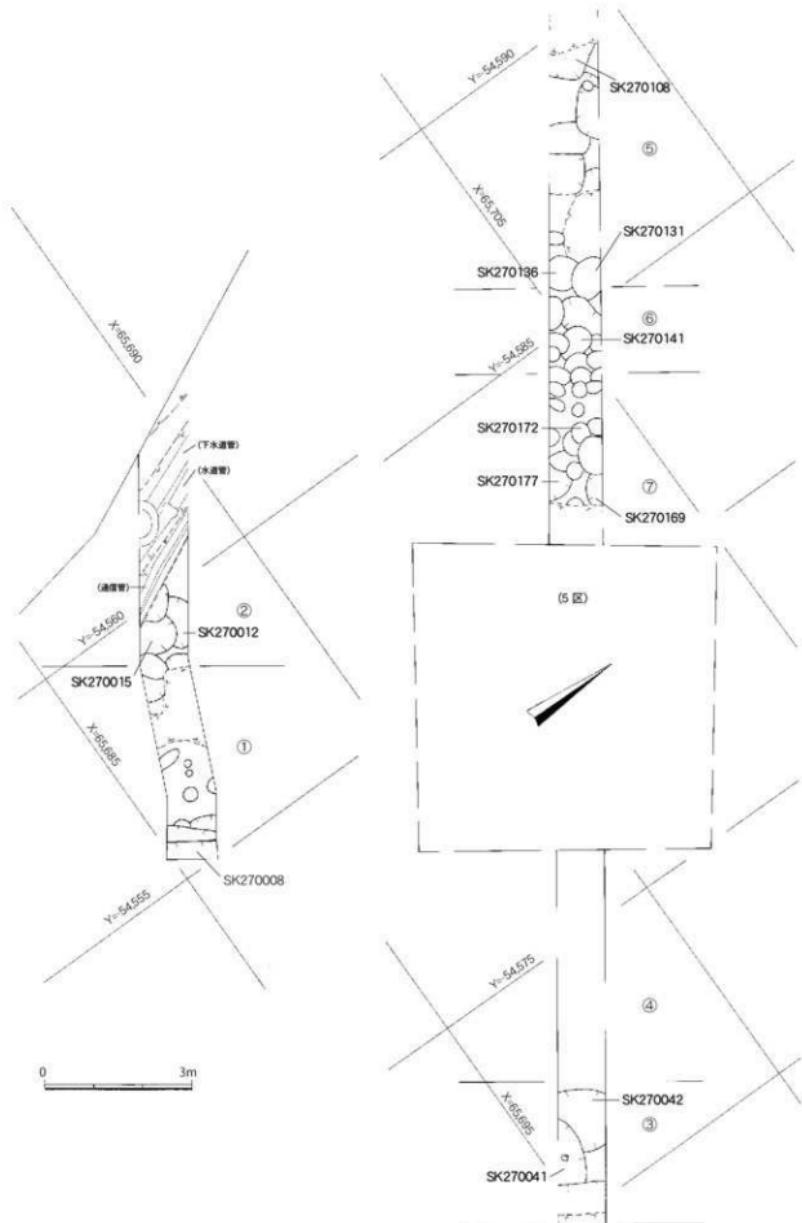


Fig. 7 第3面全体図 (1/100)



Ph.34 ①-3面（東から）



Ph.35 ①西-3面（東から）



Ph.36 ①東-3面（西から）



Ph.37 ②東-3面（南から）



Ph.38 ②西-3面（南から）



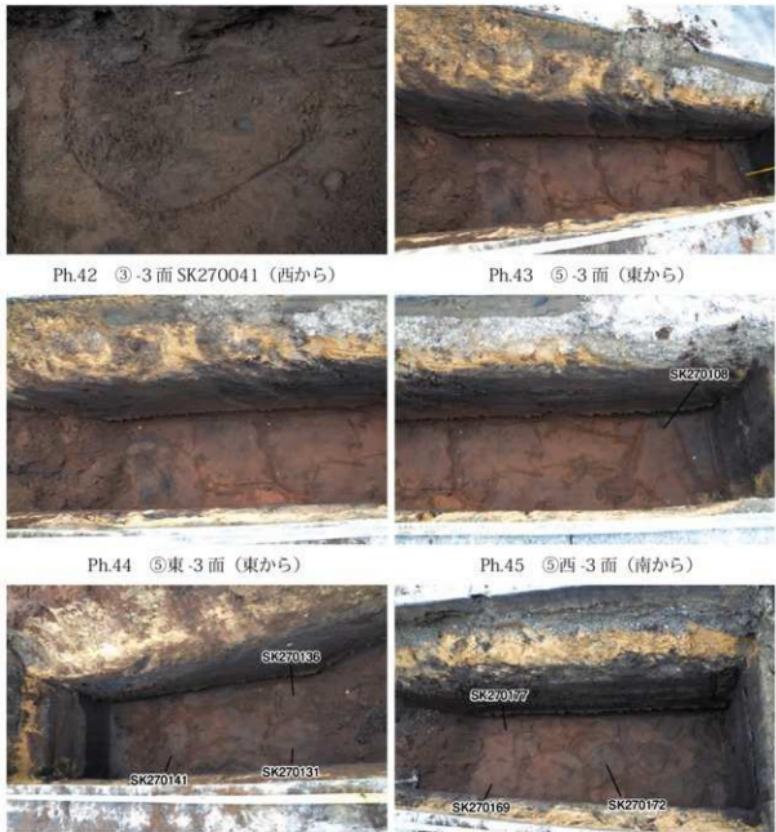
Ph.39 ②西-3面砂丘検出状況（南から）



Ph.40 ③-3面（西から）



Ph.41 ③-3面砂丘検出状況（東から）



出土遺物 (Fig.6) 54は外面に赤色顔料を塗布した円筒埴輪である。土師器が出土しており、土坑の時期は古代である。

#### 4) 第3面の調査 (Fig.7 Ph.34-47)

第3面は黄褐色砂の砂丘面で、標高は西側が現道より 1.6m 下の標高 3.4m、東側が現道より 1.6m 下の 3.0m を測り、西から東へ向かって徐々に傾斜する。遺存状況は②の下水道管、水道管が地山面まで入っており、遺構は削平される (Ph.39)。それ以外は良好な状況である。

検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑 3 基、ピット、古代の土坑 6 基、ピット、11世紀後半から 12 世紀前半の土坑 2 基、ピットである。

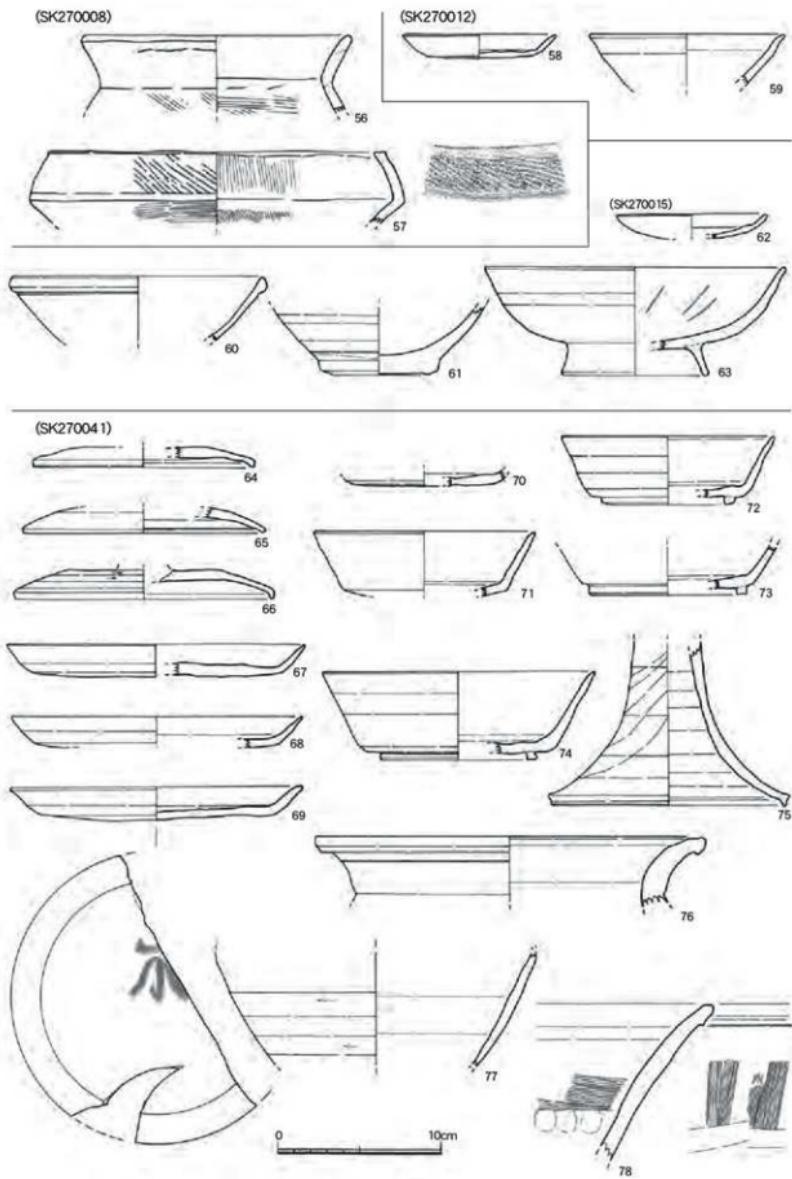


Fig.8 第3面遺構出土遺物実測図① (1/3)

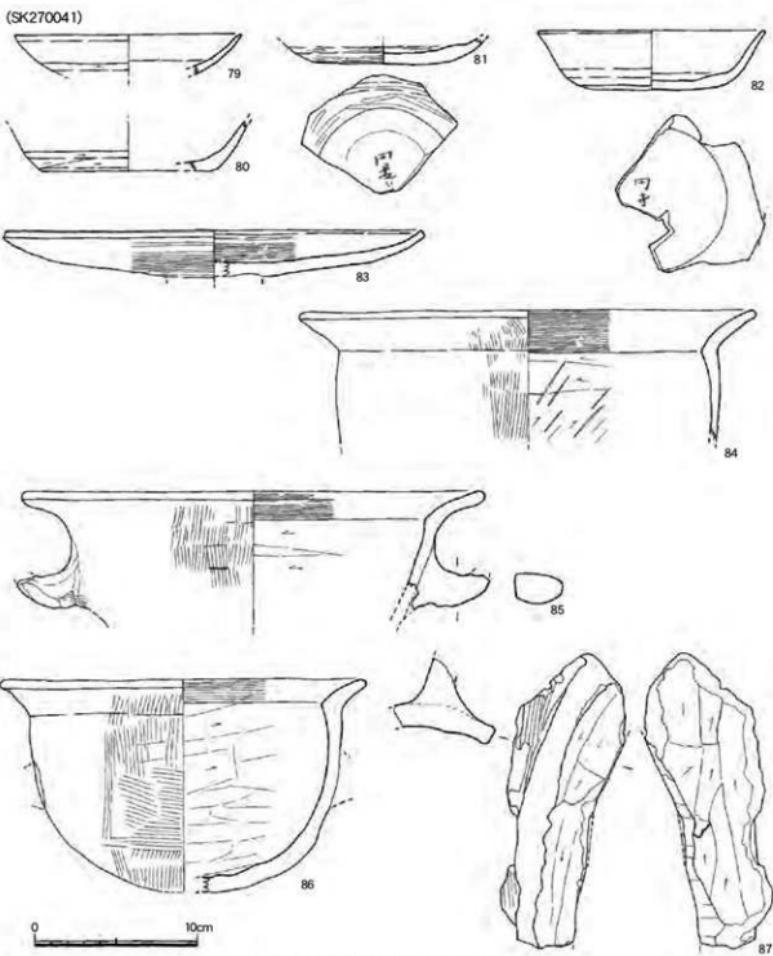


Fig.9 第3面遺構出土遺物実測図② (1/3)

(1) 土坑 (SK)

**SK270008 (Fig.7 Ph.36)** 調査区東側①に位置し、平面プランは方形を呈すると考えられる。深さは20cmを測り、覆土は暗褐色を呈する。

出土遺物 (Fig.8) 56は弥生土器の甌の口縁部片、57は複合口縁甌の口縁部片である。他に布留系の甌が出土し、土坑の時期や弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

**SK270012 (Fig.7 Ph.38)** 調査区東側②に位置する。平面プランは円形を呈し、直径1.1mを測る。深さは40cmで、覆土は黒色土を主体とする。

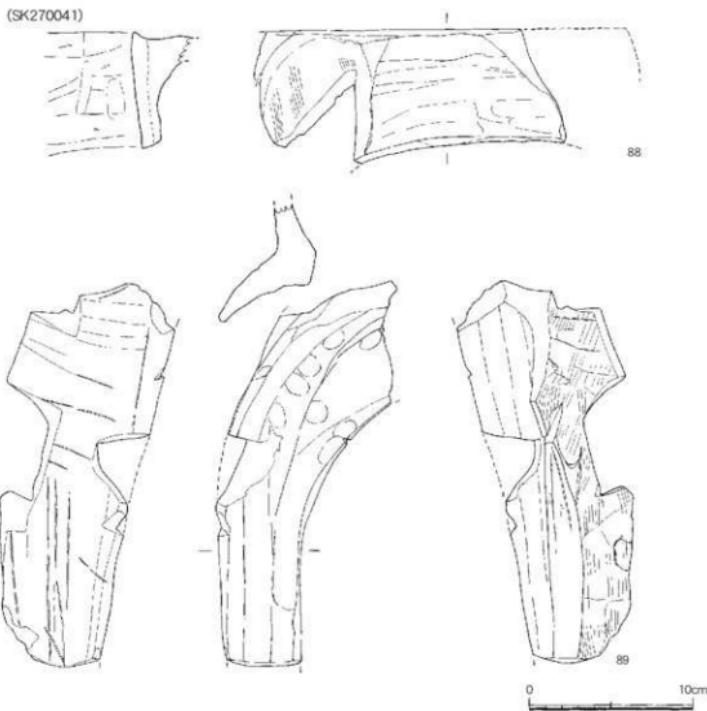


Fig.10 第3面遺構出土遺物実測図③ (1/3)



Ph.48 SK270041 出土遺物

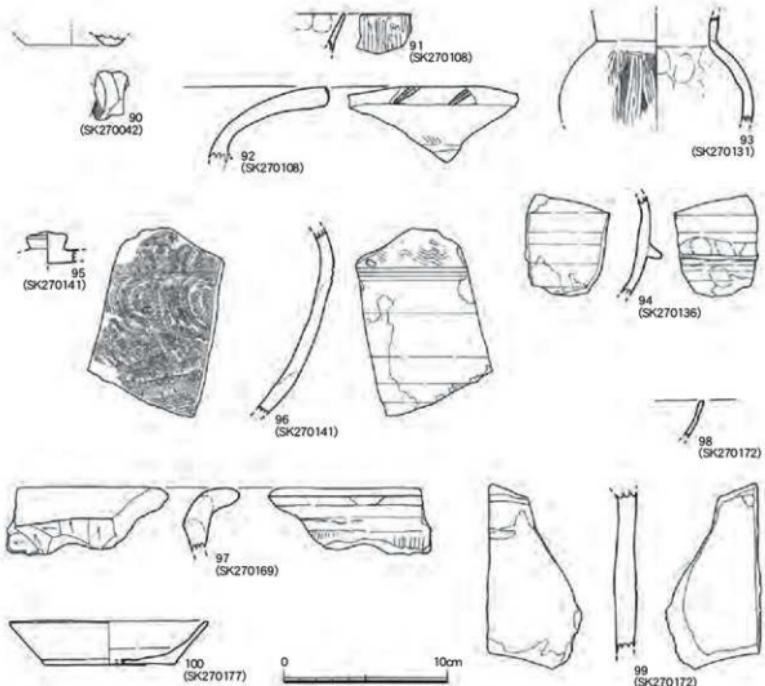


Fig.11 第3面遺構出土遺物実測図④ (1/3)

出土遺物 (Fig.8) 58は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。59は禾目天目で、土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

**SK270015 (Fig.7 Ph.38)** 調査区東側②に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは梢円形を呈し、長径0.8m以上、短径0.8m、深さ40cmである。覆土は黒色土を主体とし、炭化物、褐色土を含む。

出土遺物 (Fig.8) 60・61は白磁碗IV類である。62は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、底部周縁にナデを施す。63は土師器の椀で、細く高い高台を付す。内面には工具痕が残る。他に白磁碗V類が出土する。回転ヘラ切り底の土師器しか出土しないことから土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK270041 (Fig.7 Ph.40)** 調査区中央③に位置し、南側は調査区外へ延び、東側は他の遺構に切られる。平面プランは直径1.3m以上を測る円形を呈し、深さは40cmである。覆土は暗褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.8-10 Ph.48) 64-78は須恵器である。64-66は環蓋で、口縁を下方へ折り曲げて仕上げる。天井部は64・66がヘラ削り、65はヘラ切り未調整である。67-69は皿で、底部はヘラ切り未調整で、69の外底部には墨書が残る「木カ」。70・71は坏で、70の内面は滑らかとなっており、硯等に転用した可能性も考えられるが、墨痕等は残っていない。72-74は高台付坏で、外底部は回転ナデで調整する。75は高坏の脚部で、内外面にしづりの痕跡が残る。赤焼土器で、焼成は良好だが、

明褐色を呈する。76は甕の口縁部、77は壺の体部片で、体部外面下半は回転ヘラ削りを行う。78は大甕の口縁部片で、内外面刷毛目で調整する。79-86は土師器である。79-82は壺で、79・80の体部外面下半はヘラ削りを行う。81・82の底部はヘラ切りの後、81はナデを行うが、82は未調整である。ともに「田寺□」の墨書きを有する。83は高环の环部で、浅い皿状を呈し、底部はヘラ削り、内面は磨きで調整する。84-86は小型の甕で、86の底内面には焦げが付着する。84は小片のため不明だが、85・86は把手を有する。87-89は移動式竈の小片である。88に煤の付着は見られないが、87・89は多量の煤が付着する。これらの出土遺物から土坑の時期は8世紀中頃から後半と考えられる。

**SK270042 (Fig.7 Ph.40)** 調査区中央③に位置し、SK270041に切られる。平面プランは楕円形を呈し、深さは15cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.11 Ph.49) 90は精製の土師器であるが、小片のため、器種は不明である。研磨調整が施される。他に精製土師器の蓋片等があり、土坑の時期は古代と考えられる。

**SK270108 (Fig.7 Ph.45)** 調査区西側⑤に位置し、南側は調査区外へ延び、西側は他の遺構に切られる。一辺0.8m以上、深さは25cm、壁はほぼ垂直である。覆土は褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.11) 91は土師器の小型丸底壺の口縁部片で、内面は指オサエ、外面は縦方向の疎な研磨が残る。92は弥生土器の広口壺の口縁部片で、頸部に突帯を巡らせ、口縁端部に刻目を入れる。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

**SK270131 (Fig.7 Ph.46)** 調査区西側⑤⑥に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径0.9m、短形0.7m、深さは約45cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.11) 93は畿内系の小型壺である。体部外面は刷毛目調整ののち、縦方向の磨きを行なう。他に弥生土器の高环等が出土し、土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭である。

**SK270136 (Fig.7 Ph.46)** 調査区西側⑤に位置し、北側はSK270131に切られ、南側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径0.7m以上、短形0.6m、深さ40cmを測る。覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.11) 94は施釉陶器の体部片で、最大胴部に長い突帯を1条巡らす。緑濁色の釉はそれより上半にかかり、下半に一部、垂れる。

**SK270141 (Fig.7 Ph.46)** 調査区西側⑥に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径0.75m、短形0.6mを測る。深さは約20cmで、覆土は暗褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.11) 95は須恵器の环蓋で、宝珠形の摘みを有する。96は須恵器の壺の体部片で、最大胴部に2条の沈線、その上に波状文を巡らせる。外面はナデ、内面には同心円文の当て具痕が残る。外面には自然釉がかかる。土坑の時期は古代である。

**SK270169 (Fig.7 Ph.47)** 調査区西側⑦に位置し、北側、東側は攪乱を受ける。深さは50cm以上で、覆土は暗褐色シルトを主体とし、炭化物を少量含む。

出土遺物 (Fig.11) 97は土師器の甕で、口縁部内面か頸部外面にかけて、多量の煤が付着する。土坑の時期は8世紀頃と考えられる。

**SK270172 (Fig.7 Ph.47)** 調査区西側⑦に位置し、東側を他の遺構に切られる。平面プランは円形で、直径35-40cmである。深さは約20cmを測る。覆土は暗褐色土である。

出土遺物 (Fig.11 Ph.49) 98は土師器の椀の口縁部片、99は須恵器の転用硯である。須恵器の高台付の底部を用いたと思われ、外底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。硯にはこの外底面を使用しており、器面は滑らかとなる。また、黒ずんだ箇所がみられるため、墨痕と考えられる。他に土師器の高台付椀の小片が出土し、土坑の時期は古代と考えられる。

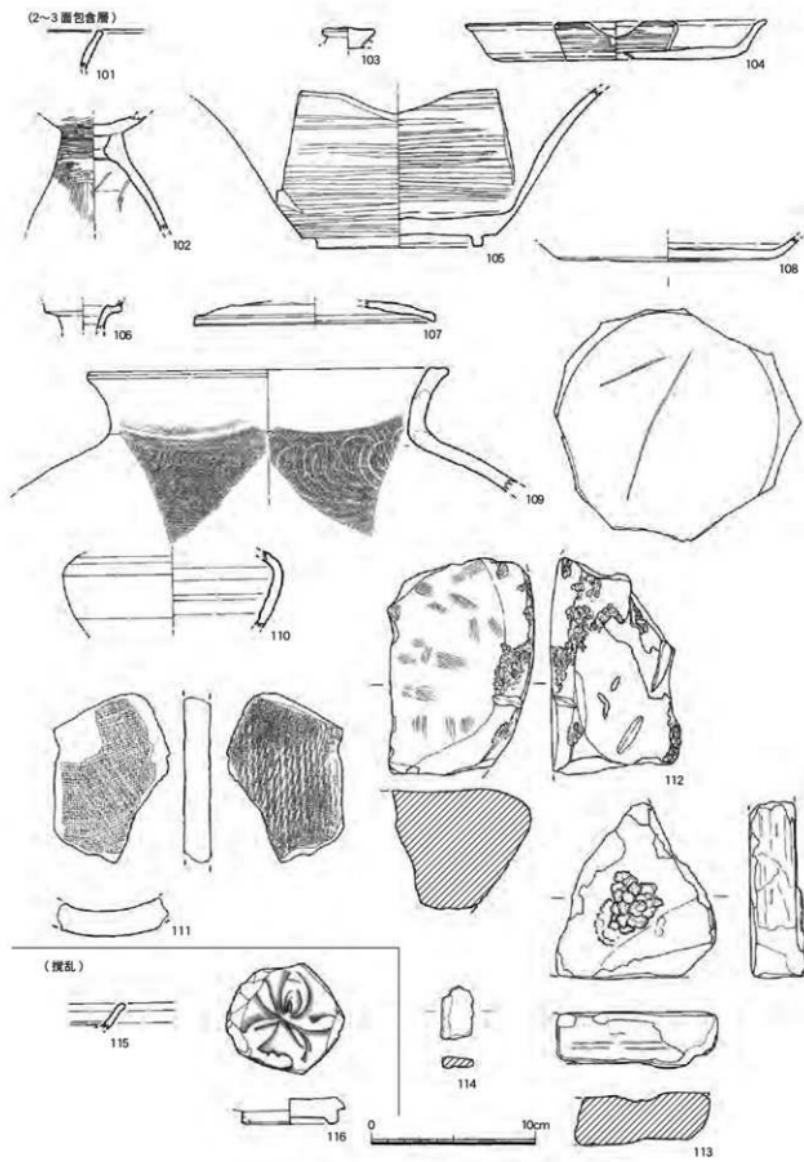


Fig.12 第2~3面包含層・攪乱出土遺物実測図（1/3）

**SK270177 (Fig.7 Ph.47)** 調査区西側⑦に位置し、南側は調査区外へ延び、西側は他の遺構に切られる。平面は円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.11) 100は回転ヘラ切り底の土師器の坏で、土坑は8世紀中頃と考えられる。

### 5) その他の出土遺物 (Fig.12 Ph.49)

101-114は2-3面の包含層出土遺物である。101-105は土師器である。101は布留系壺の口縁部片で、外間に多量の煤が付着する。102は東海系の高杯か。103は扁平な摘み、104の外底部はヘラ切り、体部内外面は研磨で調整する。105は精製の大型の坏で、内外面ともに横方向の磨きを行う。106-109は須恵器である。106は小型の壺の口縁部片、107は天井部ヘラ切りの坏蓋、108は坏で、外底部に籠記号を有する。109は大甕で、体部外面は平行叩き、内面には同心円状の當て具痕が残る。110は美濃焼の体部片で、肩部上面に四状の段を有する。胎土は白色、橙色の微砂粒を多く含み、体部外面に緑色の自然釉がかかる。111は須恵質の平瓦片で、凸面は繩目叩きの後、部分的にナデを行い、凹面は細かい布目が残る。112は粒子の粗い砂岩製の台石で、上面が砥石として利用される。砥面は滑らかで、やや窪む。現状の重さは1050.67gである。113は砂岩製の台石で、上面と2側面が遺存する。欠損するが、この形で使用されていたのか、上面中央部に敲打痕が残り、四状に窪む。また側面は砥石として使用され、溝状の擦痕が残る。重さは現状で、425.16gを量る。114は方形状の鉄片で、厚さは約3.0mmである。115-116は撓乱からの出土で、115は畿内系の縦軸陶器、116は龍泉窯系青磁碗の底部を用いた瓦玉である。重さは95.9gを量る。

### 6) 小結

27区は203次調査区の砂丘頂部から東側の緩斜面に立地する。砂丘面では、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落が展開し、古墳時代中後期にやや衰退するが、古代には青銅埴輪の出土とともに遺構が増加する。その後、11世紀後半から12世紀にかけて、博多の繁栄とともに当調査区も遺構が調査区全面に拡がる。概ね他の調査区と同様の様相を呈するが、古代の遺構が目立つ。特に8世紀中頃から後半にかけては遺構の数も増加し、遺物量も増える。SK270041からは墨書き土器が3点出土しており、須恵器の皿の外底部に「木カ」、土師器の坏の外底部中央に「田寺□」と残る。「田寺□」については27区から2点出土するが、6区でも同様のものが出土し、他にも破片に田と書かれている可能性が高いものが出土している。また、同遺構からは、硯に転用した可能性がある土師器の坏も出土する。他に、SK270172からも須恵器の高台付の底部を用いた転用硯が出土しており、官衙との深い関わりがうかがえる。



Ph.49 2-3面包含層出土遺物

## 29. 28 区の調査

### 1) 立会の概要



Ph.1 ⑧区1面 (GL100 東から)

対象地は、東工区の東西方向の中央部、道路覆口板を受ける梁の中間杭施工工事に先立つ埋設管調査の掘削に立ち会った。幅1m長さ22.3mにわたって深さ GL1.0・1.2・1.4～1.5mの1～3面に渡って実施している。前年度実施分を①～⑦区として、当該区は⑧～⑯の小区に分割し、2016年5月19日～6月4日の延べ3日間に渡って実施した(Fig.1)。面積は22.3m<sup>2</sup>である。

### 2) 中世の報告

#### 第1面 (Fig.2 Ph.1・4・7・

10・13) では、⑧区で11世紀後半～12世紀前半の土坑SK280182・280189の2基・柱穴2基、⑨区で11世紀後半～12世紀前半の土坑SK280210の1基、⑩区で12世紀後半の土坑SK280217・280220・280221の3基・柱穴1基、11世紀後半～12世紀前半の土坑SK280218・280224の2基、溝SD280222の1条・柱穴1基、⑪区で11世紀後半～12世紀前半の柱穴1基を検出した。第2面 (Fig.3 Ph.2・5・8・11・14) では⑧区で11世紀後半～12世紀前半の土坑SK280190・280195・280196・280197・280198の5基、⑩区で12世紀後半の土坑SK280226・280227・280228の3基、井戸SE280229の1基、⑫区で11世紀後半～12世紀前半の溝SD280235の1条、12世紀後半の土坑SK280236の1基を検出した。

出土遺物 (Fig.5) 1から3はSK280217出土。1・2は同安窯系青磁碗。1は口径15.8cm高6.2cmを測る。外面高台内から口縁下まで回転ヘラケズリを施し外面に細かな縦櫛歯文、内面に片切形と櫛描で花文を施す。灰オーリーブ色の透明釉を内面から外面高台脇まで掛ける。2は口径14.6cmを測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し外面に細かな縦櫛歯文、内面に片切形と櫛描で花文を施す。灰オーリーブ色の透明釉を内外面に掛ける。3は塊形滓小片で、上面は小気泡が多い部分と平滑な部分があり鍛造片が熔着する。下面是土砂が付着する。

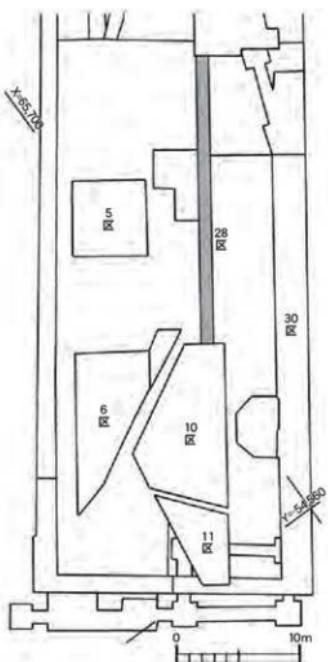


Fig.1 28区調査区位置図 (1/400)



## Ph.2 ⑧区2面(GL120 東から)

現存で  $3.8 \times 2.3 \times 2.3$  cm を測る。

4～9はSK280210出土。4は玉縁の白磁碗。口径14.4cmを測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、内面見込みが段を成す。灰白色の半濁釉を内外面に掛ける。5は磁灶窯系陶器の蓋。口径11.3器高2.8cmを測る。天井部は糸切りで摘みを施す。内外面は回転ナデを施し、内面に薄い化粧土を掛ける。内面は純い黄橙色外面は褐灰色を呈する。6～8は土師器。6は口径15.6器高3.3cmを測る壺。口縁が強く開き内外面に回転ナデ、外底は糸切りで板

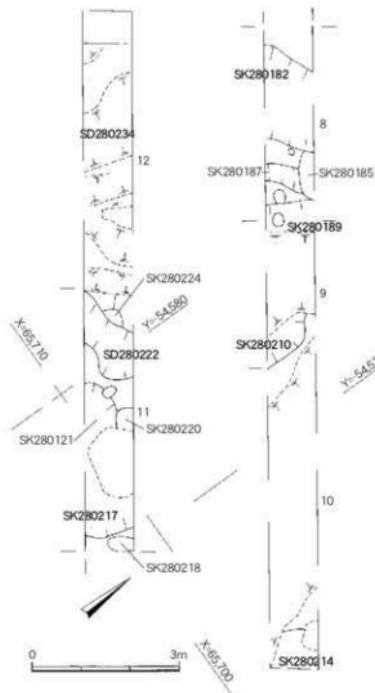


Fig.2 第1面全体図 (1/100)

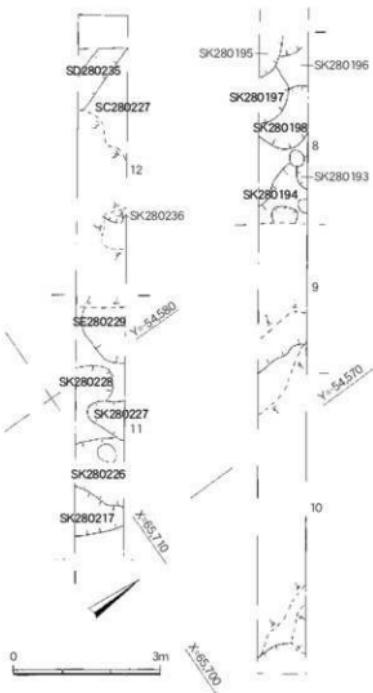


Fig.3 第2面全体図 (1/100)



Ph.3 ⑧区3面(GL145 東から)

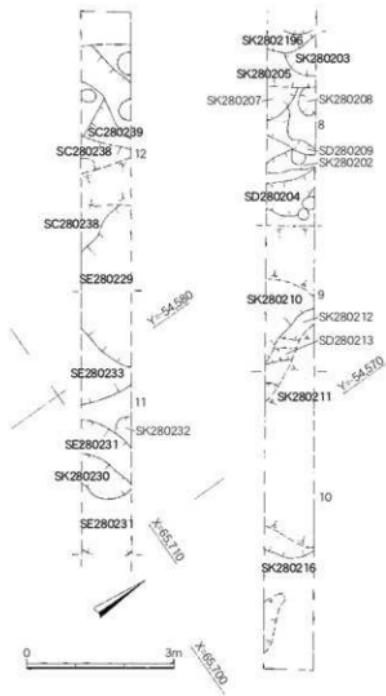


Fig.4 第3面全体図(1/100)

压痕が残る。内底はタテに強くナデる。内外面は浅黄橙色を呈する。7・8は皿。7は口径 10.2 器高 1.2cm を測る。口縁が強く開き内外面に回転ナデ、外底は糸切りで板圧痕が残る。内底はタテにナデる。内外面は黄灰色を呈する。8は口径 10.0 器高 1.0 cm を測る。口縁が強く開き中位で稜を成す。内外面に回転ナデ、外底は糸切りである。内外面は黄橙色を呈する。9是有溝土鉢。全面ナデで整形し、 $6.6 \times 4.4 \times 4.1$  cm 86g を測る。10はSD280222 出土の軒丸瓦。径 14.1cm を測る。全体的に凹凸は低く、細い周縁より内区が突出する。単弁蓮華文で、車輪状で4段の中房内に10の花弁と14の珠文、外側に10の珠文を巡らし、10弁の花弁と間弁を配置する。胎土は白色粒を多く含み、外面は橙色内面は鈍い橙色を呈する。11は表土か

低く、細い周縁より内区が突出する。単弁蓮華文で、車輪状で4段の中房内に10の花弁と14の珠文、外側に10の珠文を巡らし、10弁の花弁と間弁を配置する。胎土は白色粒を多く含み、外面は橙色内面は鈍い橙色を呈する。11は表土か



Ph.4 ⑨区1面(GL110 東から)



Ph.5 ⑨区2面(GL120 東から)

ら採集した場。幅10.9厚3.3cmを測り、3側面に型枠痕と径4～5mmの籠状の圧痕が残る。画面にケズリ様のタテナデを施す。内外面は暗青灰色を呈する。12は2面検出時出土のガラス丸玉の小片。径14mm程で中央に径2mmの貫通しない孔がある。透明な水色を呈する。13はSK280182出土の鉄釘。全長46mm頭部を折り曲げ11×9mmの方形に広げ体部は5.5mm角の方形を呈する。

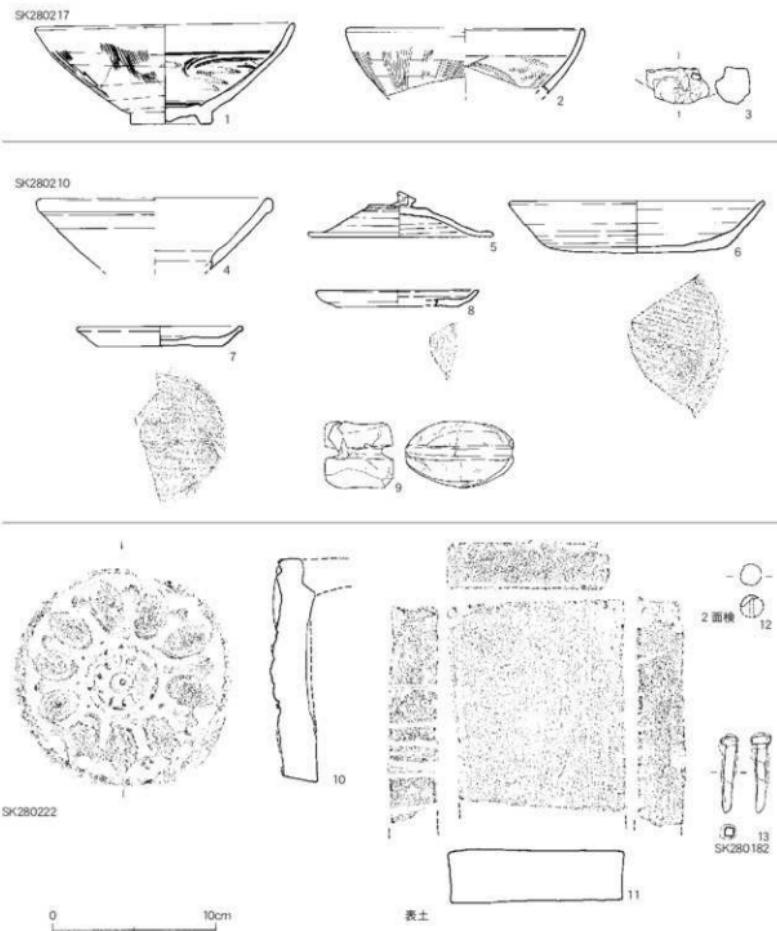


Fig.5 28区中世出土遺物実測図(1/3)



Ph.6 ⑨区 3面 (GL140 東から)



Ph.7 ⑩区 1面 (GL110 西から)



Ph.8 ⑩区 2面 (GL120 西から)



Ph.9 ⑩区 3面 (GL145 西から)

### 3) 古代の報告

第 1 面 (Fig.2 Ph.1・4・7・10・13) では、⑧区で 8 世紀代の土坑 SK280185・280187 の 2 基、柱穴 1 基、第 2 面 (Fig.3 Ph.2・5・8・11・14) では⑩区で 8 世紀代の土坑 SK280193・280194 の 2 基、柱穴 2 基を検出した。

出土遺物 (Fig6) 14・15 は SK280187 出土。14 は須恵器高台壇。口径 14.0 器高 5.0 cm を測る。高台は際から若干内側にある。高台～内面まで回転ヘラナデを施し外底は回転ヘラケズリ、内底にタテナデを施す。内外面は青灰～灰色を呈する。15 は角錐状の手持ち砥石で 44 × 27 × 25 mm 39.6 g を測る。淡灰褐色の中粒砂岩製で、5 面を砥面に用いる。

16・17 は SP280194 出土。16 は須恵器壺蓋で口径 16.8 cm を測る。返しはなだらかで、内外面に回転ナデを施す。内外面は灰白色を呈する。17 は脚状の土製品で、径 8.4 cm を測る。上面に幅 1.8 ~ 3.5 cm の台形の剥離痕がある。調整は指頭圧と不定方向のナデで、内面は褐灰色外面は灰褐色を呈する。18 は表土検出の防長系縄釉高台皿で、高台径 6.0

cmを測る。高台内は回転回転ヘラケズリで全面に薄い緑色の透明釉を掛ける。胎土は精良で灰白色を呈する。19は8区出土372と同様の関東系の須恵器環。赤焼で、外底は緩い丸底で体部との境は棱を成し、体部が直線的に開き中位が凹線状に窪む。内面～外面中位までは回転ナデ、外面下位は回転ケズリを施し、内面には緩いケンマを施す。胎土は白色粒・雲母を若干含み、内面は橙色外面は鈍い橙色を呈する。



Ph.10 ⑩区 1面 (GL100 西から)

4) 弥生終末～古墳時代の報告  
第1面 (Fig.2 Ph.1・4・7・10・13) では、⑧区で終末期の柱穴 1基、⑩区で終末期の土坑 SK280214 の 1基、第2面 (Fig.3 Ph.2・5・8・11・14) では⑩区で終末期の柱穴 1基を検出し、⑫区で SC280237 を 1基、第3面 (Fig.4 Ph.3・6・9・12・15) では⑧区で終末期の土坑 SK280202・280208 の 2基、溝 SD280204・280209 の 2条、柱穴 2基、前期柱穴 1基、⑨区で終末期の土坑 SK280211 の 1基、⑩区で



Ph.11 ⑩区 2面 (GL120 西から)



Ph.12 ⑩区 3面 (GL150 西から)

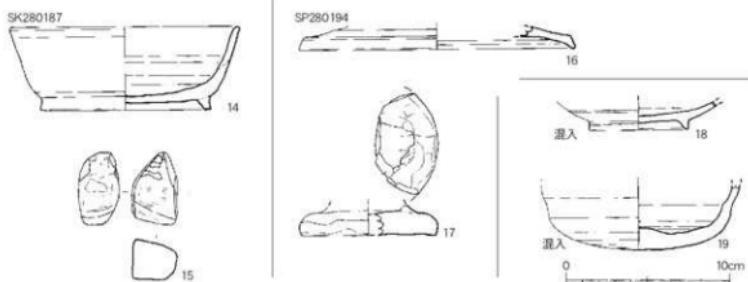


Fig.6 古代出土遺物実測図 (1/3)



Ph.13 ⑫区1面 (GL100 東から)



Ph.14 ⑫区2面 (GL120 東から)



Ph.15 ⑫区3面 (GL150 東から)

後期の土坑 SK280216 の 1 基、⑫区で終末期の柱穴 2 基、前期の竪穴住居 SC280238・280239 の 2 基、柱穴 1 基を検出した。

出土遺物 (Fig7) 20 は円筒埴輪片。外面はタテハケ後タガ部をヨコナデ、内面は左上がりのナナメハケを施す。胎土は白色粒を多く含み、内面は褐灰色外面は鈍い橙色を呈する。21～23 は SC280238 出土。21 は口径 15.4cm を測る脚环鉢の口縁部で内外面ヨコナデ後外面口縁と体部にタテジグザグの暗文、口縁内面にナナメジグザグの暗文を施す。体部内面はタテヨコのケンマ。22 は低脚環の脚部。外面にタテケンマ、内面に蜘蛛の巣状のヨコハケを施す。23 はレンズ底の名残を残す甕。外面に縦位のタタキ後緩いナデ、内面はタテナナメケズリ。24 は⑪区包含層 1 層出土の有茎鉄鏃。全長 52mm 刃部長 31mm を測る。25 は⑪区包含層 2 層出土の鐵鏃中茎。26 は玄武岩円礫を用いた石杵。5 面を使用し鏡面研磨痕が残る。3.1 × 3.4 × 3.3cm を測る。27・28 は SC280237 出土の甕。27 は口径 20.0cm を測る。口縁外面はナナメタタキ後ヨコナデ内面はヨコハケ、胴部外面はナナメハケ内面はナナメハケ後ヨコナデを施す。28 は口径 21.2cm を測る。外面はタテハケ内面口頭部はナナメハケ、以下にタテハケを施す。29 は SP280242 出土の鉄刀子片。現況で 3.6 × 1.0cm 厚 3mm を測る。



Ph.16 ⑩区 SK280222 出土軒丸瓦 10

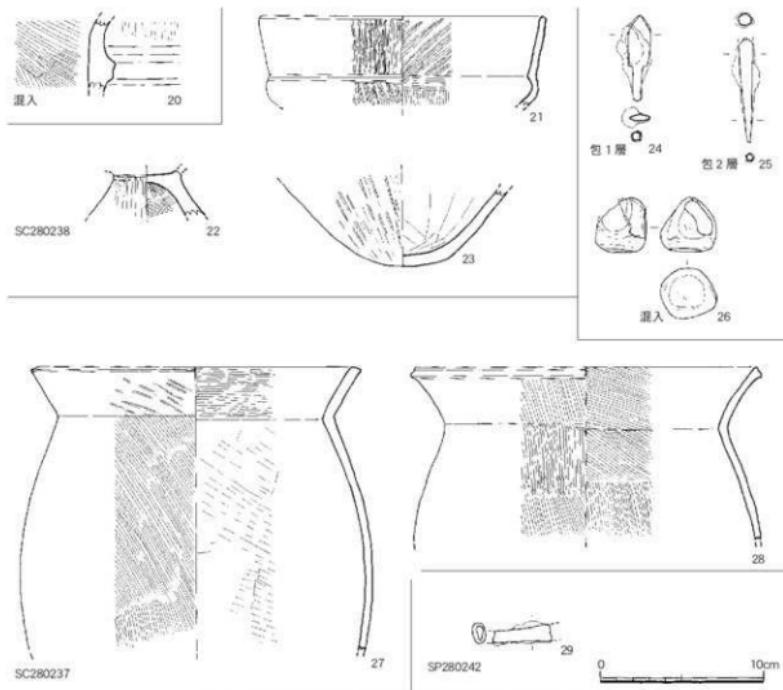
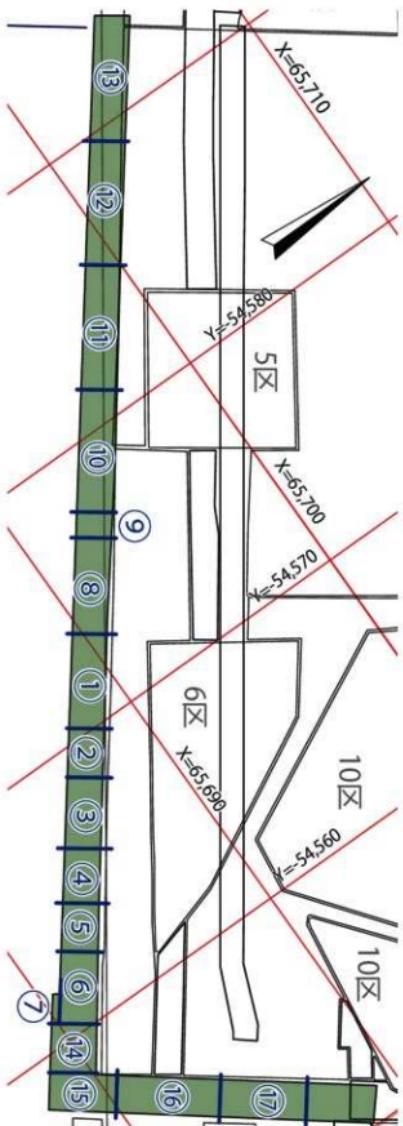


Fig.7 弥生時代終末～古墳時代出土遺物実測図 (1/3)



### 30. 29区の調査

#### 1) 概要 (Ph.1~12)

29区は、東工区にガイドウォール(GW)を設置するための立会調査である。調査地点は2015年度に行った南側と東側の南半分で、残りの北側と東側北半分は30区とし、2016年度に調査を行った。調査区は幅1.5mの溝状で、長さは南側が44.8m、東側は9.0mを測る。調査後は当日中に覆工板を設置しなければならず、他の立会調査同様、地山までの確認調査が終わり、工事が完成できる範囲で掘削を行った。地下埋設や工程の都合で、開ける場所と範囲を決定した。便宜的にその区间に①～⑯と付け、遺構の位置等を示す(Fig1参照)。調査区は基本的に直線であるが、構造物の関係で、⑥⑦区で南側に張り出し、⑬⑭区では東側、西側に張り出す。なお、調査区は道路の端に位置しているため、埋設管が多く、⑪～⑯は旧通信管(Ph.7~9)、⑭



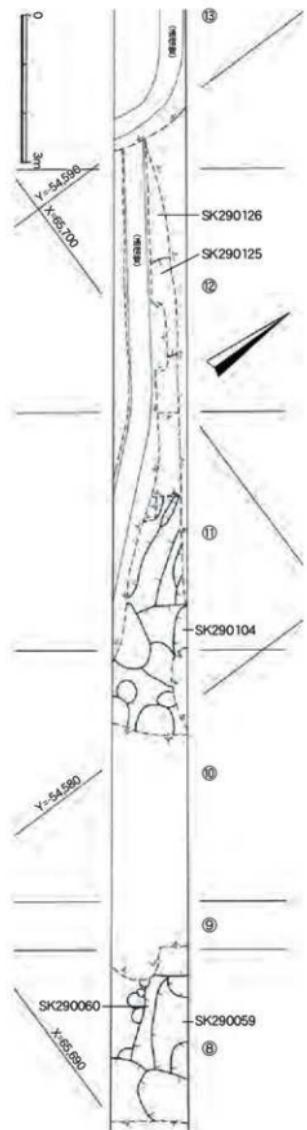


Fig.2 第1面全体図① (1/100)

- ⑯は通信管 (Ph.10・13)、水道管、下水管 (Ph.10-13)、⑯は電力管 (Ph.14)、①②④～⑥⑨⑩は後世の擾乱 (Ph.3・6) で削平されていた。それ以外は第1面から良好な状況で遺構は遺存する。

立会調査は、第1面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第2面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採取した後、第2面、第3面の調査を繰り返した。調査は、2015年11月27日から2015年12月21日までである。遺構面は発掘調査を行った他の調査区を参考に設定した。

検出した主な遺構は弥生時代後期後半の土坑1基、終末から古墳時代前期の土坑3基、古代の土坑9基、11世紀後半から12世紀前半の土坑20基、12世紀中頃の土坑1基、他にピットである。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、滑石製品、ガラス坩堝がコンテナケース9箱分出土する。

## 2) 第1面の調査 (Fig.2・3 Ph.2-17)

第1面は暗褐色土を主体とする層の上面で検出し、西側が現道路面から約1.0m下で、標高は4.3m、東側が約0.8m下で、標高3.5mを測る。埋設管が多く、⑪⑫の南側と⑬は通信管 (Ph.7~9)、⑭⑮は通信管 (Ph.10・13)、水道管、下水管 (Ph.11-13)、⑯は電力管 (Ph.14) が入り、④～⑥⑨⑩は後世の擾乱 (Ph.3・6) で削平される。

検出した主な遺構は11世紀後半から12世紀前半の土坑、ピットである。

### (1) 土坑 (SK)

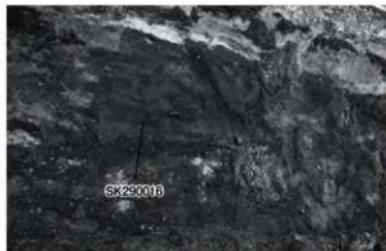
**SK290016 (Fig.3 Ph. 2)** 南側③に位置し、北側、東側、南側は削平される。深さは20cmで、覆土は黒色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 30は鉄片で、厚さ3.0mmを測る。他にヘラ切り底の土師器、黒色土器B類、瓦器、白磁XI-4類、施釉陶器が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK290059 (Fig.2 Ph. 5)** 南側⑧に位置する。北側は電力管で削平され、東側、西側は他の遺構に切られる。深さは15cmで、覆土は暗灰褐色土を主体とする。



Fig.3 第1面全体図② (1/100)



Ph.2 ③-1面（南から）



Ph.3 ④-1面（北から）



Ph.4 ⑦搅乱状況（西から）



Ph.5 ⑧-1面（東から）



Ph.6 ⑩-1面（南から）



Ph.7 ⑪-1面（西から）



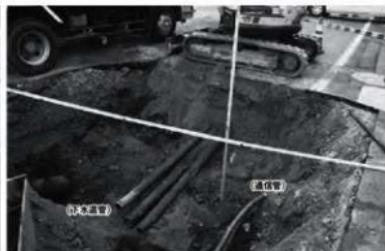
Ph.8 ⑫-1面（南から）



Ph.9 ⑬搅乱状況（西から）



Ph.10 ⑭攪乱状況（西から）



Ph.11 ⑮攪乱状況（西から）



Ph.12 ⑯攪乱状況（西から）



Ph.13 ⑰攪乱状況（西から）



Ph.14 ⑩-1面（東から）



Ph.15 ⑪-1面（西から）

出土遺物 (Fig.5 Ph.16) 17は不明土製品である。1.5-2.0cmの太さの粘土塊を長さ 2.4cmに引き延ばし、弓状に曲げる。側面は凸凹で、工具によるナデの痕跡が多く残る。他は白磁、土師器、施釉陶器が出土し、土坑の時期は 11世紀後半から 12世紀前半と考えられる。

**SK290125 (Fig.2 Ph.8)** 南側⑫に位置する。平面プランは円形を呈するが、北側を電力管、南側を通信管に切られる。深 50cm を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.5) 18は滑石製石鍋の底部片で、体部外面にはノミ痕が残る。外面は多量の煤が付着する。19は土師器の丸底坏で、内面には工具痕が残る。20は白磁碗IV類の底部片である。他に回転糸切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 12世紀前半と考えられる。

**SK290126 (Fig.2 Ph.8)** 南側⑫に位置する。北側、西側を電力管、南側を通信管、東側をSK290125に切られる、平面プランは不明である。深さ 50cm以上を測り、覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 21・22は土師器で、21は回転ヘラ切り底の小皿、底部は工具でナデを施す。

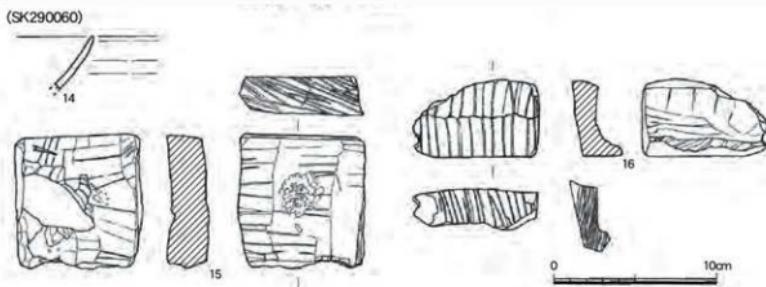
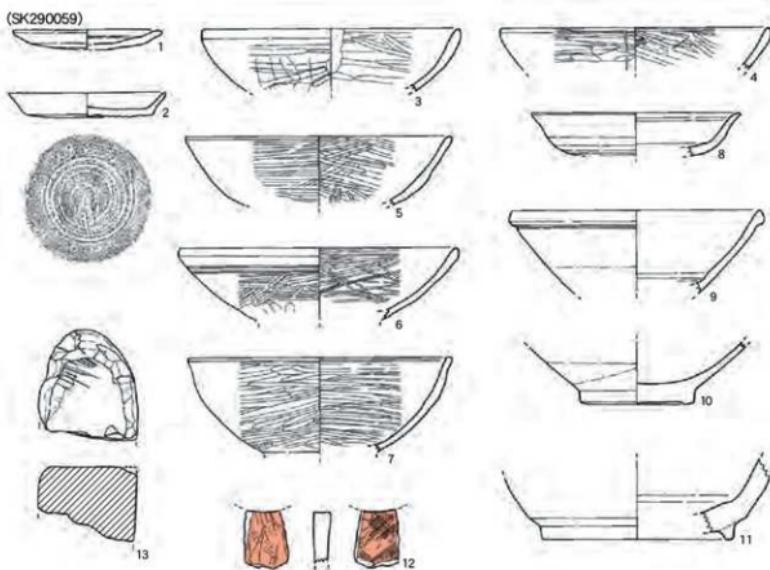


Fig.4 第1面遺構出土遺物実測図① (1/3)



Ph.16 SK290059・290060・290104 出土遺物

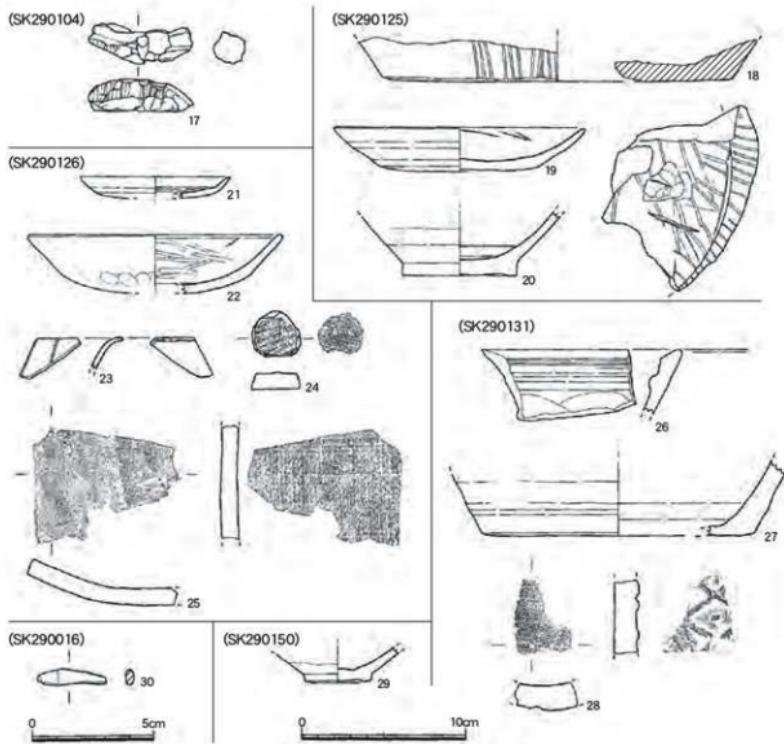


Fig.5 第1面遺構出土遺物実測図② (1/2・1/3)

22は丸底杯で、外底部には指頭痕が残る。23は白磁の小碗で、輪花と白堆線を有する。24は瓦質の平瓦を用いた瓦玉で、重さは10.19gを量る。25は土師質の平瓦で、四面の布目は工具によりナデ消される。他に回転糸切り底の土師器、白磁碗IV類も出土し、土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

**SK290131 (Fig.3 Ph.14)** 東側塗に位置する。平面プランは橢円形を呈し、長径1.4m、短径0.8m、深さ0.7mを測る。覆土は黒色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 26・27は無釉陶器の鉢、28は須恵質の平瓦で、凸面は格子目叩き、凹面は布目が残る。他に白磁IV・V類、土師器、須恵器、ガラス坩堝が出土し、時期は中世と考えられる。

### (2) ピット (SP) (Fig.5)

29はSP290150 (17) 出土の白磁の小碗で、内面の底部と体部の境に沈線を有する。

### 3) 第2面の調査 (Fig.6・7 Ph.17-30)

第2面は暗茶褐色砂質土の上面で検出した。遺構面の高さは、西側で、現道路面から約1.2m下の標高約3.8m、東側は現道路面から約1.0m下の標高約3.3mである。埋設管は地山砂丘面まで達し

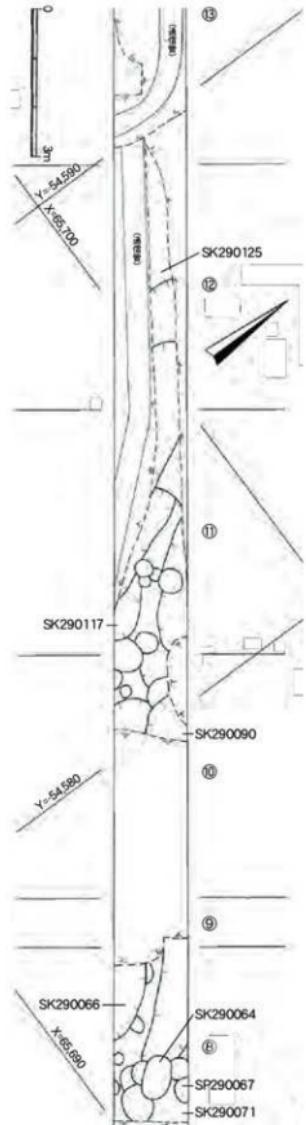


Fig.6 第2面全体図① (1/100)

ているため、第2面も引き続き削平を受ける(Ph.20・23・26・27)。

検出した主な遺構は古代の土坑3基、ピット、11世紀後半から12世紀前半の8基、12世紀中頃の土坑1基、ピットである。

#### (1) 土坑 (SK)

**SK290001 (Fig.7 Ph.17)** 南側①に位置する。深さは30cmを測り、覆土は黒色土を主体とし、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.8) 31は土師器の丸底壺、32は白磁碗IV類の底部片である。他に回転ヘラ切り底の土師器、施釉陶器が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK290010 (Fig.7 Ph.18)** 南側②に位置し、楕円形を呈する。深さは20cmを測り、覆土は黒褐色色土である。

出土遺物 (Fig.8) 33は櫃の把手部である。他に土師器小片が出土し、土坑の時期は古代と考えられる。

**SK290027 (Fig.7 Ph.19)** 南側③に位置し、楕円形を呈する。深さは10cmを測り、覆土は黒色土である。

出土遺物 (Fig.8) 34白磁碗XII-1b類で、外面に縦窓花弁文を施す。時期は11世紀後半から12世紀前半である。

**SK290042 (Fig.7 Ph.20・21)** 南側⑤に位置し、西側は擾乱を受ける。覆土は暗灰色を呈し、深さは50cm以上である。約50枚の土師皿と肥前陶磁器が出土し、時期は近世である。

**SK290064 (Fig.6 Ph.22)** 南側⑧に位置し、平面プランは楕円形で、長径0.9m、短径0.55mを測る。深さは0.5mで、覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.8) 35-37は土師器である。35・36は回転ヘラ切り底の小皿で、36は外底部に板状圧痕を有する。37は椀で、内外面ともに磨きを施す。38-40は白磁である。38は小碗で、外面に縦窓花弁文を施し、39・40は碗V-2a類である。41は青白磁で、白橙色の胎土に青味を帯びた透明釉がかかる。破面は全て丁寧に打ち欠く。42・43は白磁の底部片を用いた瓦玉で、体部縁辺を丁寧に打ち欠く。重さは44.97g、69.96gを量る。44は土師質の丸瓦で、凸面は工具による強いナデを施し、凹面には細かい布目が残る。色調は明褐色である。45は下層の遺物の混入で、土師器の甕である。口縁部内面には焦げが付着する。土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK290066 (Fig.6 Ph.22)** 南側⑧に位置し、深さ0.5m以上を測る。覆土は黄色粗砂が混入する褐色砂である。

出土遺物 (Fig.8) 46は土師器、47は厚さ2.0cmを測る土師質の平瓦で、凸面は粗い格子目叩きが残る。他に黒色



Fig.7 第2面全体図② (1/100)



Ph.17 ①-2面（西から）



Ph.18 ②-2面（北から）



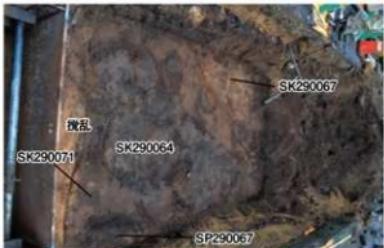
Ph.19 ③-2面（北から）



Ph.20 ⑤-2面（北から）



Ph.21 ⑤SK290042 遺物出土状況（北から）



Ph.22 ⑧-2面（東から）



Ph.23 ⑨攪乱状況（東から）



Ph.24 ⑩-2面（西から）



Ph.25 ⑪-2面（北から）



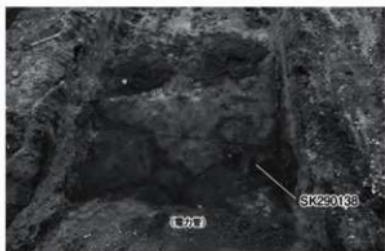
Ph.26 ⑫-2面（東から）



Ph.27 ⑬-2面（南から）



Ph.28 ⑯北-2面（東から）



Ph.29 ⑯-2面（北から）



Ph.30 ⑰-2面（南から）

外面に縦花弁文を施し、内面に細い沈線が巡る。55は白磁碗IV類である。56は石鍋転用の滑石製品で、底面は平坦ではなく、丸味を帯びる。長さ9.2cmを測り、両端は一辺3.2cmの方形を作り出し、深さ1.8cmの穴を開ける。全面、丁寧な研磨で仕上げる。重さは124.12gを量る。他にガラス坩堝が出土する。出土遺物から土坑の時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

**SK290143 (Fig.7 Ph.28)** 東側⑯に位置し、北側は削平を受ける。平面プランは椭円形を呈する。深さは15cmで、覆土は茶褐色土を主体とする。

**出土遺物 (Fig.9)** 57は弥生土器の複合口縁壺の口縁部片である。屈曲部に刻みを施し、口縁端部は平坦に仕上げる。胎土に赤褐色粒、金雲母を含む。他に土師器の甕や壺の小片が出土する。

**SK290174 (Fig.7 Ph.30)** 東側⑯に位置し、平面プランは隅丸方形、長辺0.7m、短辺0.45mを測る。深さは40cmで、覆土は暗褐色土を主体とする

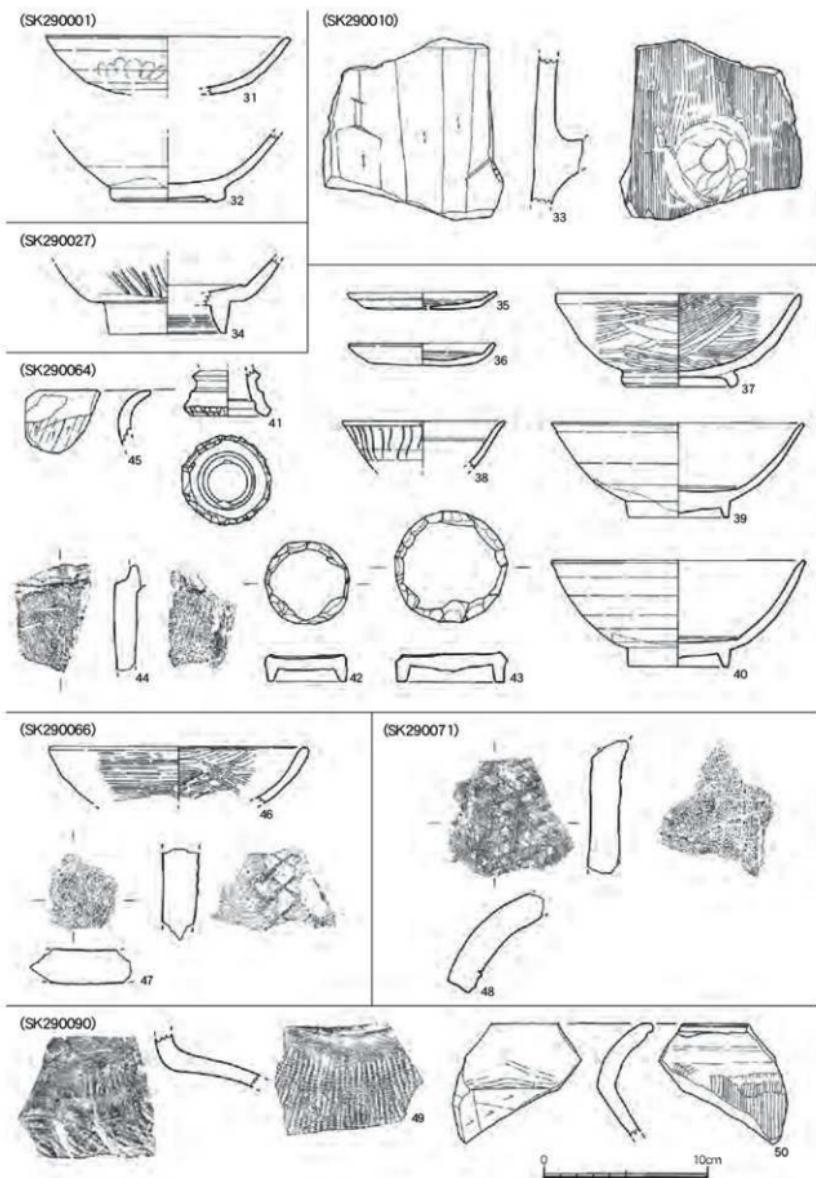


Fig.8 第2面遺構出土遺物実測図① (1/3)

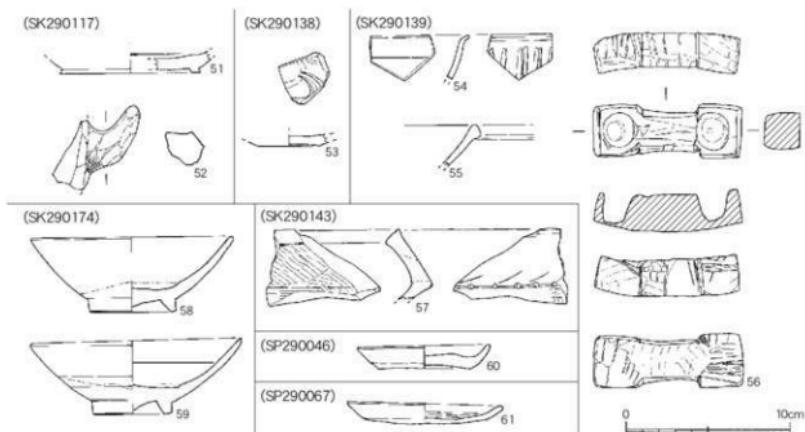


Fig.9 第2面遺構出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物 (Fig.9) 58・59は白磁皿Ⅲ類で、内面見込みの軸を輪状に插き取る。他にヘラ切り底の土師器、瓦器、施釉陶器が出土し、土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

#### (2) ピット (SP)

**SP290046** (Fig.7 Ph.20) 南側⑤に位置し、北側は削平される。平面プランは楕円形を呈し、直径約30cmを測る。深さは20cmで、覆土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.9) 60は回転糸切り底の土師器の小皿である。胎土に白色粒、赤褐色粒、金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。他に焼成瓦等が出土し、時期は近世である。

**SP290067** (Fig.6 Ph.22) 南側⑧に位置し、北側は削平される。平面プランは円形を呈し、直径30cmを測る。深さも30cmで、覆土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.9) 61は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に細かい目の板状压痕を有する。胎土は精良で、色調は白橙色を呈する。他に土師器、須恵器、ガラス坩堝の小片が出土する。土坑の時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

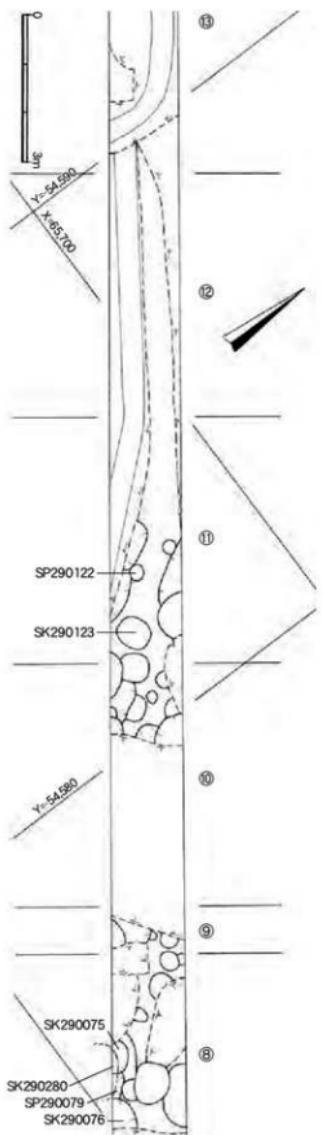
#### 4) 第3面の調査 (Fig.10・11 Ph.32-51)

第3面は黄褐色砂の砂丘面で、標高は西側が現道より1.6m下の標高3.4m、東側が現道より1.3m下の3.0mを測る。埋設管の削平を受けるが (Ph.38・44-47)、他は良好な状況である。

検出した主な遺構は弥生時代後期後半から古墳時代の土坑6基、古代の土坑5基、11世紀後半から12世紀前半の土坑3基、ピットである。



Ph.31 SK290139 出土遺物



(1) 土坑 (SK)

**SK290006** (Fig.11 Ph.32) 南側①に位置し、北側、西側は削平を受ける。深さは20cm、覆土は暗茶褐色土である。

出土遺物 (Fig.12) 62は弥生土器の甕の底部片である。土坑の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

**SK290040** (Fig.11 Ph.36) 南側③に位置し、楕円形を呈する。深さは20cmを測り、覆土は黒色土を主体とする。

出土遺物 (Fig.12) 63は黒色土器B類の椀、64は白磁碗IV類である。他に土師器、施釉陶器が出土し、土坑の時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

**SK290075** (Fig.10 Ph.40) 南側⑧に位置し、南側は削平を受ける。深さは20cm、覆土は暗褐色土である。

出土遺物 (Fig.12 Ph.52) 65は厚さ1.4cmの粘土塊で、器面にはスサ状の痕跡が残る。66は土師器の椀の底部片で、土坑は古代と考えられる。

**SK290076** (Fig.10 Ph.40) 南側⑧に位置し、南側は調査区外へ延びる。深さは15cm、覆土は褐色土である。

出土遺物 (Fig.12) 67は弥生土器の甕の底部片である。土坑の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

**SK290079** (Fig.10 Ph.40) 南側⑧に位置し、南側は調査区外へ延びる。深さは15cm、覆土は褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.12) 68は製塙土器の体部片で、外側は叩き、内面は當て具痕が残る。土坑の時期は古代である。

**SK290080** (Fig.10) 南側⑧に位置し、SK290075・290079の底面で検出した土坑である。覆土は褐色シルトである。

出土遺物 (Fig.12) 69は製塙土器の頸部片で、体部外側は叩き、内面は當て具痕が残る。他に須恵器の甕片が出土し、時期は古代と考えられる。

**SK290123** (Fig.10 Ph.44) 南側⑪に位置し、平面プランは一辺約0.4mの隅丸方形を呈する。深さは20cm、覆土は暗褐色土である。

出土遺物 (Fig.12 Ph.52) 70は土師器の环で、外側は削りの後、丁寧な横方向の磨きを施す。外底部には墨書きが残る。71・72は須恵器で、71の天井部には鏝削りが残る。土坑の時期は8世紀中頃と考えられる。

**SK290129** (Fig.11 Ph.48) 南側⑭に位置し、他の遺構に切られ、平面プランは不明である。深さは20cmで、覆土は灰色土である。

出土遺物 (Fig.12) 73は肥前陶器の擂鉢である。内面に6条1単位の擂目を施す。

Fig.10 第3面全体図① (1/100)



Fig.11 第3面全体図② (1/100)



Ph.32 ①-3面（西から）



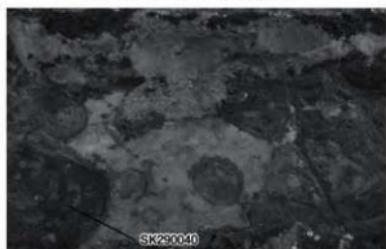
Ph.33 ①-3面（北から）



Ph.34 ②-3面（北東から）



Ph.35 ②-3面近世井戸検出状況（西から）



Ph.36 ②-3面近世井戸検出状況（西から）



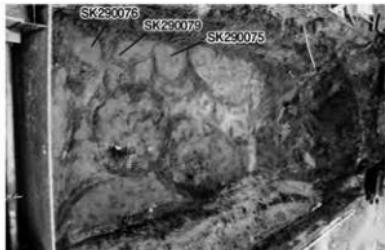
Ph.37 ④-3面（北から）



Ph.38 ⑤-3面（北から）



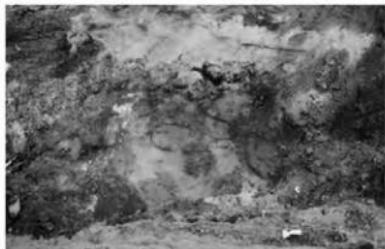
Ph.39 ⑥-3面（北から）



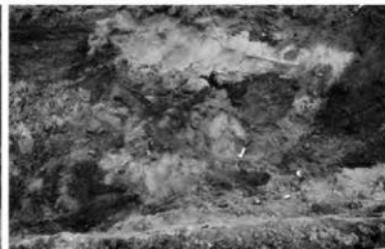
Ph.40 ⑧ -3面（西から）



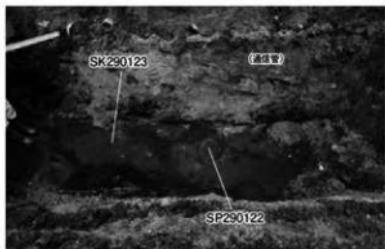
Ph.41 ⑨ -3面（西から）



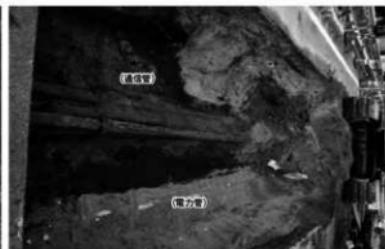
Ph.42 ⑩ -3面（北から）



Ph.43 ⑪ -砂丘検出状況（東から）



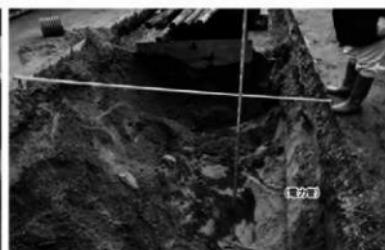
Ph.44 ⑫ -3面（北から）



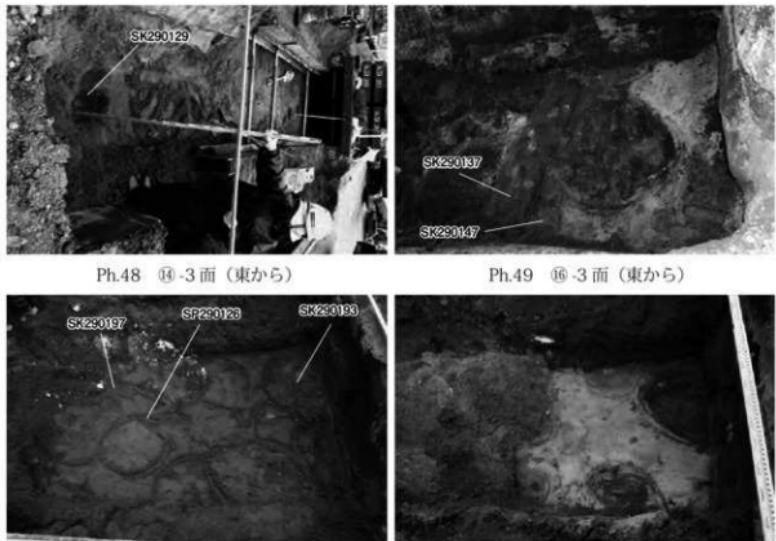
Ph.45 ⑬ -3面（東から）



Ph.46 ⑭ 搅乱状況（東から）



Ph.47 ⑮ -3面（西から）



Ph.48 ⑩-3面（東から）

Ph.49 ⑩-3面（東から）

Ph.50 ⑩-3面（東から）

Ph.51 ⑩-3面（東から）

出土遺物 (Fig.13) 80は土師器の丸底坏で、外底部に板状圧痕を有する。灯明皿として使用しており、口縁に煤が付着する。81は黒色土器B類の椀、82は白磁小碗、83は白磁碗IV-1a類である。他に白磁碗V類が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

**SK290197 (Fig.11 Ph.50)** 東側⑩に位置し、北側、西側は他の遺構に切られる。深さは10cmで、覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.13) 85は土師器の鉢である。他に甕が出土し、土坑の時期は古墳時代前期である。

**SK290200 (Fig.11)** 東側⑩に位置し、大半を他の遺構に切られ、南側の壁を検出したに留まる。深さは10cmで、覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.13) 84は弥生土器の甕の底部片で、土坑の時期は弥生時代終末頃と考えられる。

## (2) ピット (SP)

**SP290122 (Fig.10 Ph.44)** 南側⑩に位置する。平面プランは円形で、直径20cmを測る。深さは15cmで、覆土は暗褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.13) 86は須恵器の坏蓋で、天井部は回転ヘラ削りを行う。出土遺物から土坑の時期は8世紀中頃と考えられる。

**SP290196 (Fig.11 Ph.50)** 南側⑩に位置する。平面プランは円形で、直径30cmを測る。深さは20cmで、覆土は褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.13) 87-91は土師器である。87は浅鉢で、外面下半はヘラ削りの後、横方向の研磨を施す。内面は密な刷毛目で調整する。88は口縁が短く外反する鉢で、体部外面には叩きの痕

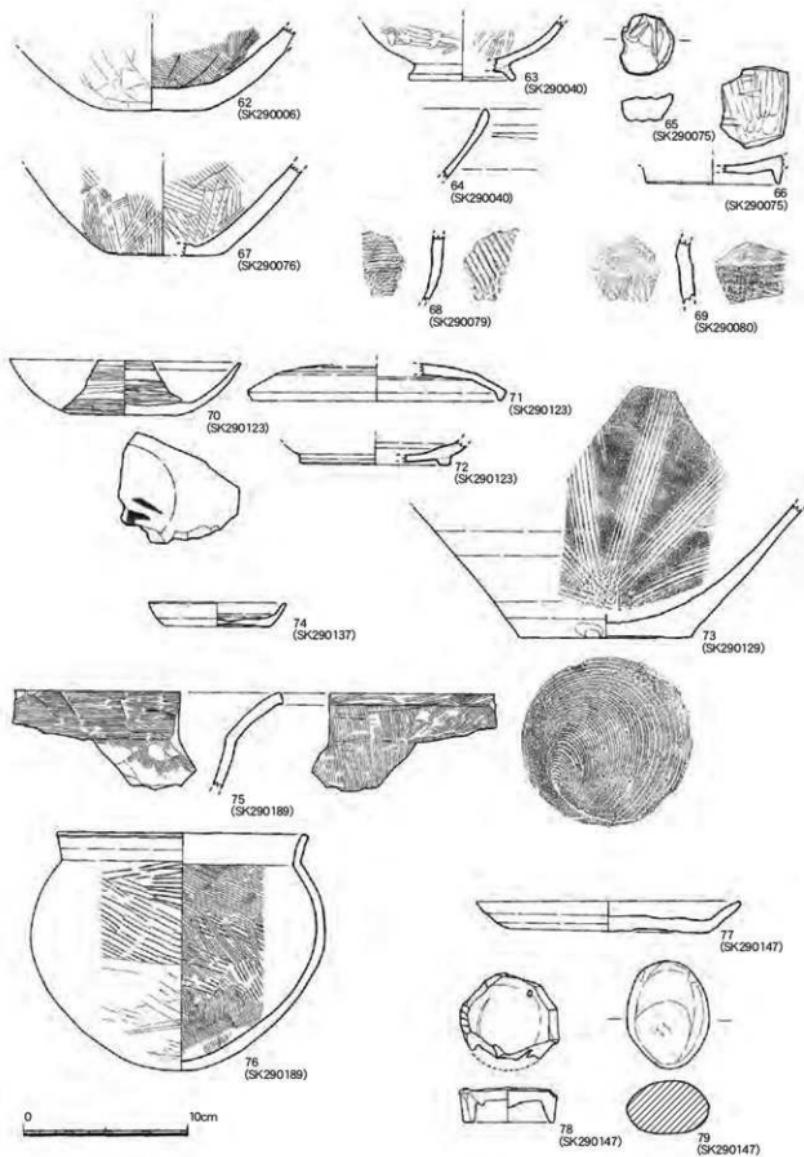


Fig.12 第3面遺構出土遺物実測図① (1/3)

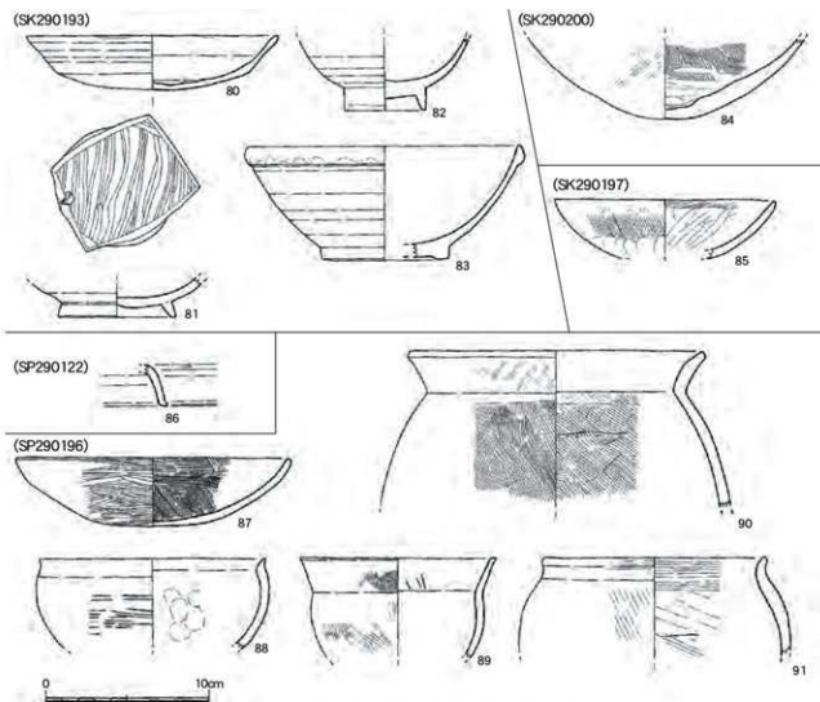
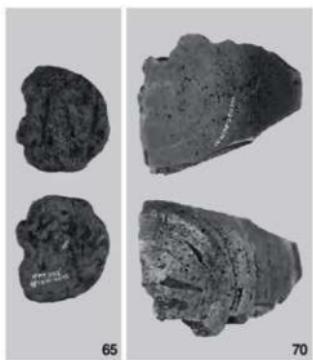


Fig.13 第3面遺構出土遺物実測図② (1/3)

跡が残り、内面はナデで仕上げる。89は小型の甕で、外  
面は粗い刷毛目、内面はナデを行う。90は甕で、口縁は  
緩やかに外反し、端部は平坦に仕上げる。内外面ともに刷  
毛目で調整する。91は小型の壺で、口縁は短く、外反し  
端部は丸くおさめる。体部内面は強い工具によるナデを施す。  
外面は多量の煤が付着する。出土遺物から土坑の時期  
は古墳時代と考えられる。

##### 5) その他の出土遺物 (Fig.14)

92-97は1-2面の包含層出土遺物である。92は弥生土器の甕で、口縁は体部から緩やかに外反し、端部は平坦に仕上げる。内外面に煤が多量に付着する。93は弥生土器の大型の甕の突帶である。断面方形で、上面に刻みを施す。94は土師器の坏蓋で、天井部はヘラ削りを行う。内外面ともに横方向の丁寧な研磨で調整する。95は防長産の綠



Ph.52 SK290075・290123 出土遺物

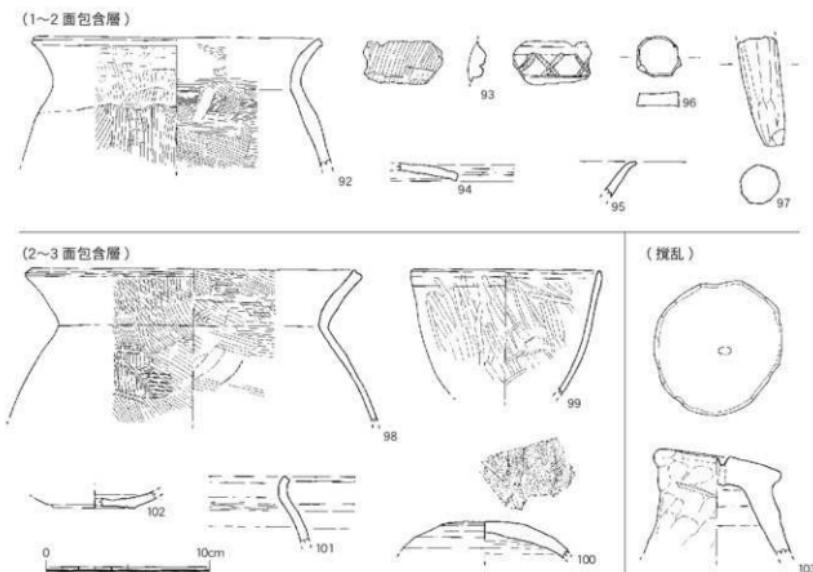


Fig.14 その他の出土遺物実測図（1/3）

釉陶器の楕である。3.0mm程度の砂粒を含む軟質な白色の胎土に淡緑色の釉がかかる。96は褐釉陶器を使用した瓦玉で、周縁を丁寧に打ち欠き、整形する。重さは9.21gを量る。97は瓦質土器の脚部片で、工具によるナデで丁寧に調整する。

98-102は2-3面の包含層出土遺物である。98は土師器の腰で、外面には多量の煤が付着する。99は土師器の小型の鉢で、口縁部内外面の上端には工具の當て具痕が残る。調整は縱方向の磨きで行う。100・101は須恵器である。100は坏蓋で、天井部はヘラ削りで調整し、ヘラ記号を有する。101は小壺の口縁部片で、短く口縁が外反し、全面ナデで調整する。102は白磁の皿の底部片である。削り出しで小さく低い高台を作る。内面見込み中央は円形の貼り付けを有する可能性がある。

103は撹乱出土の弥生土器の杏形の支脚である。上部に直径4.0-6.0mmの穿孔を有する。

## 6) 小結

29区は203次調査区の古砂丘頂部からやや東側に傾斜する緩斜面に立地する。検出した遺構や出土する遺物は他の調査区と同様である。ただ、狹小な調査区であったため、井戸や竪穴住居跡等の大型の遺構は確認できなかった。弥生時代後期後半から12世紀中頃までを中心とした土坑やピットを検出している。古墳時代の遺物として、中世の土坑（SK290059）からであるが、円形削り抜き文をもつ円筒埴輪の小片が出土しており、周辺部での古墳の存在がうかがえる。古代においては、土坑（SK290079・290080）から玄界灘式製塙土器の小片（68・69）が出土している。また、近世の土坑（SK290042）から大量の土師器小皿や肥前陶磁器が出土している。9区のSE090094と類似しており、井戸である可能性も考えられる。本調査はこれまでの博多遺跡群の調査成果をほぼ裏付けるものであった。

### 31. 30 区の調査

#### 1) 立会の概要

対象地は、東工区の北辺と東辺、工区のガイドウォール施工工事に先立つ埋設管調査の掘削に立ち会った。北辺は長さ 46m 幅 1.8m、東辺は長さ 12m 幅 1.5m で、表土下 0.9・1.1・1.3m までの 1-3 面に渡って実施している。23 の小区に区分し実施したが、北辺は東端の⑩小区以外は搅乱内であった。東に隣接する雨水幹線部分も立会を行っているが全て搅乱内であった。2016 年 5 月 14 日～8 月 20 日の延べ 7 日間に渡って実施し (Fig.1)、現道に当たる部分は 1 車線を夜間通行止めにし、幅の半分毎に 22 時から舗装の撤去・掘削、翌朝 5 時までに再舗装の工程で実施され、6 日間は夜間での立会であった。面積は 83m<sup>2</sup>である。

遺構は⑩区の第 1 面で土坑 SK300206・0207 の 2 基、柱穴 1 基を、⑩区の第 2 面で古墳時代前期の土坑 SK300201 を 1 基、⑩区第 2 面で 12 世紀後半の井戸 SE300202 を 1 基、古墳前期の竪穴住居と思われる SC30203 を 1 基、⑩区第 3 面で 12 世紀初頭の柱穴 1 基を検出した。

遺物は 12 世紀後半の SE300202 から同安・龍泉窯系青磁碗、白磁碗、中国陶器甕、糸切りの土師器環皿、東播系捏鉢、瓦、石鍋等を、古墳前期の SC30203 から古式土師器の甕、SK300201 から古式土師器の甕・壇等の小片を検出しているが、図化に耐える資料は無い。

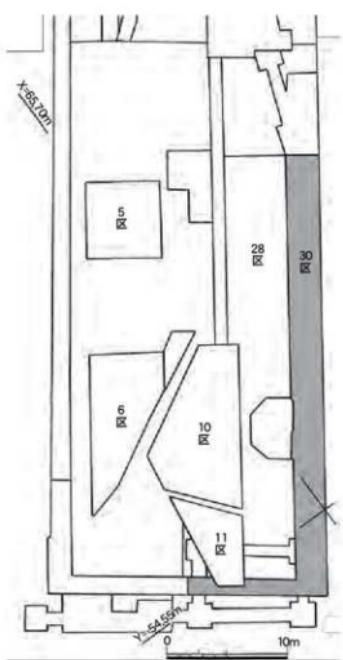


Fig.1 30 区調査区位置図 (1/400)



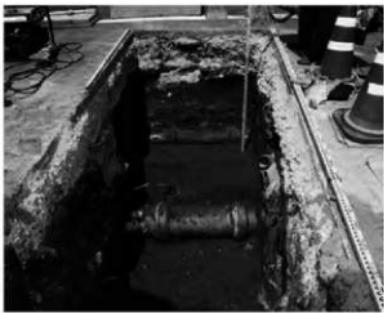
Ph.1 ⑩区作業風景



Ph.2 ⑩区夜間立会風景



Ph.3 ⑪区北側 1面 (GL90 南から)



Ph.4 ⑪区北側 2面 (GL120 南から)

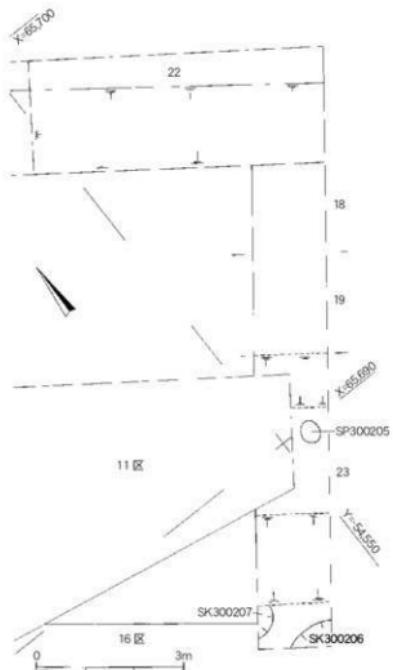


Fig.2 1面全体図 (1/100)

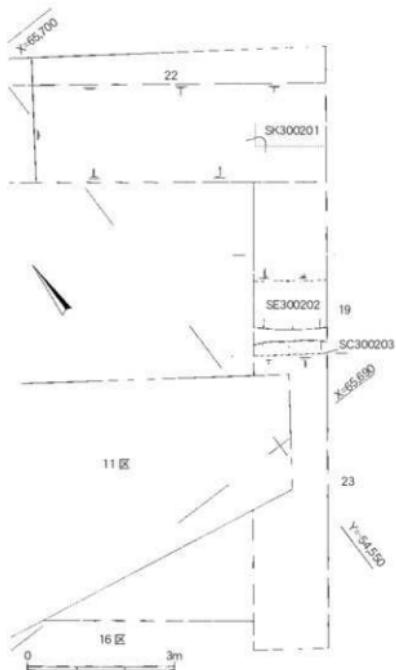


Fig.3 2面全体図 (1/100)



Ph.5 ⑩区北側3面 (GL140 北から)



Ph.6 ⑩区3面 SK300204 (GL130 東から)

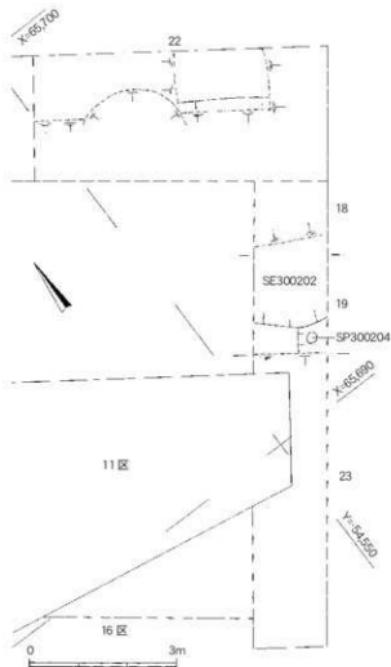


Fig.4 3面全体図 (1/100)



Ph.7 ⑫区3面包含層 (GL135 西から)



Ph.8 ⑫区2面下水部分 (GL177 西から)

## 32. 31区の調査

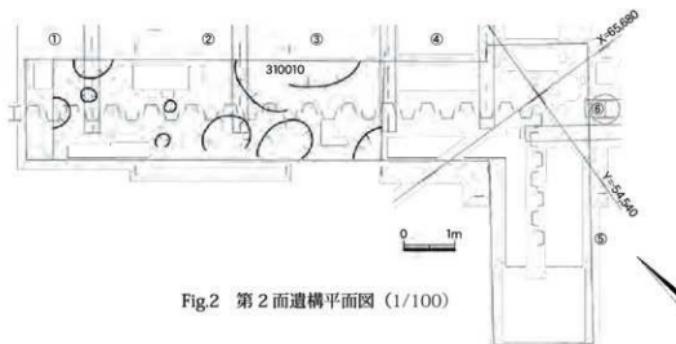
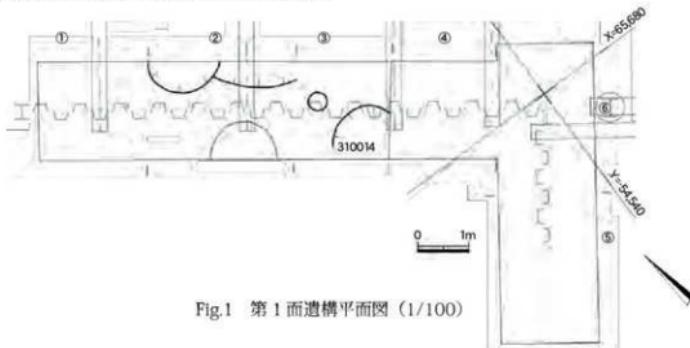
### 1) 31区の概要・基本層序 (Fig.1-3)

31区は東工区の西端に位置する。南側の出入り口部分の鋼矢板設置部分である。夜間工事立会を行った。表土を持ち出しながらの掘削工事となつたため、全体を①～⑥区に分けて立ち合い調査を行つた。第1面は現地表面から75～90cm下の、標高3.3～3.45mの暗茶褐色土層、暗灰褐色土層、茶褐色粗砂層である。また、④区から東側は、近世以降の遺物を含む客土である。第2面は現地表面から110～120cm下の、標高3.0～3.1mの茶褐色砂層、灰褐色砂層、明茶褐色砂層である。この面も④区から東側は近世以降の客土が続いている。現地表面から120～150cm下、標高2.7～3.0mで基盤層である黄褐色砂質土層となり、これを第3面とした。④区付近で砂丘の落ちとなり、落ち際は現地表面から210cm下、標高2.1mで砂丘である黄褐色砂質土層となった。また、調査区の東側端は現地表面から270cm下、標高1.5mまで近世以降の客土が続き、この砂丘の落ちは東側に向けて急激に落ちることが想定された。各面からは土坑や柱穴が確認されている。

### 2) 遺構と遺物

#### (1) 遺構

SK310004 (Fig.3) ①、②区第3面で検出した。平面は不定円形の径が1.5m程度の土坑である。30cm以上の深さがある。白磁などが出土している。



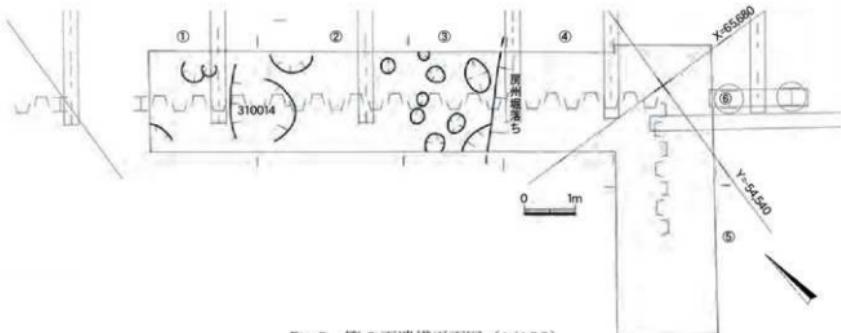


Fig.3 第3面遺構平面図 (1/100)



Ph.1 ①区 1面 (北から)



Ph.2 ①区 2面 (北から)



Ph.3 ①区 3面 (北から)



Ph.4 ②区 1面 (北から)



Ph.5 ②区 2面 (北から)



Ph.6 ②区 3面 (北から)



Ph.7 ③区 1面（北から）



Ph.8 ③区 2面（北から）



Ph.9 ③区 3面（北から）



Ph.10 ④区 3面（北から）



Ph.11 ⑤区（北から）



Ph.12 ⑥区（北から）

出土遺物 (Fig.4・1-3) 1は白磁碗。復元口径 15.5cm。淡灰色の胎土に灰色の透明釉がかかる。2は弥生時代終末から古墳時代初めの壺の頸部の突帯か。赤褐色を呈する丁寧な作りで、刻み目が入る。3は器台の脚部の一部か。淡黄灰色を呈する。

SK310010 (Fig.1) ②、③区第 2面で検出した。径 2.5m の平面円形の土坑状遺構。

出土遺物 (Fig.4・4-7) 4は弥生時代終末から古墳時代初めの高環の口縁部。外面はナデとミガキで調整され、縦の暗文が入る。内面もナデ調整のち縦に暗文が入る。灰赤茶色を呈する。5は土師器杯。復元提携 7.2cm。淡黄色を呈し胎土は精緻。6は須恵器片。外面はタタキ調整、内面には当て具痕が残る。7は弥生時代終末から古墳時代初めの甕胴部。内外面はハケメ調整と工具によるナデ調整がなされる。

SK310014 (Fig.1) ③区第 1面で検出した。径 1m 超の平面円形を呈する。土坑状遺構。11世紀後半から 12世紀前半。

出土遺物 (Fig.4・8、9) 8、9ともに白磁碗。8は復元底径 4.7cm。高台下まで釉がかかり高台内部は露胎。白色胎土に白色釉がかかる。器壁外面にヘラ彫りによる細線が施される。9は復元底径 6.0cm。外底は露胎。灰白色胎土に透明釉がかかる。

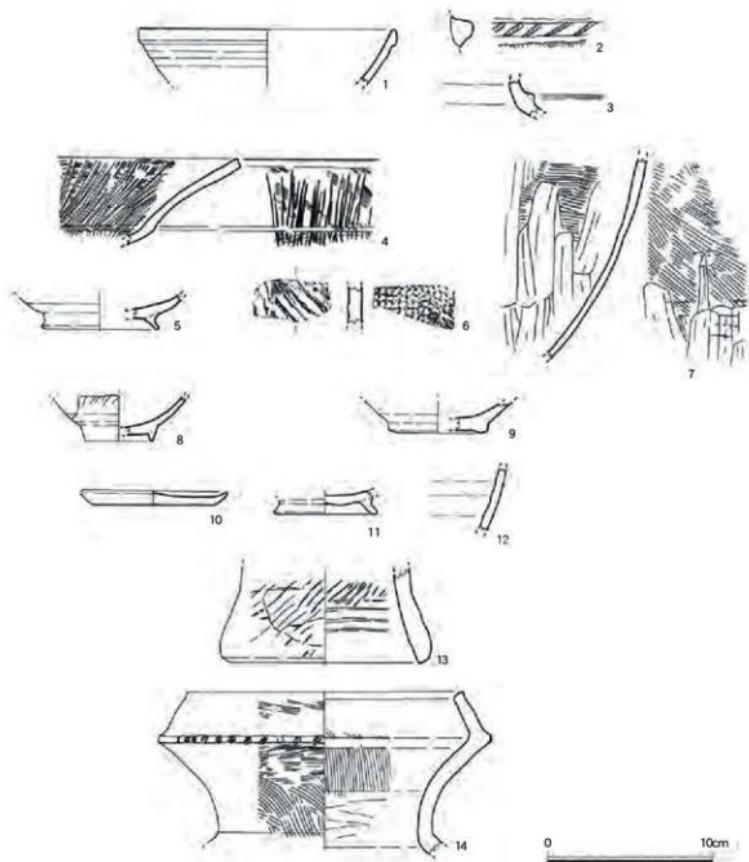


Fig.4 310004・310010・310012・310014 出土遺物実測図（1/3）

#### (2) その他の出土遺物 (Fig.4)

10は①区の第1面で出土した。土師器皿。口径 8.9cm、器高 0.9cm、底径 7.5cm。糸切底で板圧痕がのこる。11は土師器環底部。底径 6.2cm。黄白色で胎土は精緻。12は陶器壺。器壁は淡赤褐色～黄白色を呈し、内外面に黄緑色～黄白色を呈するガラス質が付着する。壇場である。13は器台の底部。底径 11.4cm。内外面にハケメ調整がなされる。灰橙茶色を呈する。14は弥生時代後期の複合口縁壺。口縁部屈曲部に刻み目があり、内外面はハケメ調整がなされる。淡茶色を呈する。復元口径 16.8cm。

#### 3) 小結

調査区の東側はほぼ房州堀の推定ラインに合うように砂丘の落ちが確認された。⑤区、⑥区は地表面から 270cm の標高 1.5m まで黒褐色土の近世以降の客土が堆積しており、堀の肩は急な傾斜で落ちていることが推定される。他の区の検出遺構や出土遺物から、生活遺構は房州堀の際まで形成されていたことがわかる。

### 33. その他の調査

#### 1) 土留Bの概要 (Fig.1)

土留Bは東工区の西端で21区の南西側に位置する。南側の出入り口部分の鋼矢板設置部分である。夜間工事の立会調査を行った。電力管や水道管で搅乱を受けているうえに、地表面から120~160cm、標高2.55~2.95mまで近世~近代の客土が堆積していた。その下は茶褐色から灰茶褐色の砂層となり、遺物が少量出土した。

出土遺物 (Fig.2) 1は青花の碗。灰色の胎土に灰色の釉がかかる。内外面に闊線と、外面に文様が施される。客土中の出土。2は白磁碗。復元口径は16.8cm。白色胎土に灰黄色の透明釉がかかる。3は白磁碗の底部。復元底径7.4cm。灰白色の胎土に黄灰色の透明釉が内面にかかる。外底付近は露胎である。4は陶器の盤。灰黄色の胎土に黄茶色の釉が内面にかかる。2~4は砂層からの出土。

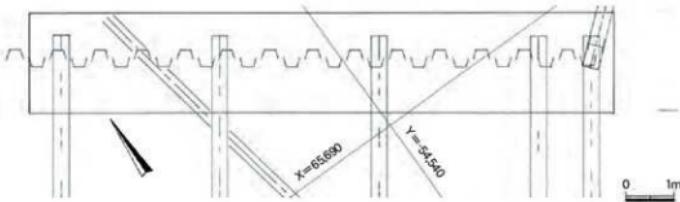


Fig.1 土留B 立会範囲図 (1/100)

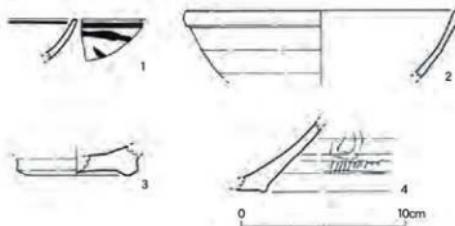


Fig.2 土留B 出土遺物実測図 (1/3)

#### 2) 東工区下水道管 (Fig.3・4)

今回の調査範囲である東工区の東端に位置する。房州堀脇の東側の立ち上がりの推定ラインに位置する。下水道管設置のための掘り方掘削工事に立ち会った。対象範囲の東端付近で砂丘の落ちが確認された (Fig.3)。地表面から160cmまでは近代の客土である黒灰色土層であり、その下層が茶褐色砂質土層となる。この客土層の落ちが①の地点で確認された。おそらくこの付近が房州堀の東側の立ち上がりになると推定される。②の地点で石積みが確認されたが、これは近代以降の新しい遺構と推定される。

#### 3) 房州堀について

今回の調査では房州堀の肩が、22区、31区、東工区下水道管地区で確認された。Fig.5のようなラインが想定される。今回はいざれも工事の立会調査での確認となつたため、堀の構造や堀に伴う出土遺物は明確に確認できなかった。

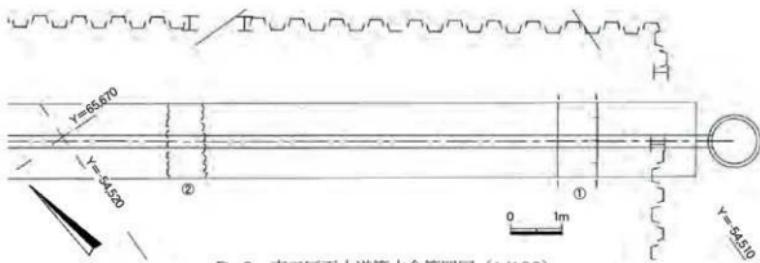
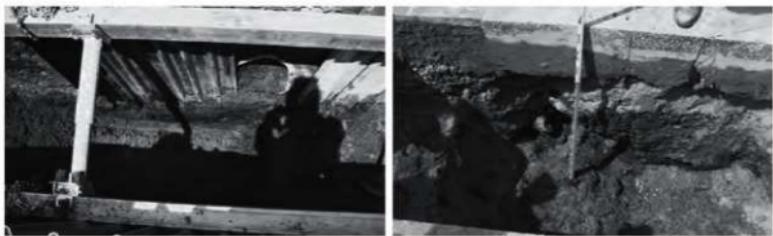


Fig.3 東工区下水道管立会範囲図 (1/100)



Ph.1 下水道管① (北から)

Ph.2 下水道管② (北から)

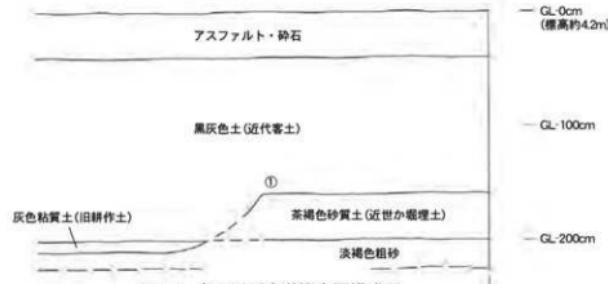


Fig.4 東工区下水道管土層模式図

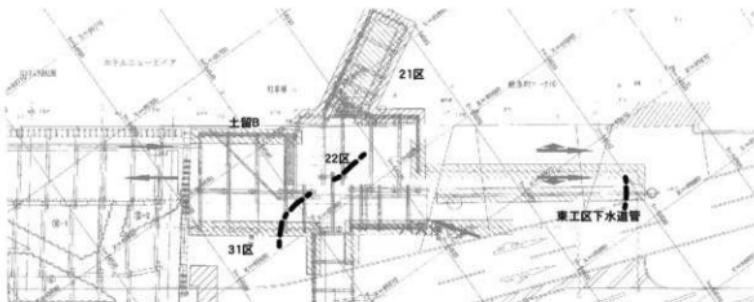


Fig.5 房州堀肩の推定ライン

#### 4) 立会調査等の出土遺物について (Fig.6・7)

地下鉄七隈線延伸工事に伴い、様々な内容の工事が行われた。一つは、既存の水道管、下水道管、電力管、通信管、ガス管等が支障となるため、移設する工事である。新たな掘削を伴う工事に関しては、その都度、工事立会を行った。電力管（出土遺物 1）と下水道管（出土遺物 2～4・7）については、日中の掘削が行えなかったため、夜間工事立会となつた。また、発掘調査を行うにあたり、土留めのための鋼矢板を設置する必要があった。そのため、矢板を打ち込む場所に埋設管の有無を確認するための試掘調査（出土遺物 6・8～10・12）も行われた。これに關しても夜間工事立会となつた。なお、調査区は現道であるため、信号機や生活道路など、覆工板をかけた後にしか、工事ができない箇所も出てきた。その場合は覆工板をかけた状態で、覆工板の下で、重機による横方向からの掘削となってしまった。遺構の確認等はできなかつたが、工事立会の際に遺物の表採を行つた（出土遺物 5・11）。これらの工事より出土した遺物をここで掲載する。

1 は初期龍泉窯系・同安窯系青磁碗 0 類である。体部はラッパ状に開き、口縁は緩やかに外反する。外面に片彫風の縱刃で縱線を施し、内面には片彫花文、櫛による点描文を密に入れる。見込みにも花文が入る。2 は白磁小碗 XIV-b 類で、細く高い高台が付く。3 は龍泉窯系青磁碗 I-3a 類で、内面に片彫文と櫛目を入れ、花文を描く。高台内に目跡が残る。4 は高環の脚部である。下端で大きく外に開き、端部は丸くおさめる。外面は細い刷毛目調整を行つた後、疎な縱方向の暗文を施す。内面は横方向のナデで調整する。5・6 は須恵器の甕の口縁部である。5 は口縁下に台形の幅広の突帶を巡らせ、中央を凹状に窪ませる。その下に波状文を巡らす。胎土は白色砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。6 は口縁を肥厚させ、下位に沈線と波状文を 2 段以上で巡らせる。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は灰色を呈する。7 は土師器の瓶で、復元口径 24.0cm、復元器高 20.0cm を測る。外面は細かい縱方向の刷毛目、内面は縱方向の削りで調整する。8 は弥生土器の甕の底部で、凸レンズ状の底を有する。体部下位に断面台形の突帶を巡らせ、刻みを施す。9・10 は窯道具のトチンで、胎土は 2～3mm の白色砂粒を多量に含み、色調はにぶい赤褐色を呈する。11 は素焼きの陶器で、器壁は厚く、端部は平坦に仕上げる。12 は泥岩製の硯である。研磨による擦痕が多く残る。底部は中央が窪み、前面と側面の 3 辺で接地する。陸部には墨が残る。

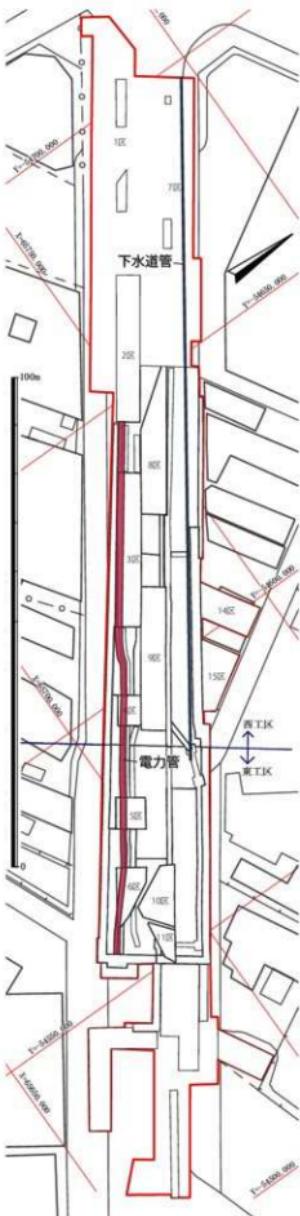


Fig.6 203 次調査区全体図 (1/1000)

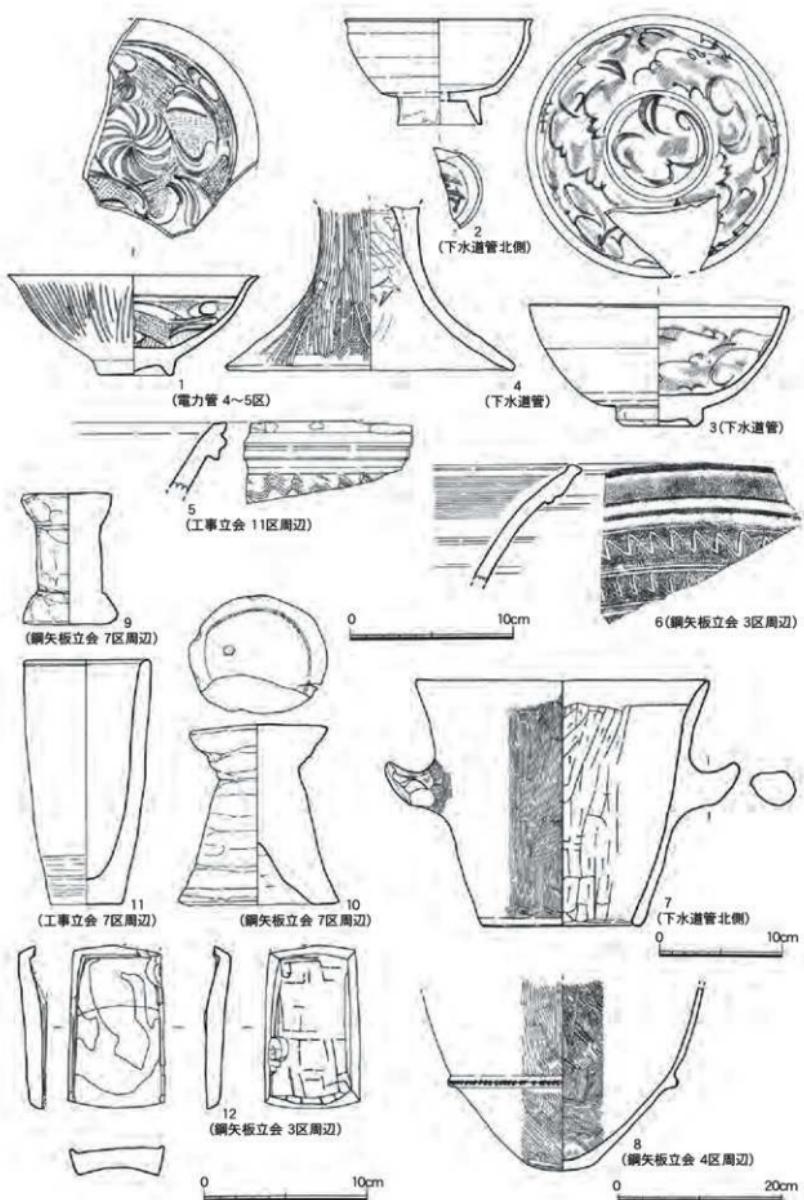


Fig.7 立会調査等出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)

## 34. 金属製品、生産関連資料等について

### 1) 遺物の概要

本章では博多遺跡群 203 次調査で出土した資料の内、土器や陶磁器、瓦といったいわゆる焼物（土製品）以外の資料について概要を記す。これら金属製品やガラス製品、およびその加工に関わる資料は考古学的な情報（寸法や形状、色調などの肉眼観察に基づく外観情報）だけでは資料の理解が不十分であり、理化学機器を用いた保存科学的調査による情報が不可欠となる。後者については調査手法を含めて別項にて取り扱うが、内容が前後あるいは重複する部分も生じると思われる。また金属製品に関しては、各区の報告で資料の実測図が掲載され、遺物の説明も行われている。あらかじめ了承願いたい。

#### （1）金属製品

金属製品は約 1,000 点が取り上げられている。この内、鉄製品が 95% 以上を占める。非鉄金属は 40 点程度しかなく、その大半は銅錢である。博多遺跡群の調査としては異例の状況といえる。出土地区で見ると 3 区と 9 区で全体の半数を占めており、調査区の中央付近に集中が見られる。全体は詳細把握が十分に及んでいないこともあり、一覧表 (Tab.1) は図化したもののみ掲載している。

##### 1) 鉄製品

鉄製品の多くは中～近世のものと見られる釘類である。ここではそれ以外の特徴的な資料について、外観や材質の所見を中心に記す。

古墳前期と見られる鉄製品の中に、鐵鎌やそれに類するものが 10 点ほど含まれている。9 区 Fig.87-828<sup>1)</sup> は SP090243 ベルト出土の大形無茎有孔鎌である。全長 105mm、最大幅 26 mm を計る。透過 X 線で見ると、鎌を固定する孔と別に鎌身の左右に全部で 21 個の孔が穿たれている。孔は間隔が不規則な部分もあり、左右対称とはなっていない。鎌や固定のための糸といった有機物痕跡は認められていない。無茎の大形鎌としては、同じ福岡市内の小椎遺跡で長さ 111mm の比較的近い大きさの資料が見られるが（市報 25 集／Fig.29-2<sup>2)</sup>、こちらの資料は外観で見る限り孔は見られない。有孔無茎鎌は熊本県二子塚遺跡で弥生時代後期中葉～終末の類例などがあるもの（島津ほか 1992）、これほどの大きさで多数の孔があるものは他に類を見ない。

定角式の鎌が 3 区と 9 区で出土している。3 区 Fig.120-1294 は長さ 43mm、最大幅 11.5mm を計り、やや華奢な印象を受ける。鎌はそれほど厚くなく、本来の寸法に近い数値と思われる。9 区 Fig.61-576 は、鎌身が腐食によって大きく膨れていますが、透過 X 線で見ると刃が非常にシャープに見えており、良好に残存している状況が窺える。鎌を含む現況で長さ 48mm、最大幅 18mm を計る。博多遺跡群では 59 次調査（市報 328 集／Fig.71-K41<sup>3)</sup> や 147 次調査（市報 892 集／Fig.128-78・79）でも類品が出土している。この中には刃が研ぎ出されていないように見えるものもあり、鍛治作業の痕跡と合わせて、この地で製作されていた可能性が示唆される。

3 区 SC030480 出土の Fig.88-1075 は定型の鉄鎌にはあまり見られない、木の葉の様な形状を呈する。現存長 22mm、幅 15mm と小形で厚さも 1 mm に満たない非常に薄い作りである。両面に根抜み状の木質と見られる痕跡があることから、鎌と考える。

3 区包含層出土の Fig.124-1342 は、透過 X 線で見ると基部は非常に整った左右対称の作りとなっているが、刃に相当する部分は不整形である。鎌未製品の可能性がある。

他にも 9 区で、定角で明確な茎関を有さない形状のものがある (Fig.12-93、111-1044、125-1139)。類品が古墳前期の鉄器製作に関わる資料が出土した 147 次調査（市報 892 集／Fig.128-68・

70・71) や比恵遺跡 143 次 (市報 1350 集 / Fig.18-176) などで見られる。博多 203 次や 147 次の定角式鉄鎌の存在と合わせると、韓国金海大成洞古墳群 29 号墳で大量に出土している資料 (申ほか 2000) との類似性が指摘できるかもしれない。また、同じく 9 区で先端が尖った棒状の形を呈する資料が見られる (Fig.160-1513)。古墳前期には無い長頸鎌に類する形ではあるが、やはり 147 次調査 (市報 892 集 / Fig.128-72) や 156 次調査 (市報 945 集 / Fig.80-87) に類品が認められる。鎌未製品、あるいはヤスなどの可能性も考える必要がある資料である。

6 区 Fig.5-15 は雁又鎌である。猪目の透かしを作り出しており、元岡・桑原 20 次に類例 (市報 962 集 / Fig.53-37) が見られることから、奈良時代の資料と考えられる。

農工具としては、ヤリガンナ、大形袋状斧、鎌がある。ヤリガンナは 3 点有り、9 区 SP090622 出土の Fig.134-1212, 1213 は裏すきが全体に及ぶタイプ、25 区包含層出土の Fig.11-53 は、裏すきが刃部のみで、柄は断面矩形を呈するタイプである。袋状斧 (3 区 Fig.124-1344) は包含層出土。鎌も含めた最大長 130 mm、刃部の最大幅 53 mm、袋部は孔の入り口外径が 47 × 40 mm であるが、鎌膨れが著しい。斧としては中～大形である。鎌 (23 区 Fig.5-25) は最大現存長 132 mm、最大幅 40 mm を計る。袋状斧は腐食の状況から古墳時代のものと見られる。鎌は 14 世紀初頭～中頃の遺構出土で、その時期は鎌の状況と違和感はない。

不定形の鉄片類が 3、6、8、9、14 区の各調査区で出土している。9 区が最も数が多く、18 点を図化している。これらは形状的な特徴に加え、表面に砂が付着している事で経験的に古代以前の資料と推定しているものである。博多遺跡群ではこれまでにも祇園町周辺の調査区において古墳時代前期の鍛冶関連資料が出土しており、その中に不定形の鉄片が含まれている。特に 147 次調査では、その数が約 1,000 点にのぼる。203 次調査区は、これら鍛冶関連資料出土範囲の南西側にあたる。包含層からの出土以外に遺構に伴う資料は、いずれも土壤やピットからの出土であるが、これらの遺構は特に鍛冶作業に関連するものではない。作業場所から離れて埋没したものであろう。

その他、3 区 Fig.83-1041 は刀子で、刃部は先端から大きく欠損するが、関部分に責金具が銹着して遺存する。SP030352 出土。遺構は 7 世紀前半とみられ、この年代観は資料の形状とも齟齬はない。9 区 Fig.61-575 は釣針である。SE090878 出土。返りは見られない。9 区 Fig.42-381 は鎌の小札である。綴じ孔が残る部分で、鉄鎌の下に黒漆と見られる光沢を有する面が覗く。

## 2) 非鉄金属製品

最も数が多いのは中世の銅鏡で 33 点を数える。内容は Tab.2 のとおり。各調査区の報告部分で掲載されているものもあるが、Ph.42 に改めて主要な資料の透過 X 線像を示す。

他、数は少ないながら特徴的な資料が見られる。3 区 Fig.124-1341 は小形素文鏡である。東側包含層 4～5 面の出土。直徑は 21mm。鋤は側面を丁寧に研磨して仕上げており、小さな円形の孔が開いている。文様は無い。市内では雀居遺跡 9 次調査 (市報 635 集 / Fig.140-32) や日々良込田遺跡 6 次調査 (市報 121 集 / 85-7) に類例が見られる。古墳時代前期の祭祀に関わる所産と見られる。

3 区 Fig.98-1176 は銅鏡である。SK030425 出土。形状から弥生時代後期～古墳前期のものと考えられる。刃部の稜線は真っ直ぐで、丁寧に作られている印象を受ける。先端が僅かに欠けるが、全長 45mm、最大幅 9 mm を計る。

古代の資料としては跨具と権がある。跨具 (6 区 Fig.25-140) は丸鞆で、2 面の出土。下方に長方形の透かしが入る一般的な形状である。裏面には軽脚が上に 1箇所、下に 2箇所残る。下の 2箇所の軽脚には裏側の板が固定された状態で一部残存している。最大横幅 30.5mm、縦幅 22.5mm、表側部材の高さ (側面幅) は軽を除き 4.6mm、裏板、軽脚端まで含めた高さ (側面幅) は 8.8mm である。

現状、表面に漆や金属による加飾の痕跡は認められないが、腐食はそれほど進んでおらず丁寧に研磨されている様子が観察できる。側面には研磨によると見られるやや粗い傷が入る。材質分析では銅を主成分として鉛やヒ素を含んでいる。錫も微量ながら含まれるようである。表側、裏板部材ともに同様の組成となっている。権(8区 Fig.46-572)はSE080597から出土した。規則的にV字の溝が入った傘状の部分の下に、円形の突出部がある。宮本佐知子氏のいうA-1類である(宮本1994)。福岡市内では元岡・桑原20次(市報962集/Fig.52-5)、箱崎47次(市報1046集/Fig.49-349)、博多築港線1次(市報183集/未図化/小畠2008)に類例がある。最大径は26mm、高さ22mm、重量は54.54gである。材質は蛍光X線分析の結果、銅が最も強く、次いでヒ素、鉛、錫が明瞭に検出された。他に銀もピークとして認められている。

中世以降と見られる資料には、帶金具もしくは刀装具の責金具、鍋の破片がある。責金具(3区 Fig.10-173)は孔が矩形で部材の断面は蒲鉾形を呈する。長辺36mm、短辺17mm、厚さ7.5mmである。側面から見るとやや湾曲している。材質は銅、鉛、錫による青銅である。ヒ素も微量に含まれるようである。遺構の時期は14世紀である。鍋は3区から2点出土している(Fig.25-549、127-1373)。いずれも大きく破損し、歪んでいる。厚みや口縁端部の形状などからは同一個体と見ても違和感はない。549には釣り手基部の飾り金具が付属する。鍋全体の姿は博多84次調査出土品(市報521集/Fig.24-1・25-2)が想起されるが、飾り金具の形状は博多176次調査出土の鋳型(市報1043集/Fig.40-610)に類する。

## (2) 金属加工関係資料—溶解容器(坩堝)

本調査区では金属生産に関わる資料として、古墳時代前期の鍛冶関連資料と、古代の非鉄金属加工資料、中世前半の鉄加工関連資料(鉄滓等)がある。古墳時代前期の鍛冶関連資料の中で鉄器製作の過程で生じたと考えられる鉄片については、製品との明確な峻別が困難な資料もあることなどから、既に金属製品の鉄製品の項で取り扱っている。中世前半の鉄滓類は、その他の項で記述する。本項では主に古代(8世紀)の非鉄金属溶解容器について記す。

金属が製品となるまでには、①原料鉱石を採取し不純物を取り除き、道具の素材となる金属を得る、採鉱→選鉱→製錬→精錬、②それを合金化する工程、③金工品作るための「鍛金」、「鍛金」、「膨金」といった工程がある(村上2003)。非鉄金属の加工においては各工程で金属を溶解するための容器が用いられ、その工程や作業内容に応じて様々な大きさや形態の容器の使用が想定される。辞書の記載などを参考にすると、一般的には金属を溶解する容器は「坩堝」、加工のために坩堝から金属を取り分ける容器は「取瓶」と区分される。しかし、現状で大きさや形状、被熱あるいは付着物の状態などからある程度の分類はできるかもしれないが、根拠の不明確な推測に頼らざるを得ない部分も多い。そのため、ここでは金属の溶解に用いたと考えられる容器全般を「坩堝」として表記する。

本調査で坩堝と認定した資料は約200点ある。これらはいずれも破片の状態で、一つの番号に複数の破片が含まれているものもあるため、正確な個体数としては示し得ない。判断根拠としては、土製の容器で、被熱やそれに伴う溶解付着物の存在が挙げられる。後述するガラス坩堝も同様の状況が認められるが、容器としての形状や加工痕跡、胎土、付着物の状況からある程度峻別可能であり、内容物の材質分析によってその確度は増す。また一部には被熱痕跡や付着物がみられないが通常の土器とは異なる形状を呈する資料も、未使用品である可能性を考え、ここに含めている。

出土する地区を見ると、8区が100点ほどあり全体の半数を占める。しかし特定の遺構に集中するなどの状況はみられず、土壌やピット、包含層など様々で、遺構面も1~5面で溝遍なく出土して

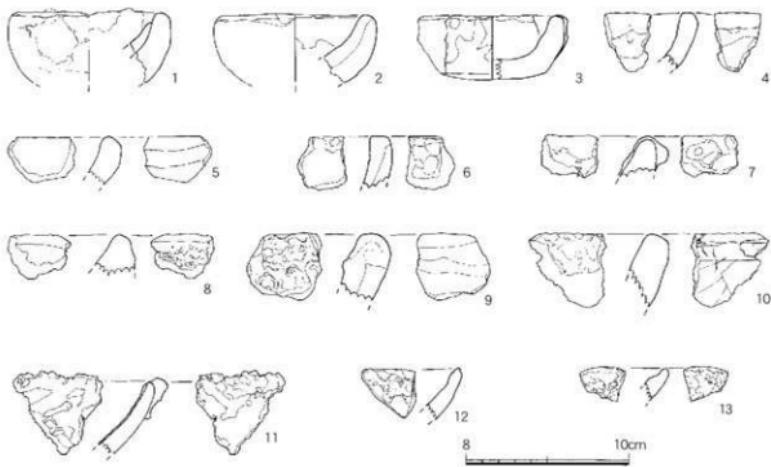
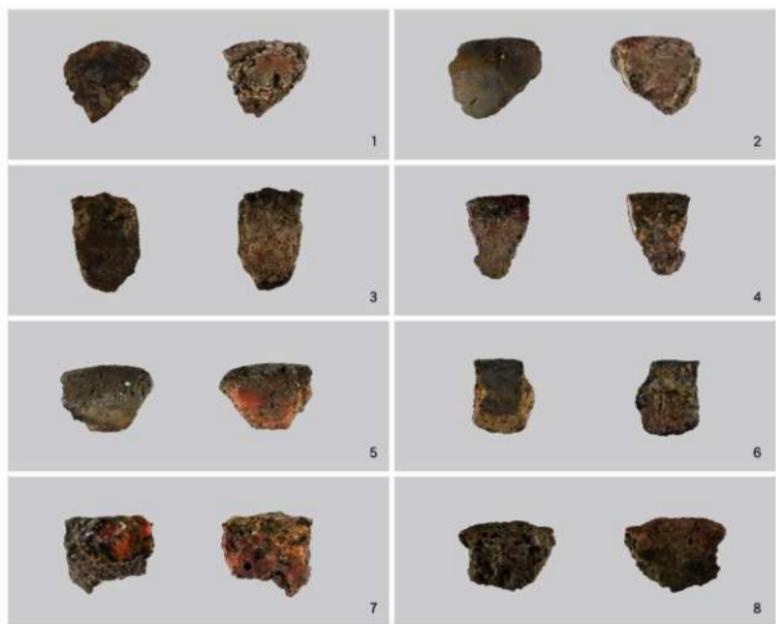


Fig. 1 金属坩埚実測：A類 (1/3)



Ph. 1 金属坩埚：A類



Ph.2 金属坩堝：A類②

いる。次いで3区の38点、9区22点、14区19点と続く。調査区の西側を中心に、中央部にかけて分布していることが分かる。これら金属坩堝の出土遺構は古墳前期～中近世まで幅があるものの、その中心は古代（8世紀代）と見られる。

個別に資料を見ると、特徴的な形状の資料が多いことが指摘できる。これまで見てきた古代以降の金属坩堝は浅い椀状を呈し、器壁が厚く（口径に対して1/10以上程度の厚さ）、胎土は粗くてスサなどの植物質を含むものが一般的であった。しかし博多203次調査で出土する金属坩堝を見ると、この様な資料は10点に満たない数で少ない。これらをA類とする。

大半がA類と比べて胎土が密で器壁が薄い（B類）。しかしB類にも様々な種類がありそうである。ここで「ありそう」と明確に断言し得ないのは、資料の多くが形状の全体像を追えない程度の小片となっているためである。その様な中でも明確に一つの類型として括れるものがある。その特徴としては、径は10cm、高さは5cm程度に復元される。やや深めの椀、あるいは杯といった形状を呈し、口縁は軽く外反する。器壁の厚さは5mm程度で、厚い部分でも1cmに満たない。胎土は均質で、石英粒と見られる白色の粒子が多少混じるが、その大きさは多くが0.1mm程度、大きくても1mm程度である。色調は明灰色と明淡褐色の部分が段階的に変化しており、土師質といえる質感である。そして、外面はハケメによる調整が施されている。これらをB-1類とする。図化した資料ではFig.2がこれにあたる。一見、土師器杯の転用にも思えるが、日常土器にそのような形状のものは見いだせず、今のところ専用坩堝と考えている。

次に器壁が5mm程度かそれ以下で、明灰色や暗灰色を呈する破片の一群がある（B-2類）。図化したものでは33、37、50などがある。明らかに須恵器の転用と見られるような、回転ナデやヘラ削りを有する資料もあるが、須恵質でも仕上げが粗雑で外面の仕上げが指ナデによる調整と見られるものについては、転用の可能性は低いと考えられる。形状の分かれる資料は極めて限られるが、33は

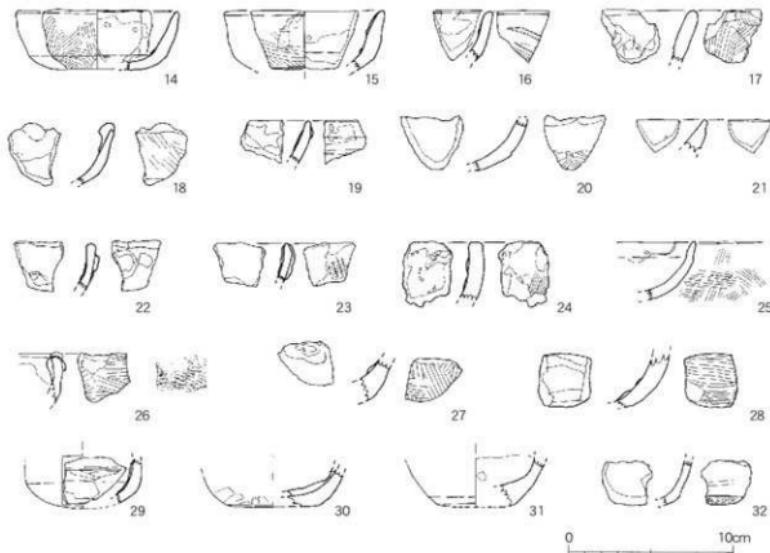
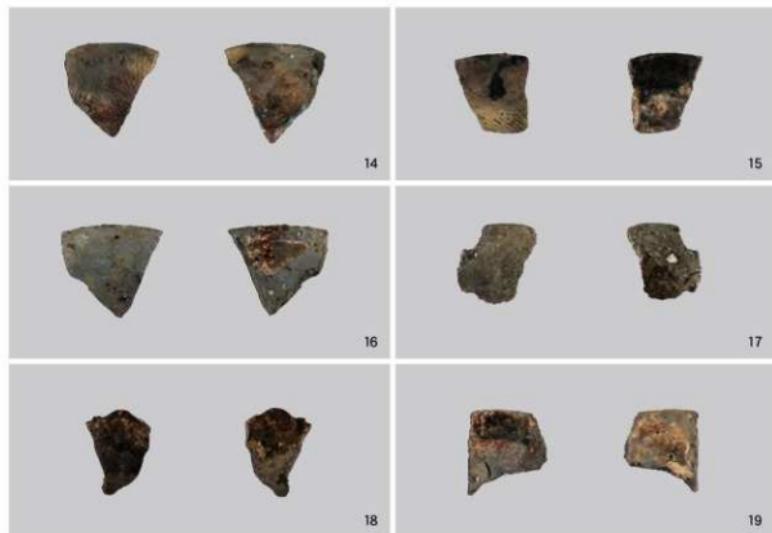
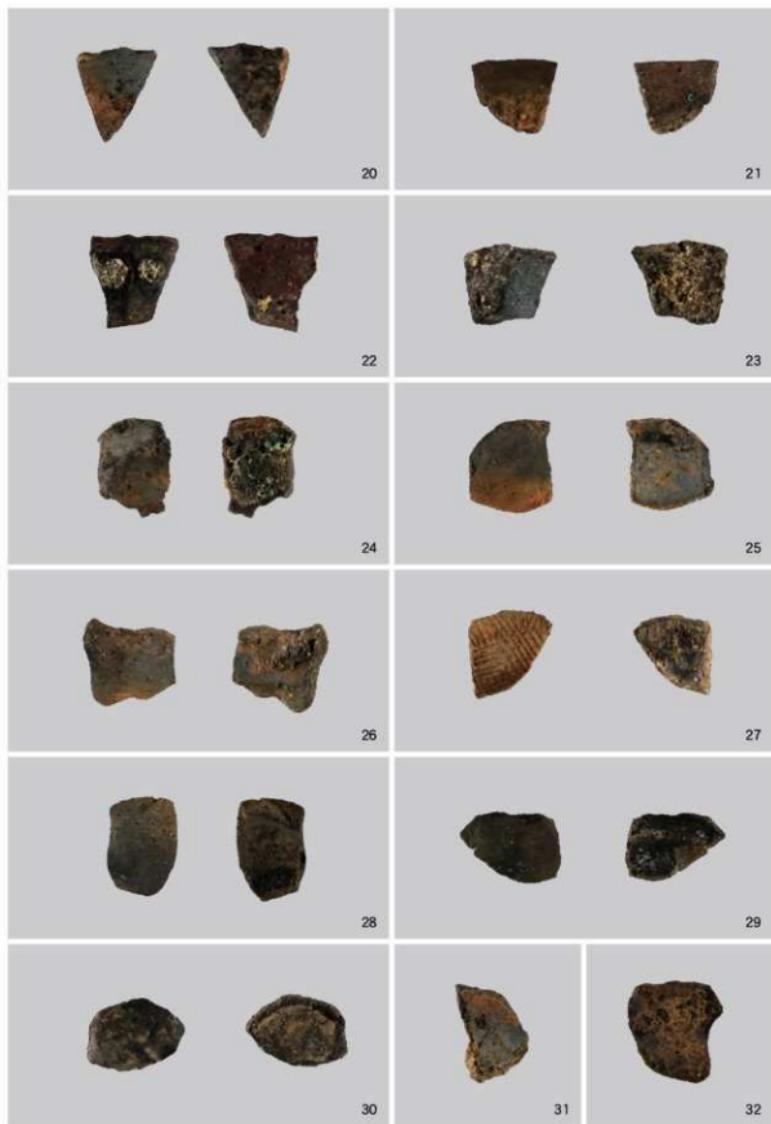


Fig.2 金属坩埚実測図：B-1類（1/3）



Ph.3 金属坩埚：B-1類



Ph.4 金属坩埚：B-1 類②

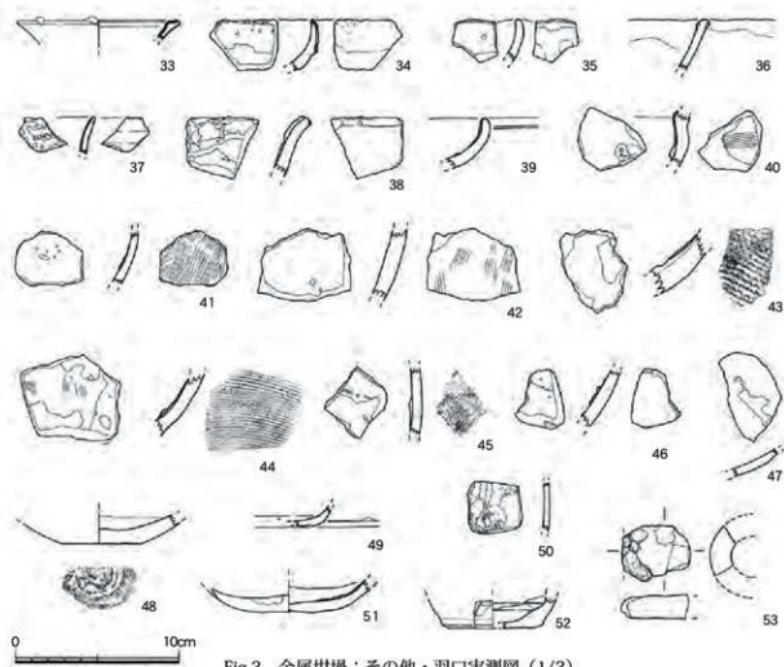
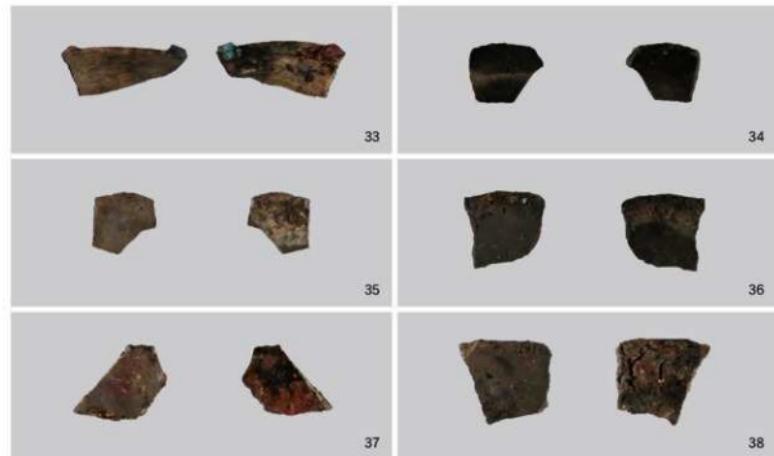


Fig.3 金属坩堝：その他・羽口実測図 (1/3)



Ph.5 金属坩堝：その他①



Ph.6 金属坩堝：その他②・羽口

径 10cm ほどに復元可能である。ただし、器壁の立ち上がり角度や外周の曲率を見ると、すべてがこの様な大きさ、形状とは思えない。

他、外面にタタキを有する資料がある（B-3類）。器壁は厚さ 5 mm ~ 1 cm 程であるが、全体形状の復元は困難な残存率である。それでも、ある程度の大きさで深い容器になることが想定される。被熱の度合によるものか、色調は淡褐色から明灰色まであるが、形状や調整痕から同時代で似たものを探すとすれば、玄界灘式製塙土器が近いと思われる。43 が該当する。

これら埴堀は復元した大きさが概ね径 10cm、高さ 5 cm 程度である。被熱の状況などから見ても鉛石からの製鍊や、その後の精錬に関係するとは考えにくい。製品の加工のための溶解に用いたとするのが妥当であろう。どの様な金属の溶解に用いられたのかについては、別項の保存科学的調査に記す。

### （3）ガラス製品

本項で取り扱うのは、ガラスが原料の調合によって固形物となって以降の資料である。の中には①：道具として使用可能なもの=製品（完成品）、②：①に至る途中段階や失敗品=未製品、③：①や②のもととなるものは素材がある。しかし、これらは厳格に区分できるものではなく、判断が困難な資料も少なくない。そのため、すべて「ガラス製品」として一括りで取り扱うこととする。このような定義によって区分した資料は約 550 点ある。一つの番号に複数の個体を含むものも多少あるため厳密な個体数ではないが、大半は個別に計上しており、ある程度実態は反映した数値といえる。

出土場所で見ると、全体の約 76% が 9 区からの出土である。他に 3、4、8、16 の各区で 10 点弱ずつ出土している。9 区の中でも SK090771 から 300 点以上、SE090879 から約 60 点が出土するなど集中する遺構が見られる。他にも SE090878、SE091125 でまとまった数のガラス製品が出土しているが、これらの遺構は後述するガラス埴堀や、加工に関わるとみられる石材や鉛塊、炭なども出土しており、作業に関わる一連のものが廃棄された状況が窺える。

次に器種であるが、形を特定できる資料の中では玉が最も多く、中でも直径 5 mm 前後の小玉を中心となる。他に複数の小玉が重なったような形状を呈する連玉や、径が 1 cm を超える丸玉も一定数存在する。珍しいところでは、平玉や、孔の無い円板（碁石状の製品）も見られる。玉以外では容器がある。ただし全体の形状が分かる資料は非常に限定され、その多くは曲面を有する板状の破片からの想定である。

ガラスに関しては、色も資料を特徴づける大きな要素である。最も目に付くのは青色系統で全体の 7 割程を占める。ただし一口に青といっても濃淡や透明度の違いがあり、画一的なものではない。また、やや緑がかった青緑のように見えるものもあるが、明確な区別は困難である。一覧表では濃い目のものは青、明るい色調のものは淡青と表現しているが、これも様々な階調があり一律に線引きできるものではない。ただ、古代以前のガラスに通有である青紺色に区分されるものが見られない点は、一つの特徴として示すことができる。青以外では白、あるいは無色とした資料が 30 点ほどある。これに近い色調で、やや緑がかったものもあり一覧表では淡白緑と表現している。他に少数事例として不透明の黄緑や黄色、赤紫などが数点ずつある。なお博多遺跡群で出土する中世のガラスは、基本的に鉛を多く含んでおり埋蔵環境下での腐食によって白色に変化するが多く、203 次調査出土の資料でも白や淡褐色に変色したものが多数見られる。これらは変色を免れた部分で本来の色調を知ることができる資料もあるが、全体が変質してしまっていると、その推定も困難となる。以下、特徴的な資料について個別に説明する。

まず容器類であるが、518 是 8 区 SK080072 出土である。口縁径 20 mm、底部径 12 mm、高さ

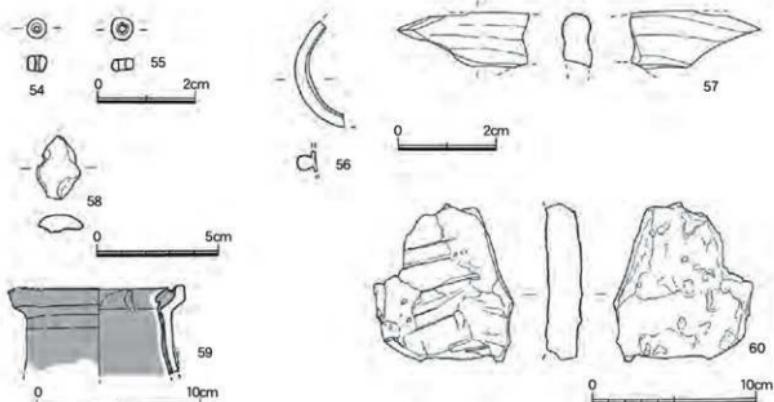


Fig.4 3区 SK030252・SE030718 出土ガラス製品・ガラス加工関係資料実測図 (1/1・1/3)



Ph.7 3区 SK030252・SE030718 出土ガラス製品・ガラス加工関係資料

10 mm の楕形で、何より極端に小さい。色は鮮やかで透明感のある青色。形状的にはこれまでに類例の無い資料である。容器内面はなめらかであるが、外面底部は浅く細かい凸凹があり、溶けたガラスを何かの型に押し付けたような製作技法が想定される。明器のような用途以外は考えにくい。

72は容器蓋の下半片である。9区 SK090771からの出土である。博多79次の方形竪穴状土坑出土の球形容器(市報447集／Fig.49-1・2)蓋に類する。同様の資料は同じ遺構で1点出土している(71)他、3区 SE030718では類品の鍔の部分と見られる破片(56)がある。博多遺跡群では前記の79次以外にも、88次調査で全体が分かる資料が出土するなど(市報1288集／Fig.13-138)、15例ほどの事例がある。118次調査では熱により歪んだ形状となったもの(市報666集／未図化)が見られるが、これが製作途中の失敗品とすれば、この地で製作されているとも考えられる。72の大きな特徴は白色という色調である。これまでの類例はいずれも青や緑、黄緑で、白は初出である。下端が荒れているが、吹き竿から切断された状態と考えられる。類品の2点はいずれも青色である。

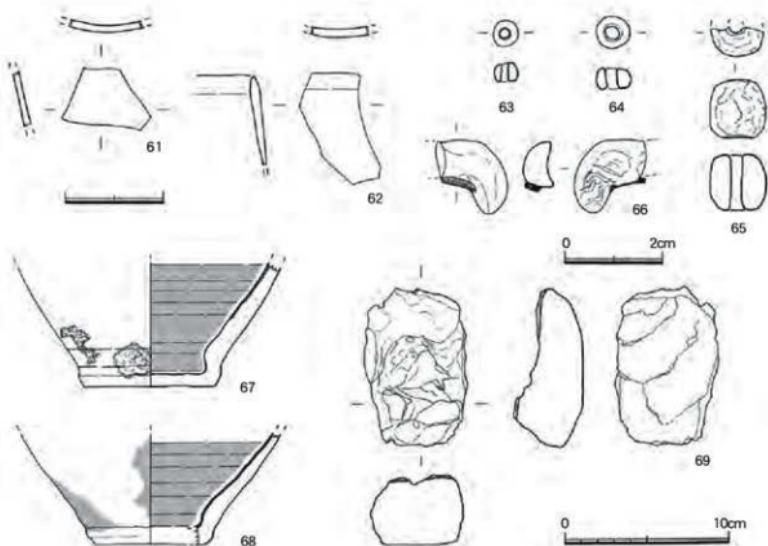


Fig.5 4区SKO40008出土ガラス製品・ガラス加工関係資料実測図 (1/1・1/3)



Ph.8 4区SKO40008出土ガラス製品・ガラス加工関係資料

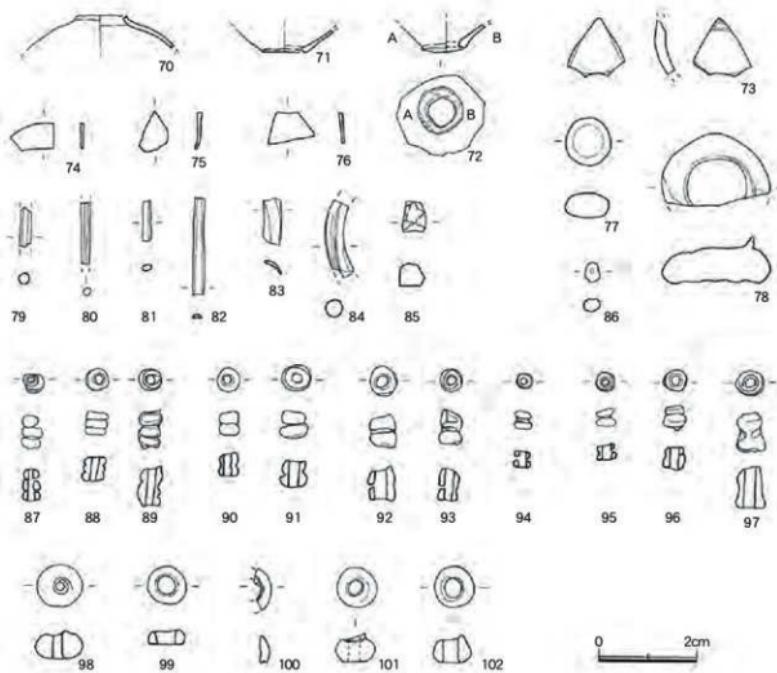


Fig.6 9区SK0900771出土ガラス製品実測図①(1/1)

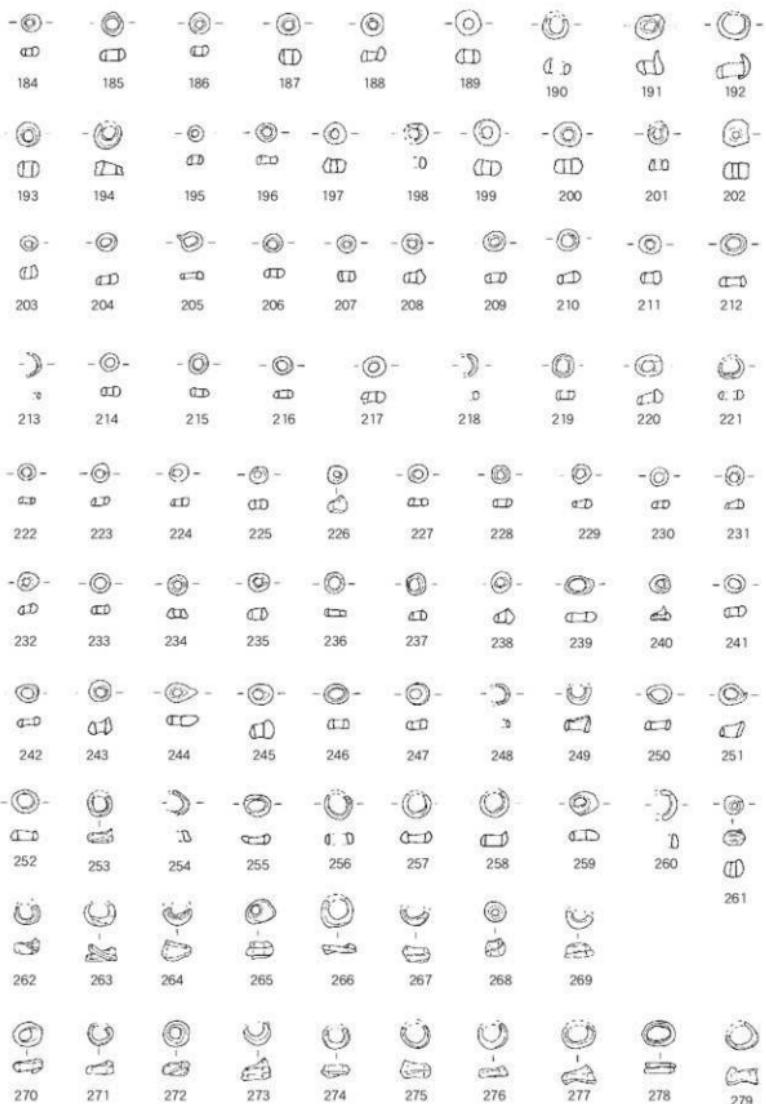


Ph.9 9区SK090771出土ガラス製品①

- ◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
103	104	105	106	107	108	109	110	111
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
112	113	114	115	116	117	118	119	120
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	◎ -	◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
121	122	123	124	125	126	127	128	129
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
130	131	132	133	134	135	136	137	138
- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	◎	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
139	140	141	142	143	144	145	146	147
- ◎ -	- ◎ -	◎	- ◎ -	◎	- ◎ -	◎	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
148	149	150	151	152	153	154	155	156
◎	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	◎ -	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
157	158	159	160	161	162	163	164	165
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
166	167	168	169	170	171	172	173	174
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
175	176	177	178	179	180	181	182	183

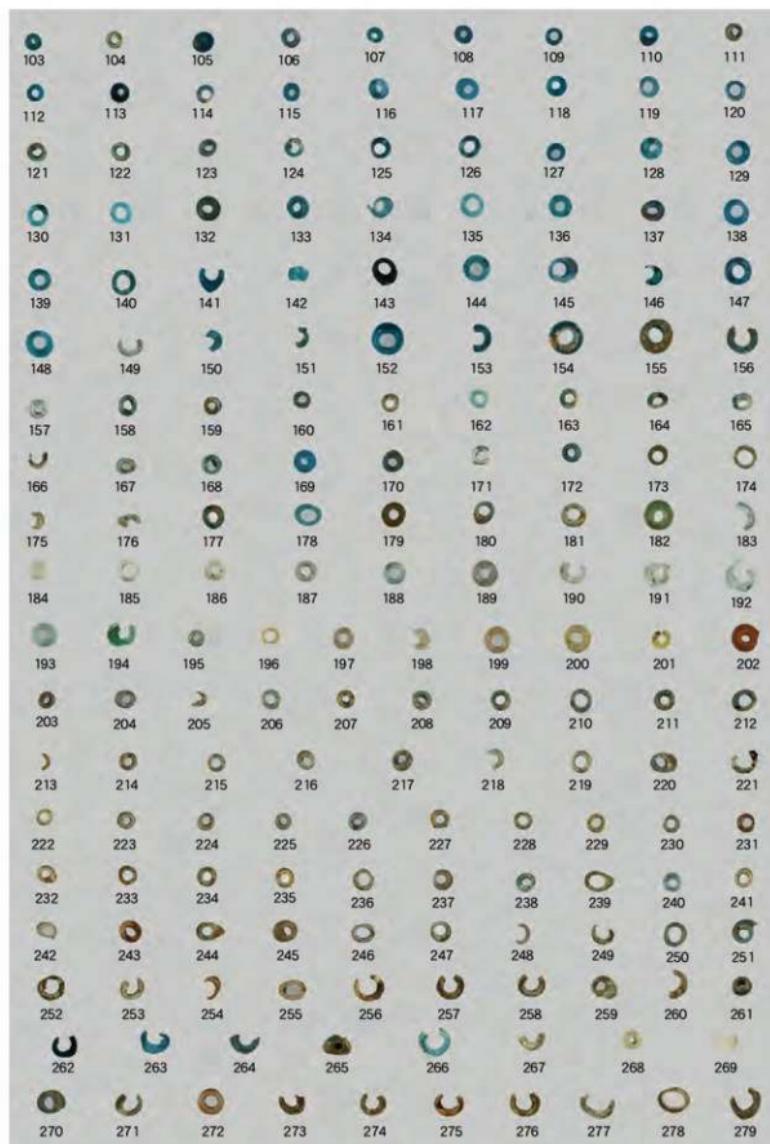
0 2cm

Fig.7 9区SK090771出土ガラス製品実測図②(1/1)



0 2cm

Fig.8 9区SK090771出土ガラス製品実測図③(1/1)



Ph.10 9区SK090771出土ガラス製品②

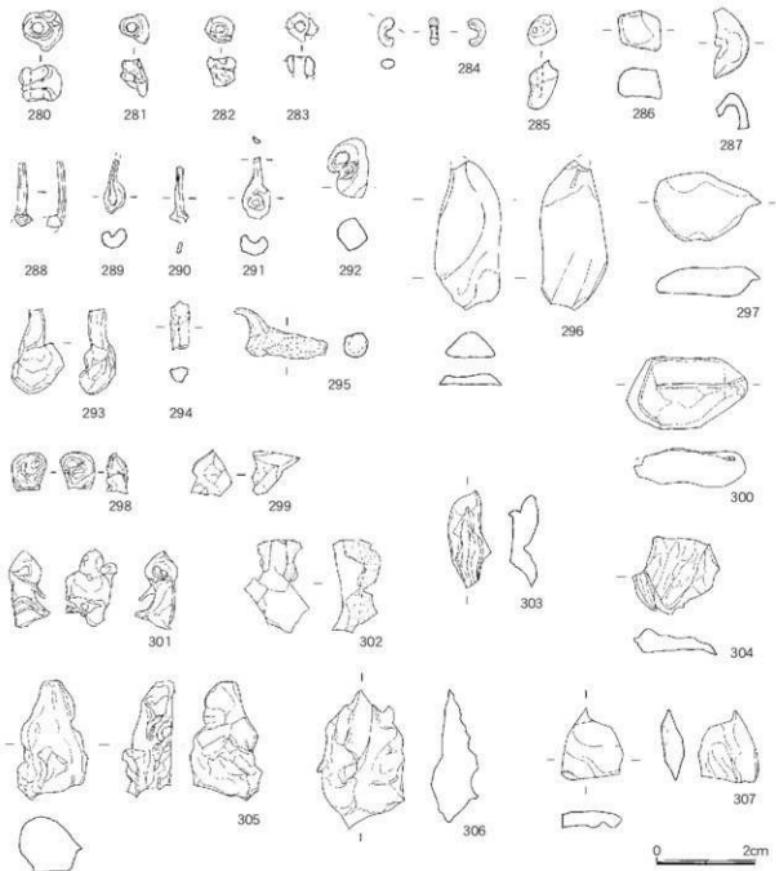


Fig.9 9区SK090771出土ガラス製品実測図④(1/1)

521などは前記の蓋と組み合わせる本体と見られる。口縁部分の破片で、口縁の内径は3cm程に復元される。口縁端がやや肥厚し、博多79次の事例に比べると器壁がやや厚い印象を受ける。風化が進んでいるが、一部、青色の部分が残り本来の色調を想起させる。

次に円板状の資料について記す。孔は無く片面は平坦で、反対面は表面張力で丸みを帯びている。おはじき、あるいは碁石に類する形状である。312は9区SE090850出土。径24mm、厚さ8mmで、これまでに知られている同様の形状の資料に比べて非常に大型である。色は鮮やかで透明感のある青色。同様の資料は77や520もあり、前者は径が10mmと小形、後者は14mmで、こちらは類例の中で通有の大きさといえる。



Ph.11 9区SK090771出土ガラス製品③

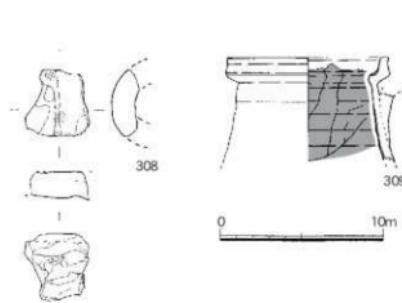


Fig.10 9区SK090771出土羽口・ガラス坩堝実測図



Ph.12 同左

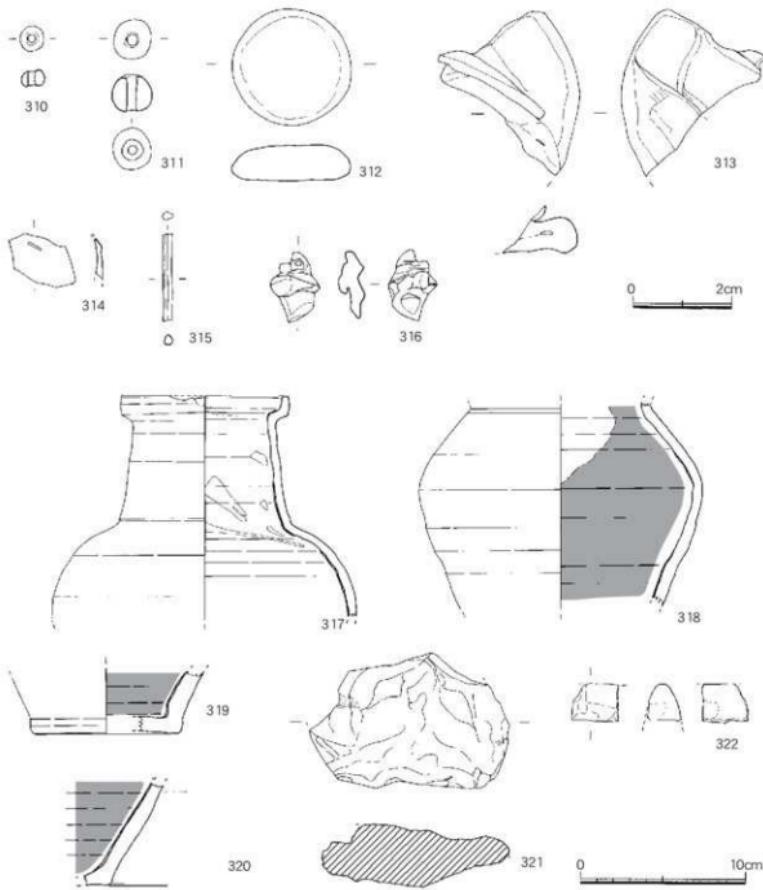


Fig.11 9区 SE090850 出土ガラス製品・加工関係資料実測図 (1/1, 1/3)



Ph.13 9区 SE090850 出土ガラス製品



Ph.14 9区SE090850出土ガラス加工関係資料

玉は、孔を有して紐などに通して装飾に用いる器種を指す。203次調査出土のガラス製品では、全体の6割ほどを占める。便宜的に径5mm前後のものを小玉、10mmを超えるものを丸玉とする。また、小玉が複数重なった状態のものは連玉とする。小玉や連玉には環の一部が欠失したものが見られるが、これが製品となった後に破損したのか、製作途中での失敗なのか詳細の確認はできていない。また、完形品でも歪みのあるものが含まれているが、これが失敗品なのか、製品として流通し得るものなのかの判別が困難な資料も多数見られる。

519は円板状の側面に孔がある平玉である。博多遺跡群では172次調査で類品（市報1086集／Fig.283-87）が出土しているものの、非常に珍しい資料である。

小玉の中でも極めて特徴的な資料として330がある。当初、多くの鉄製品とともに一括で取り上げられていた。透過X線撮影では串団子のような形状が観察できていたが、その陰影像があまりに整った姿であったことから、近現代の資料（ポールチェーン＝風呂の栓などを下げる鎖）と認識していた。しかし、表面の鉄鋸を除去したところ、団子のように見えた部分はガラス小玉であることが判明したのである。つまり、鉄の棒（針金）に、ガラス小玉が均等に4つ刺さったような状態であった。出土遺構は9区SE090878で、090771や090879ほどでは無いものの、ガラスの製作に関わる資料が共伴して出土している。この資料の用途や性格を考えた場合、何らかの装飾品の一部という可能性も否定はできないが、中世のガラス小玉が巻き付けによって製作されていることから、ガラス小玉の製作途中で針金に溶けたガラスを巻き付けた状況と理解するのが妥当と考える。これまで博多遺跡群では、小玉の未製品（失敗品）はそれなりの点数が出土しているが、このような状態の資料は初めての事例である。全国的に見ても中世のガラス製作痕跡が少ない現状では、非常に珍しい資料と考える。

巻き付けによる小玉の製作では、作業する人間への熱の影響を避けるために、少なくとも30cm程度の長さの針金を用いたものと想定される。現状は4cmほどしか無く、針金の両端には鋸が回っている状況から、早い段階で針金が折れたのであろう。またガラス小玉は、やや緑味を帯びた青色で、蛍光X線分析では、いずれも中世のガラスであるカリウム鉛ガラスであった。

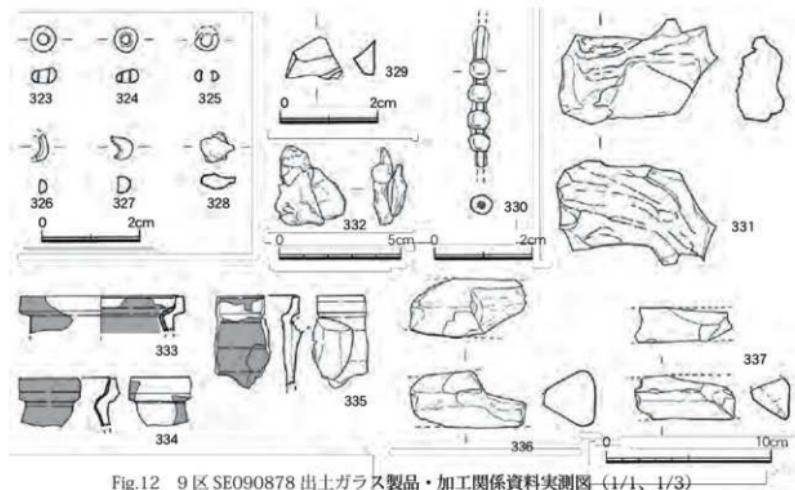


Fig.12 9区SE090878出土ガラス製品・加工関係資料実測図(1/1、1/3)



Ph.15 9区SE090878出土ガラス製品・加工関係資料

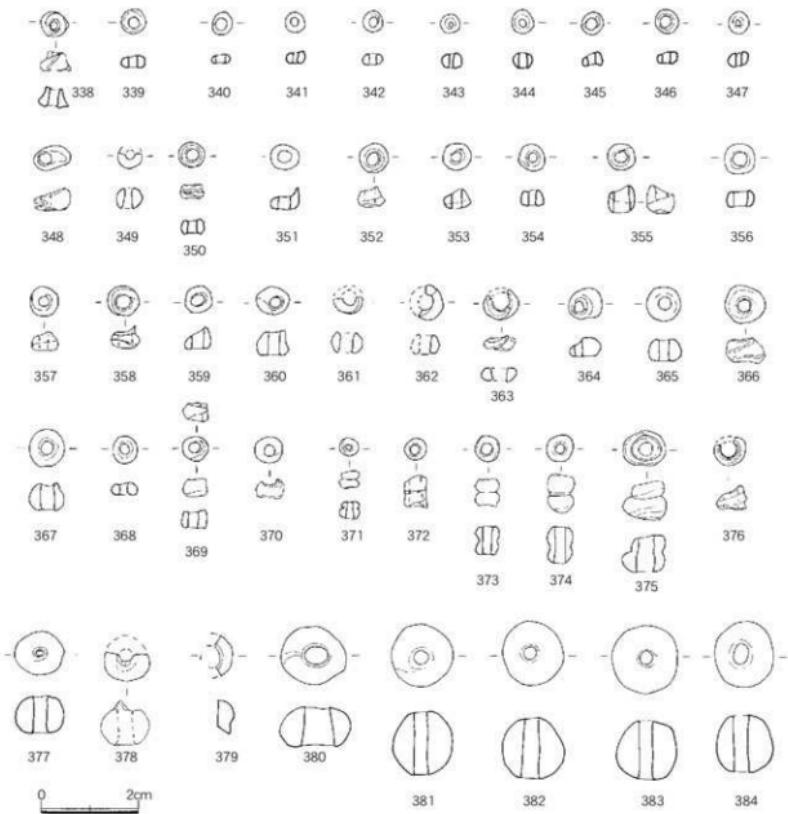


Fig.13 9区SE090879出土ガラス製品実測図①(1/1)

器種を特定し得ない資料のなかでは78が注目される。最大径22mm、厚さ7mmを計る歪で厚い円板状で、一部を欠失する。色調は透明感のある深い青色を呈する。平面部分の片面には正円形の浅い窪みが形成されている。これを吹き竿の痕跡と考えるならば、吹きガラスの「種」になる可能性がある。また、断面が円形の細い棒(79~81、315など)が散見されるが、これらは巻き付けて製作する小玉の素材となる可能性がある。

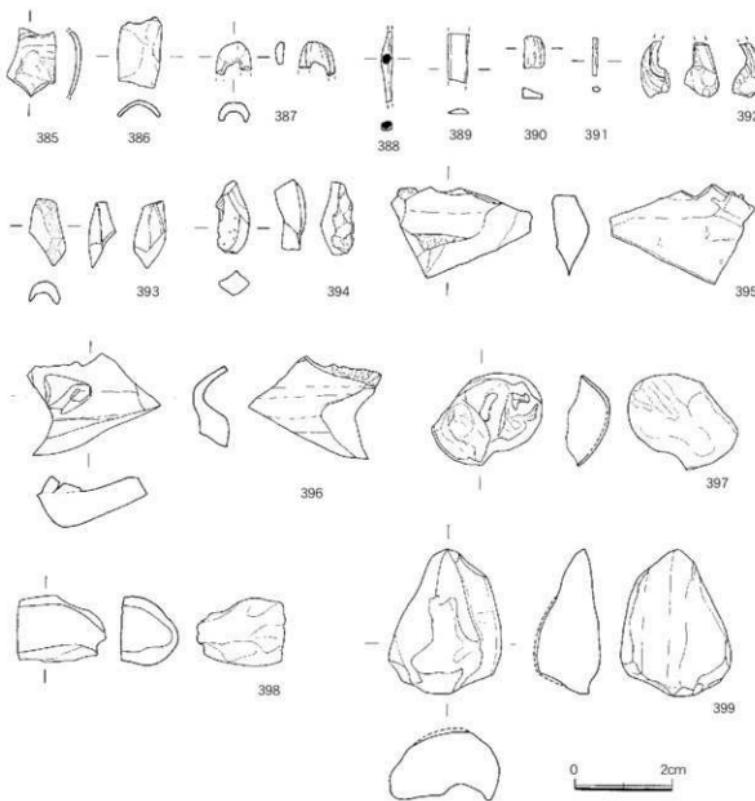


Fig.14 9 区 SE090879 出土ガラス製品実測図②(1/1)

#### (4) ガラス加工関係資料—坩堝

ここではガラスの溶解・加工に用いたと見られる容器をガラス坩堝として取り上げる。被熱や溶けたガラスの付着が判断根拠となる。本調査では約 630 点を計上しているが、これも金属坩堝と同様にいずれも破片の状態で一つの番号に複数の破片が含まれているものもあるため、正確な個体数としては示し得ない。過去の博多遺跡群の発掘調査では、20 数か所の調査地点から 280 点ほどの破片が出土していた。今回の調査では一つの調査区で、これまでの 2 倍を超える破片が出土したことになる。実際の個体数を考えるための目安として口縁部や底部の破片数を数えると、前者は 87 点、後者は 76 点であった。いずれも 80 点近い数となっており、この数字が一つの手掛かりになるものと考える。



Ph.16 9区 SE090879 出土ガラス製品

資料は各調査区で広く出土しているが、特に調査区の中央に位置する9区に比較的集中する状況が認められ、その中でもSK090771、SE090878、SE090879での出土数の多さが目を引く。

ガラス坩堝に関してはこれまでの調査により、ある程度の概要が明らかとなっている（比佐2007、2019）。壺の形態を基本とするが、大きく二種類に分類される。一つは中国製の陶器水注を転用したものである（I類）。これは更に無釉のもの（I-a類）と、褐釉を施したもの（I-b類）に分けることができる。

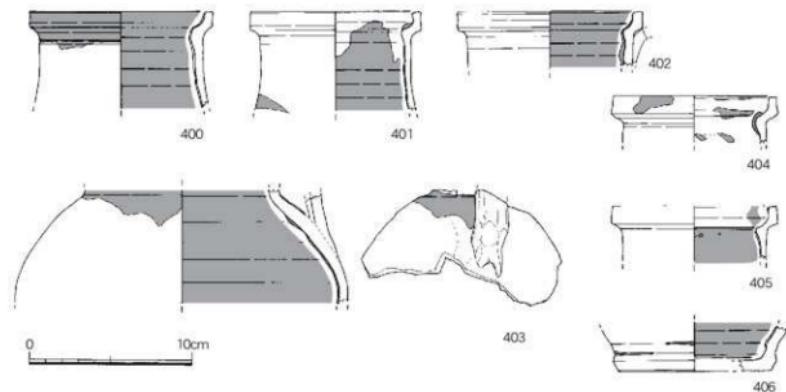


Fig.15 9区 SEO90879 出土ガラス坩堝実測図(1/3)



Ph.17 9区 SEO90879 出土ガラス坩堝

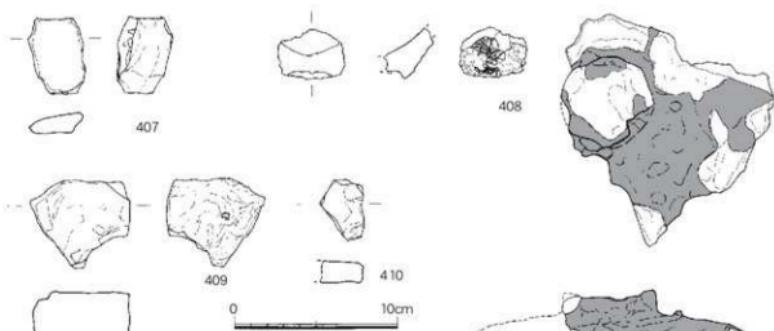
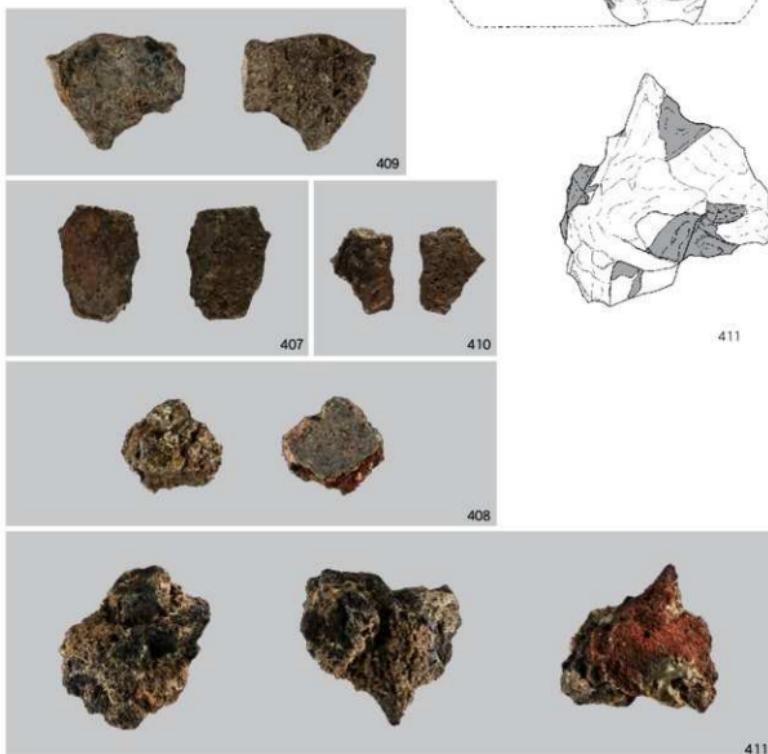


Fig.16 9区 SE090879 出土ガラス  
加工関係資料実測図 (1/1・1/3)



Ph.18 9区 SE090879 出土ガラス加工関係資料

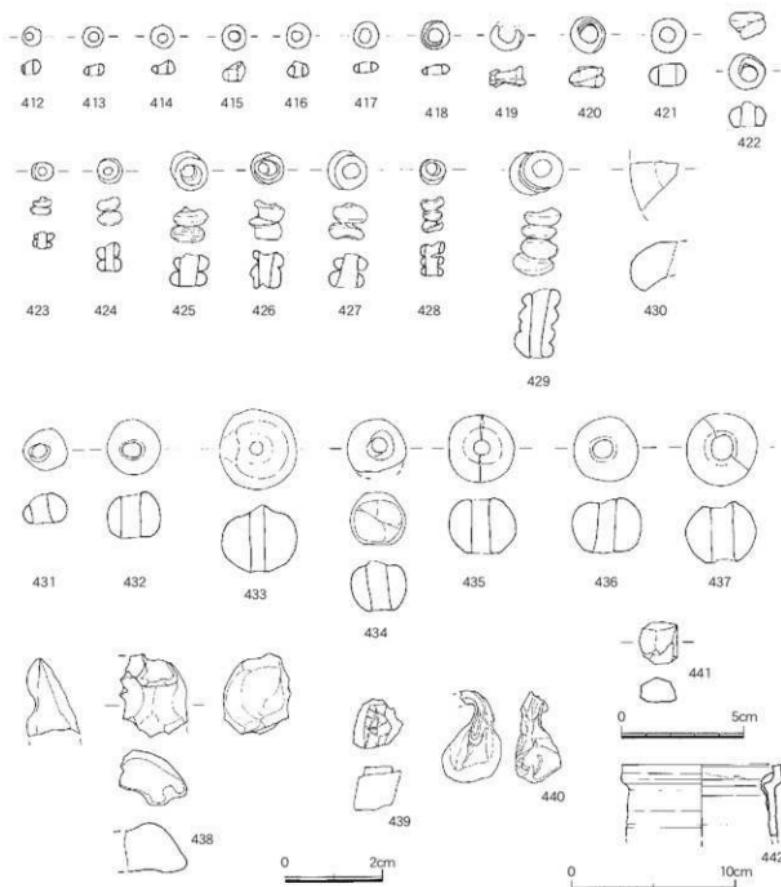


Fig.17 9区SE091125出土ガラス製品・加工関係資料実測図 (1/1・1/3)



Ph.19 9区SE091125出土ガラス加工関係資料



Ph.20 9区SE091125出土ガラス製品

I-a類は、元々赤褐色で金属のような光沢を有する表面状態を呈している。しかし坩堝に転用されると被熱部分が灰色に変色する。口縁から胴部上半までは比較的器壁が薄く、5mmに満たないものが多い。胎土には比較的多くの石英粒を含んでいる。形状としては口縁部断面がL字に屈曲し、底部は肉厚で側面に僅かに突出するのが特徴である。I-b類は、全体の形状はI-a類と大きく違わないが、胎土がより均質、緻密となり、混在物がほとんど含まれない。また口縁部に段ではなく肥厚させているのと、底部の突出が見られない点がI-a類と異なっている。

もう一つはI類よりも器壁が厚く胎土も粗い資料である(II類)。これは転用元となる器物が見られないことなどから、I類を模して坩堝専用に作られたものと考えている。これまで完形品は見られないものの、全体像が分かる博多4次調査出土資料を含めII類に分類される資料を見る限り、I類にある水注としての注口や把手は痕跡を認められないことも、この傍証となろう。色調は、被熱の度合いが相対的に低いと淡黄褐色を呈するが、被熱が進み明灰色となると、I-a類との判別が困難となる。また今回II類とした中には、橙色の色調を呈する固体も数点見られた。被熱や使用状況での周辺空気(酸化あるいは還元状態)の違いが考えられる。ただしI-a、bおよびII類の分類は、これら胎土や形状的な特徴を基に行なっているが、残存率が低く特徴が明確でない破片に関しては暫定的な判断にならざるを得ない。

598、599はこれまでに見られなかった小さな把手が付属しているが、これも褐釉水注の破片で、博多74次の188号遺構出土資料(市報395集/Fig.39-9)が転用前の類例になると考えられる。

604、606などは底部周辺の破片であるが、破断面で観察すると器壁が二重構造となっている。耐熱性を高めるための補強や、補修などの可能性が想定される。この特徴はII類で顕著に見られる。

今回、これまでの分類には当てはまらない形状の資料も少量ながら認められた。これらは暫定的にIII類として設定する。614は体部の破片で、胎土は粗く赤褐色を呈する。一見するとII類にも見えるが、大きな違いは表面にハケ目様な調整痕が入ることである。残存率が低く全体の形状は不明である。

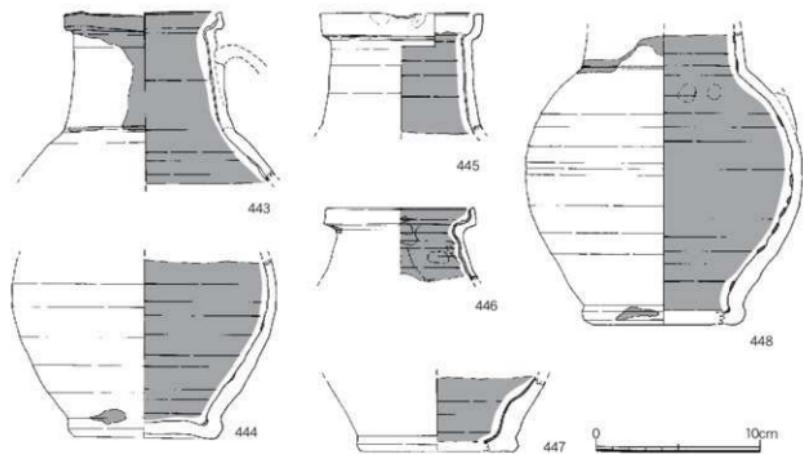


Fig.18 13区SK130001出土ガラス壙壙実測図(1/1・1/3)



Ph.21 13区SK130001出土ガラス壙壙

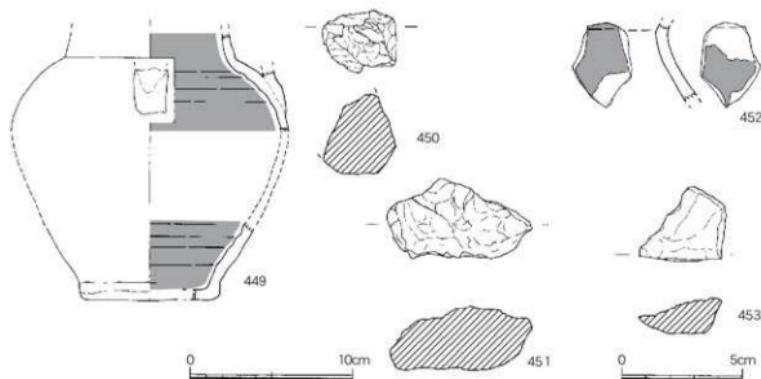


Fig.19 14区SE140005・SE140058出土ガラス加工関係資料実測図(1/1・1/3)



Ph.22 14区SE140005・SE140058出土ガラス加工関係資料

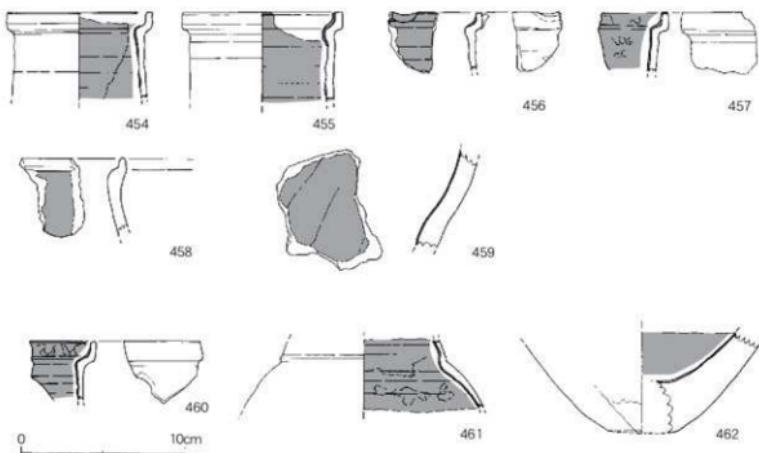
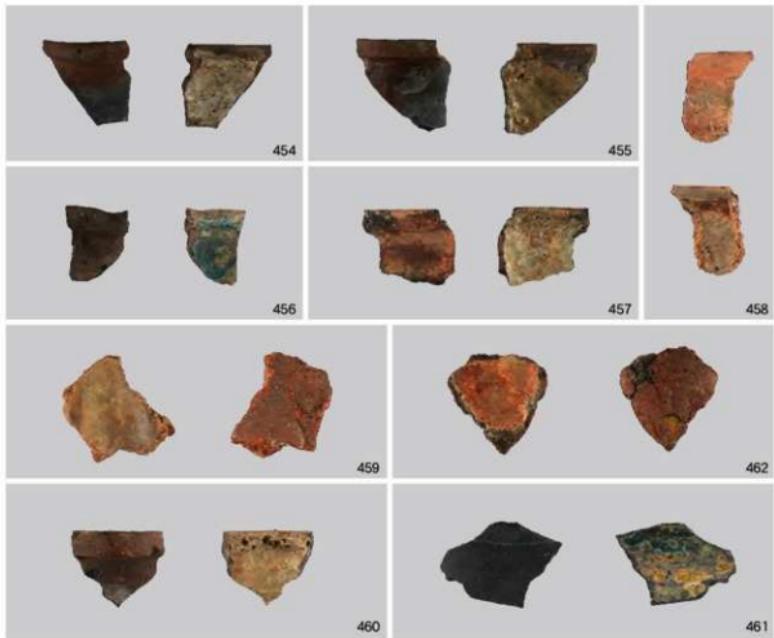


Fig.20 15区SE150014・SE150050出土ガラス坩堝実測図(1/3)



Ph.23 15区SE150014・SE150050出土ガラス坩堝

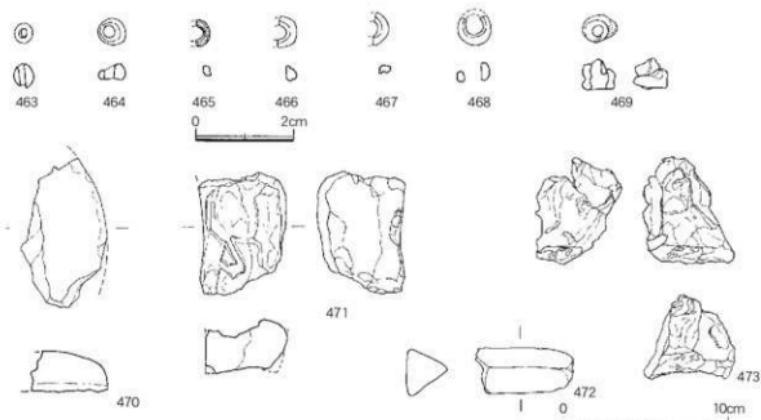


Fig.21 16区SE160066出土ガラス製品・加工関係資料実測図(1/1、1/3)



Ph.24 16区SE160066出土ガラス製品・加工関係資料

613は口縁部の破片である。内面に青色のガラスが付着しており坩堝であることは間違いない。陶器の転用と見られるが、I-a類に見られる段や、I-b類の様な膨らみは形成されない。壺とは思われるが、これも全体の姿は分からぬ。

615は広口の短頸壺である。器壁は薄く胎土も非常に緻密である。同じ調査区で接合はしないものの同一個体と見られる破片がある。特に下部に近いと見られる破片では、内面に溶けて風化した状態のガラスが全体に付着している。ガラスの色は明確な発色をしておらず、無色透明の可能性がある。これらは分析により他のガラス坩堝と同様の組成であることが確認された。以上はそれぞれ1個体分しか見つかっておらず、群を成すものではない。突発的に通有のものとは異なる陶器を転用したのかかもしれない。類例の増加を待って評価すべきと考える。

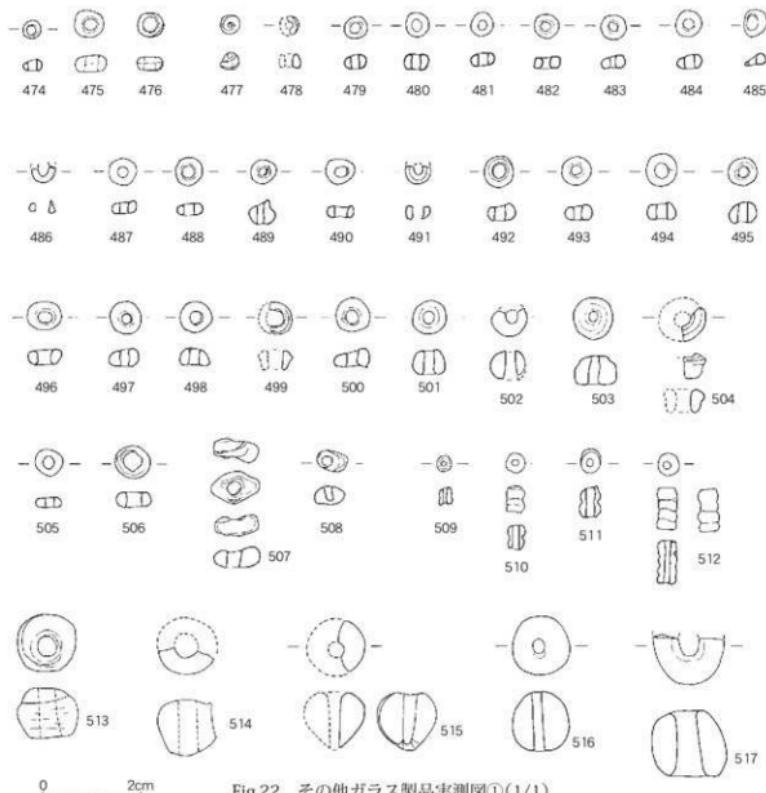
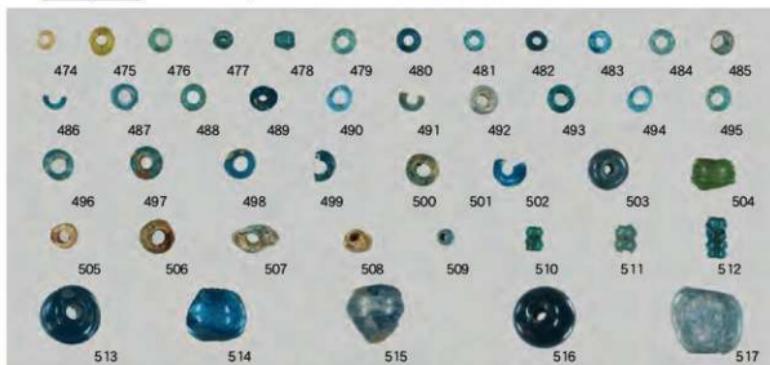


Fig.22 その他ガラス製品実測図①(1/1)



Ph.25 その他ガラス製品①

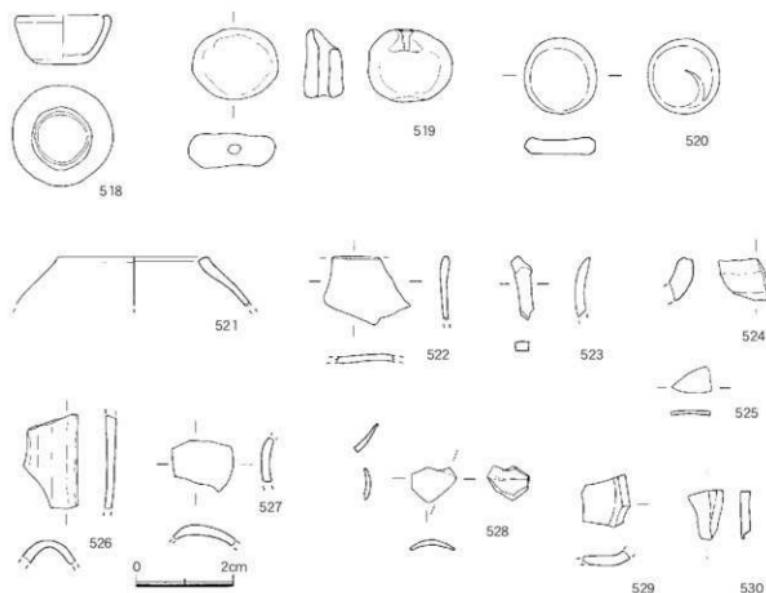
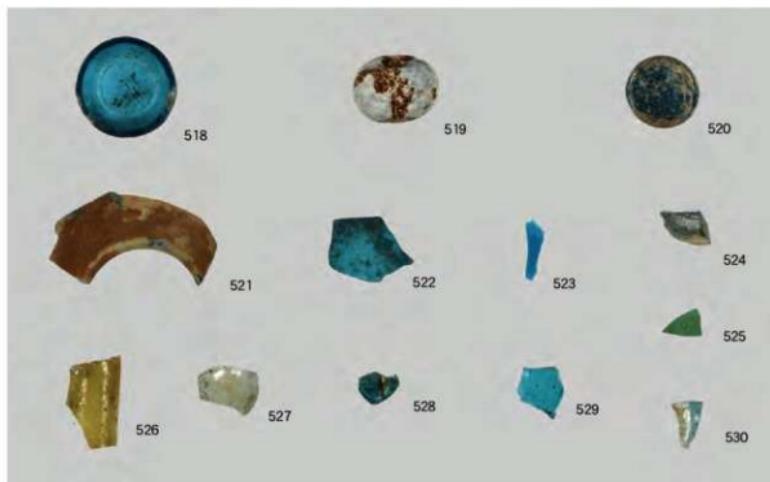


Fig.23 その他ガラス製品実測図②(1/1)



Ph.26 その他ガラス製品②

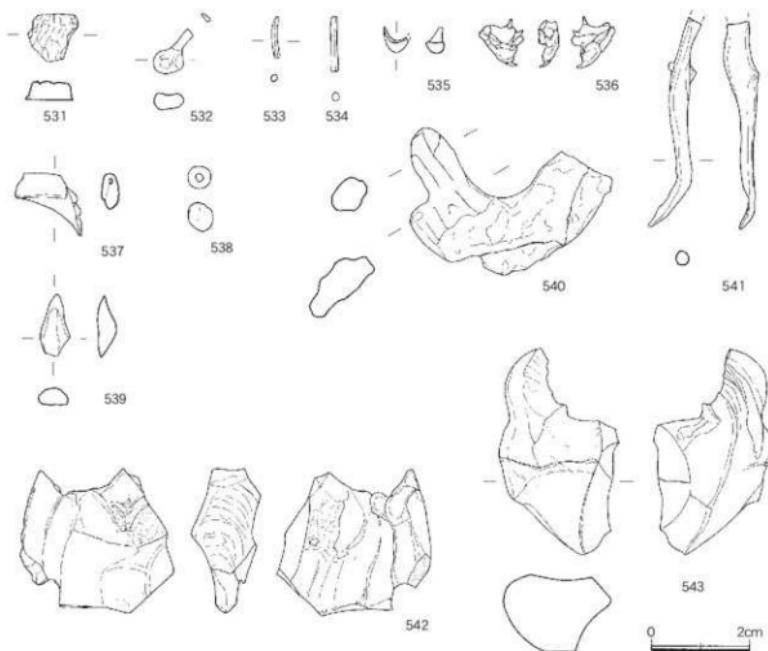


Fig.24 その他ガラス製品実測図③(1/1)



Ph.27 その他ガラス製品③

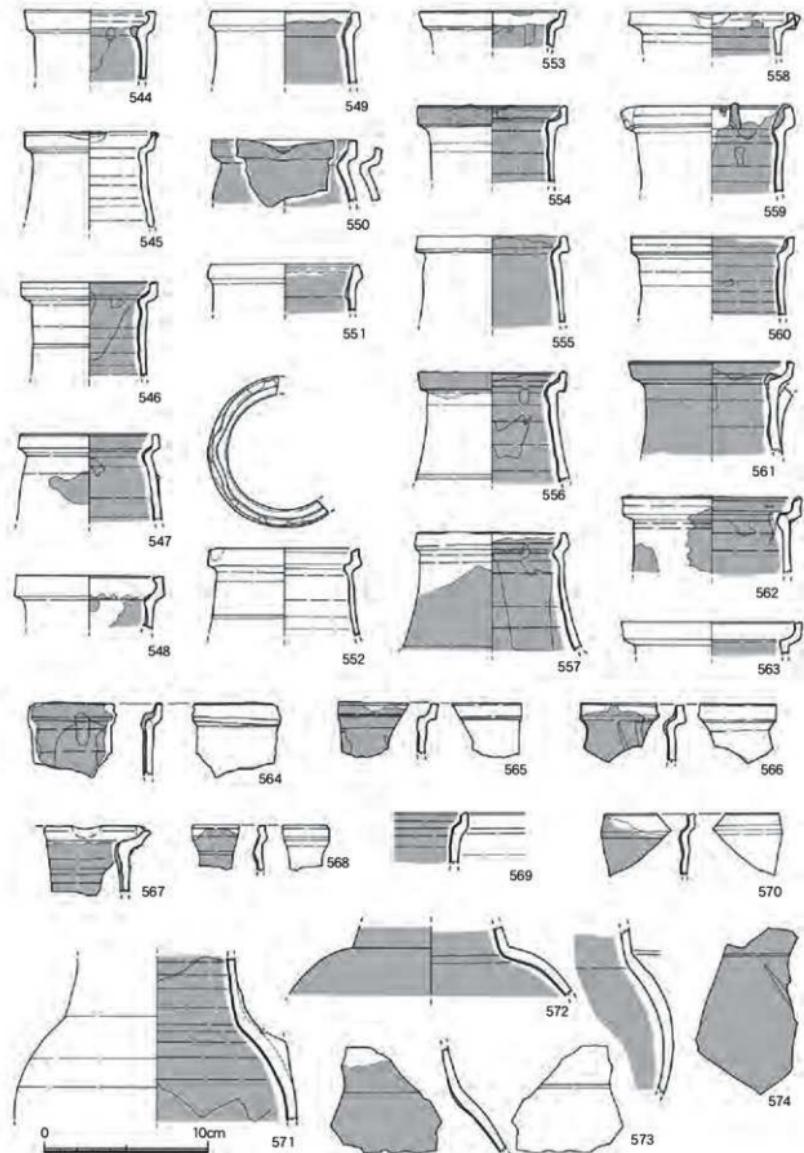


Fig.25 その他ガラス坩堝 (1-a類) 実測図①(1/3)

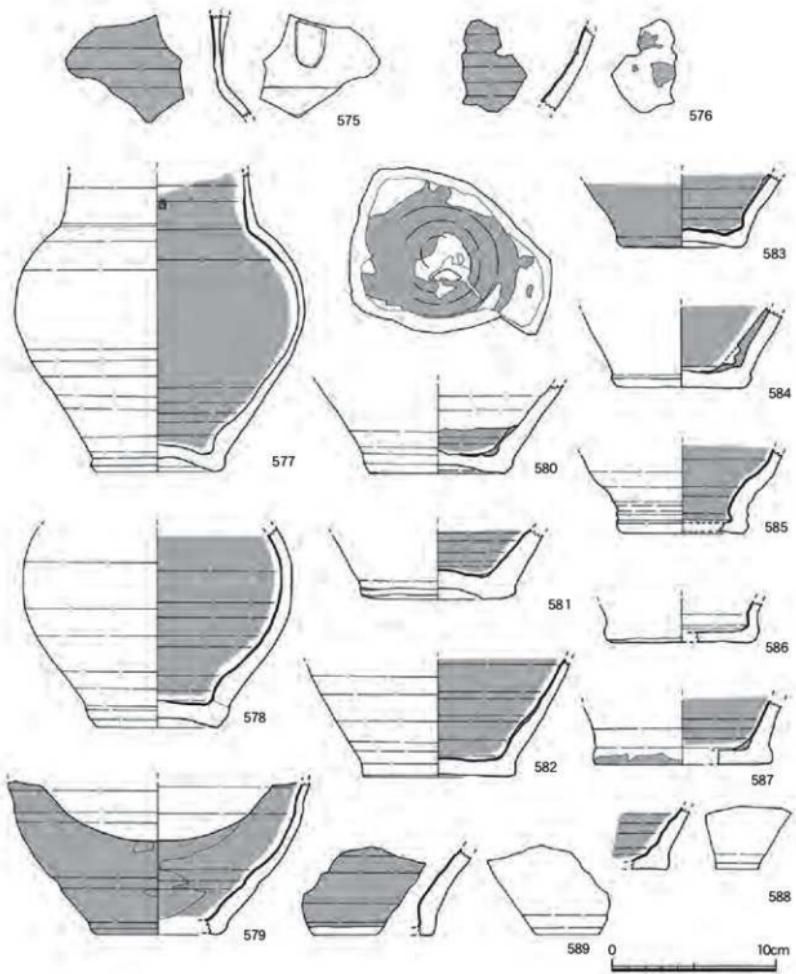
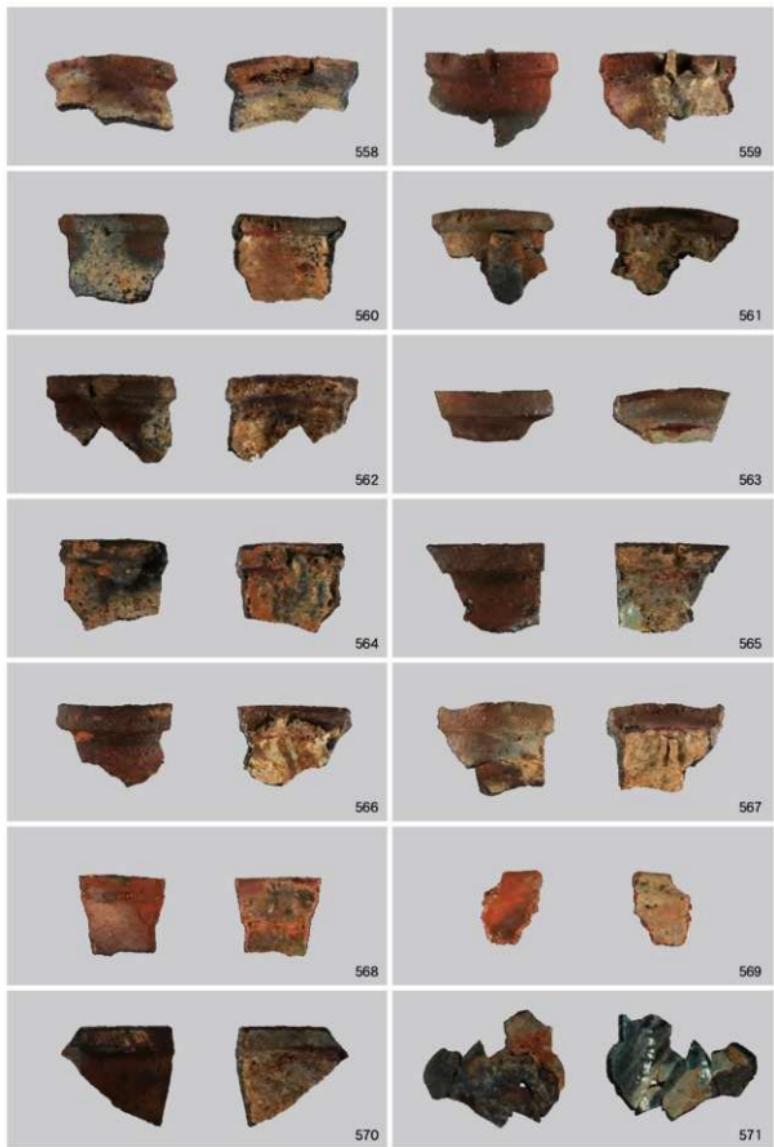


Fig.26 その他ガラス坩堝 (I-a類) 実測図②(1/3)

た色調も見られる。また下の坩堝胎土の色が透けて見えるものがあり、これらは無色とも考えられるが、わずかに色が付いているように見えるため正確な色調は表現しにくい。それ以外の大半は、ガラスの風化により本来の色が失われて乳白色や淡褐色になっている。失敗品や未製品を含むガラス製品の色調と極端に異なるものは見られない。



Ph.28 その他ガラス坩堝 (I-a類) 実測図①(1/3)



Ph.29 その他ガラス坩堝（I-a類）②



Ph.30 その他ガラス坩堝（I-a類）③

これらのガラス坩堝は過去の出土事例を見ると、共伴遺物から 11 世紀後半～14 世紀頃の帰属年代が想定されるが、その中心は 12 世紀と考えられている。今回の調査では、出土の中心となっている遺構は 11 世紀後半～12 世紀前半と見られる。

坩堝の使用状況であるが、現代の手作業によるガラス加工の状況や（土井 2013）、古記録に描かれたもの（岡 2005）を見ると、製品の加工においては坩堝を炉の中に斜めに設置していることが分かる。



Ph.31 その他ガラス坩堝 (I-a類)④

出土品も全体形状が分かるものは、被熱による変色範囲が斜めになっており、同様の使用状況であったことが見て取れる。

#### (5) その他

その他に区分した資料には、金属やガラスの加工に関わると見られる資料の中で、坩堝（溶解容器）以外の資料や、石、土壤、赤色顔料等がある。以下、想定される作業や資料の種類ごとに考古学的所見を中心に記す。

##### 1) 生産関連資料—土製品

坩堝以外で生産関連資料と判断したものは、特定の器種が推定できない形状で熱を受けた痕跡や、

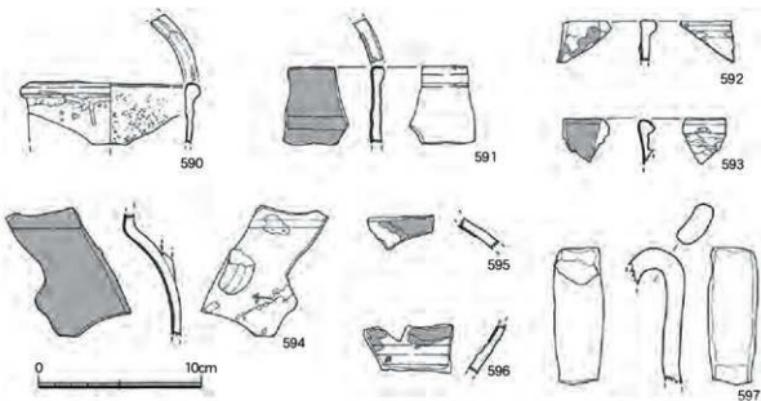
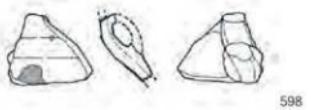


Fig.27 その他ガラス坩堝 (I-b類) 実測図①(1/3)



Ph.32 その他ガラス坩堝 (I-b類)①



598



599

Fig.28 その他ガラス坩堝（I-b類）実測図②(1/3)



598



599

Ph.33 その他ガラス坩堝（I-b類）②

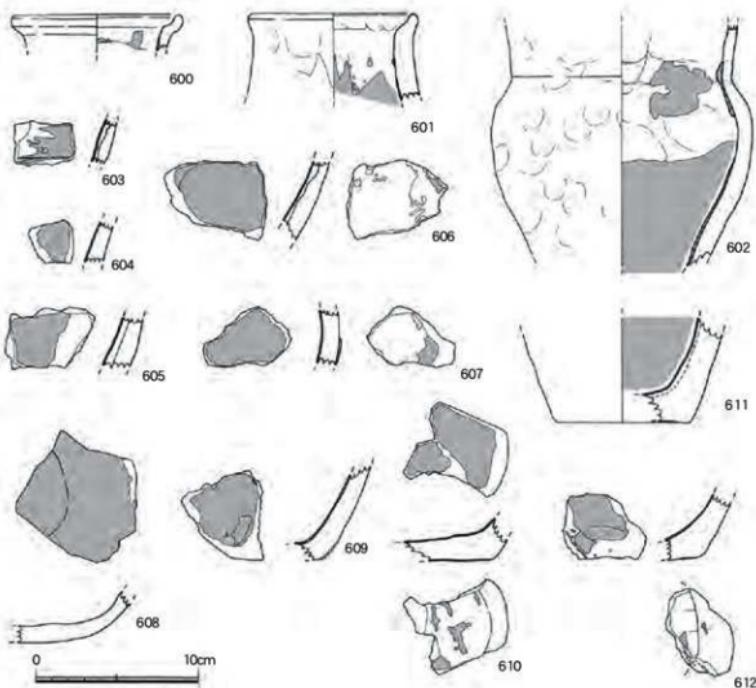


Fig.29 その他ガラス坩堝（II類）実測図（1/3）



Ph.34 その他ガラス坩堝（Ⅱ類）

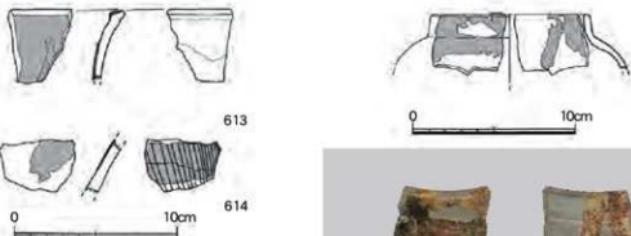


Fig.30 その他ガラス坩堝 (III類) 実測図 (1/3)



Ph.35 その他ガラス坩堝 (III類)

被熱により溶解したガラス、金属と見られる付着物がある資料がある。現状では何らかの溶解炉の一部などと推定しているが、断定には至らない。

金属用かガラス用かの岐別については、付着物の材質分析によって推定が可能な場合もある。例えば60は大形の板状で炉の蓋などの用途が想定される。両面に淡緑色のガラス状物質が付着しており、この部分の材質分析ではガラス製品と同様の結果が得られていることから、ガラスの加工に用いられたものであることが分かる。ただし、今回は全点の材質調査は行えていない。

また、411は復元すると椀を伏せたような形状に復元される土製品である。9区SE090879からの出土である。表面には溶解したガラス状物質が付着する。これも分析によってカリウム鉛ガラスの製品と同様の組成であることが確認できている。これに類する資料は博多172次（市報1086集／未図化）や62次調査（市報397集／Fig.377-2）でも出土している。ただし62次調査の資料は、形状は似通っているが、ガラスの付着は認められない。坩堝のような用途が想定されるものの確証はない。

他にも機種や用途が特定できない焼物も含む。特徴的な資料としては336、337、640、641など三角柱や四角柱を呈する素焼きの土製品がある。これらは、日常の生活用具とは考えにくい形状であり、消去法的に生産関係資料と判断したものである。しかし付着物などは見られず、その用途につながる手がかりがない。資料の時期は、出土遺構などから12世紀代と考えられるものが多く、その事からすればガラス加工に関連する資料の可能性が高いといえる。

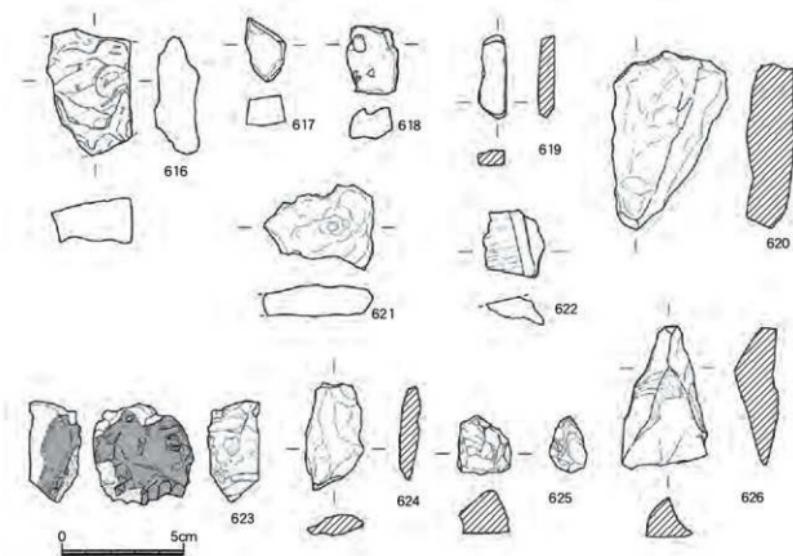


Fig.31 その他ガラス加工関係資料実測図 (1/2)



Ph.36 その他ガラス加工関係資料

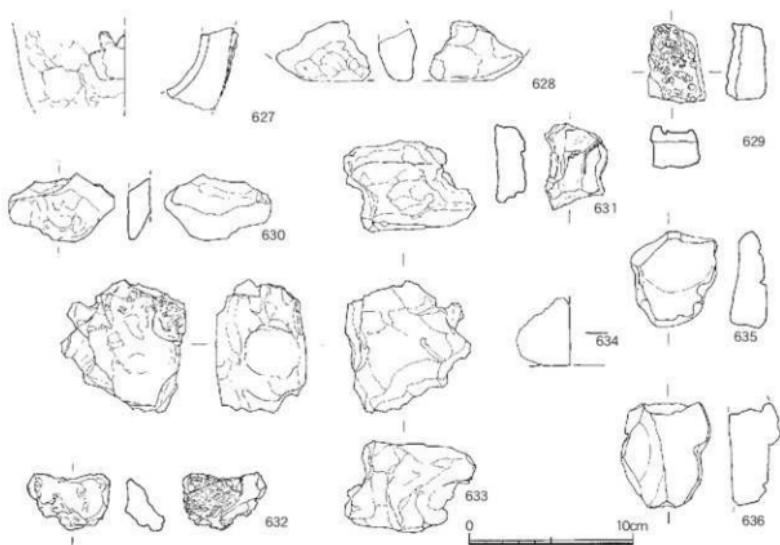


Fig.32 その他ガラス加工関係資料実測図 (1/2)

羽口も 13 点を取り上げ、その内 4 点を図化している (8 区 Fig.3-53、308、637、638)。共伴遺物より古代と見られる資料は 8 区 Fig.3-53 と未図化 (Tab.6-274) の 2 点のみで、他は中世前半 (12 世紀頃) に帰属する。ガラスの加工に関わる可能性がある一方で、中世の鉄滓も出土しており、鍛冶作業に伴う可能性も否定できない。

今回の調査では金属を溶解する容器である坩堝類は多数見つかっているものの、製品を形作るための鋳型は非常に少ない。3 区 Fig.47-714 は鋳型外枠の可能性がある資料である。それが首肯されるならば、板状の形状を呈しており鏡など平坦な製品の製作に用いられたと考えられる。しかし一般的な鏡の鋳型外枠に見られるような、斜格子状の傷は見られない。また共伴遺物の時期も 12 世紀中頃で、金属坩堝との整合は取れない。8 区 Fig.46-570 は唯一明確に鋳型と判断できる資料である。鈴と見られる。箱崎遺跡 40 次調査地点で 10 世紀の類品が 5 点一緒に見つかっている (市報 949 集 / Fig.38)。

この他、642 は卵のような形状の土製品である。炉内で軟化した炉壁などを鉄棒で突いた際に生じたものなどが考えられる。

## 2) 生産関連資料—金属滓

金属加工に伴うと見られる滓も一定量出土している。大半は鉄に関するものとみられるが、非鉄(銅)に関する資料も少量 (数点) 含まれる。鉄滓の詳細については、一部の資料の自然科学的調査が行われているので、そちらを参照いただきたい。

それ以外では灰色で粉を吹いたような質感の重量感のある物質が 48 点ほどある。その内の約 8 割が 9 区の出土で、中でも SKO90771、SEO90878、090879、091125 で複数点みられる。蛍光 X 線分析



Ph.37 その他ガラス加工関係資料

では鉛を主体とする組成である。詳細は後段に譲るが、外観的な所見について多少触れておきたい。これら資料は不定形を基本として大きさもまちまちである。認識当初はガラスの原料である鉛鉱石と考えたが、実体顕微鏡で観察すると様々な鉱物の微粒子（1mm前後の大きさ）が混じりあっていて、その中には同程度の大きさの炭の様な粒子が混在している様子も観察される。またガラスの質感を呈する部分や気泡が表面で破れた球形の窪みが見られる資料もある。このことから、完全な自然物ではなく何らか人の手が加わった人工物と考えられるが、外形や資料の状態からは製品とは考えられない。作業に伴って生じた滓か、原材料、加工途中といった可能性が考えられる。

これらは形状や表面状態を細かく見ると、いくつかの種類に分類できる。一つは板状に区分され、409や410、621などは広い面の片面が平滑で、その反対面は凸凹が生じている状況から、何らかの浅い窪みに広がって固まったように見える（①-A類）。441などは鉱物粒子の混ざり方や気泡の在り方は類似するものの、塊の形状を呈している（①-B類）。①類を詳細に観察すると、淡黄や青白などの色調で不透明～半透明状態を呈する部分がある。また透明感は無いものの淡橙や淡褐色を呈し、